津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集

有本古墳群

―津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告１―

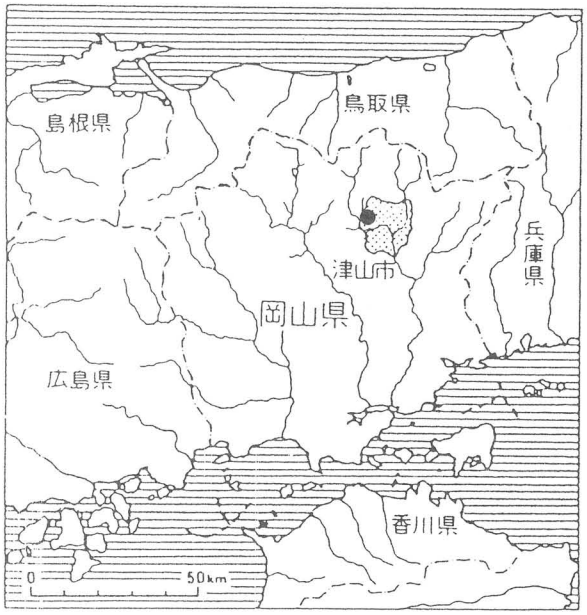
1997

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集

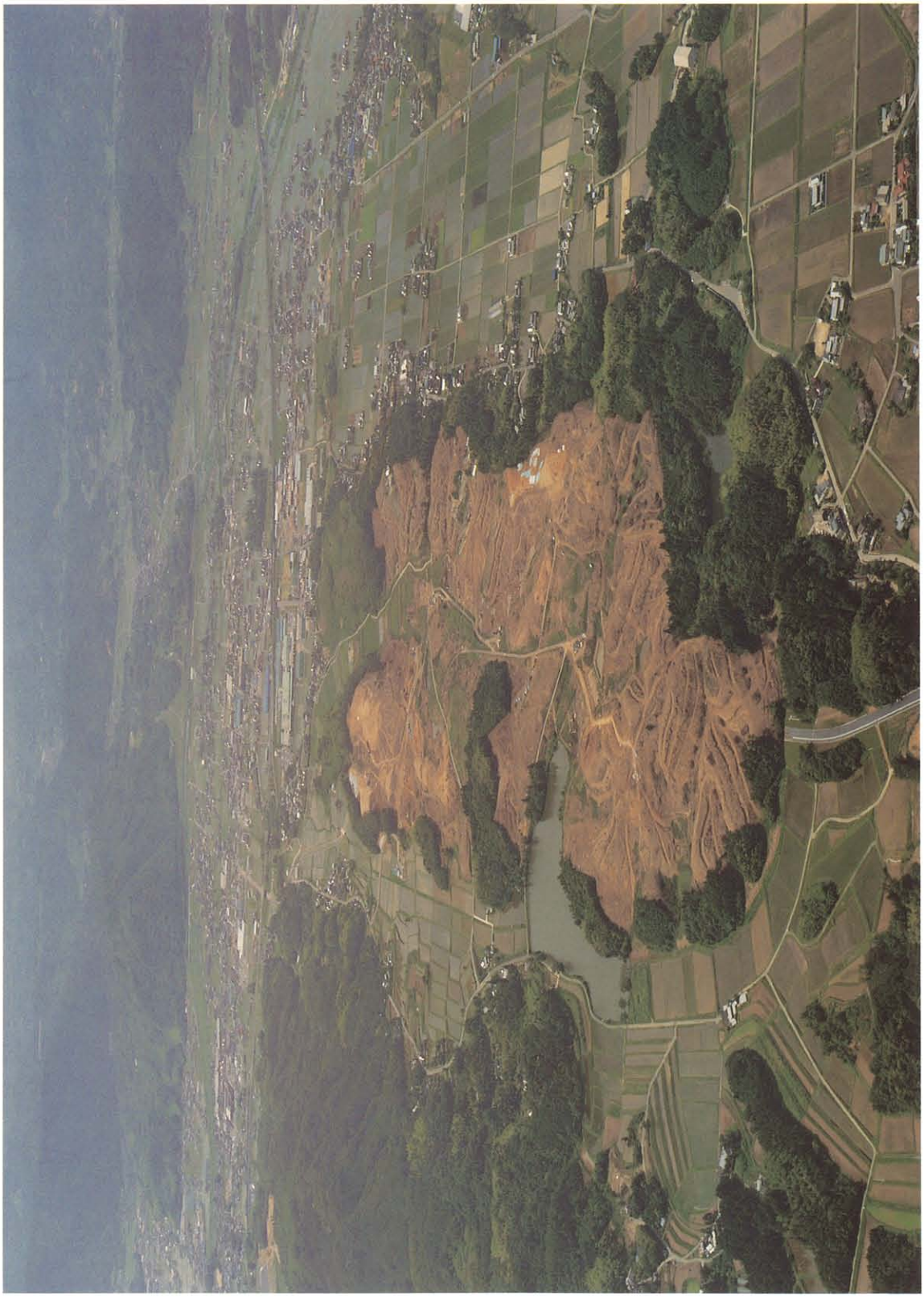
有本古墳群

－津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告１－

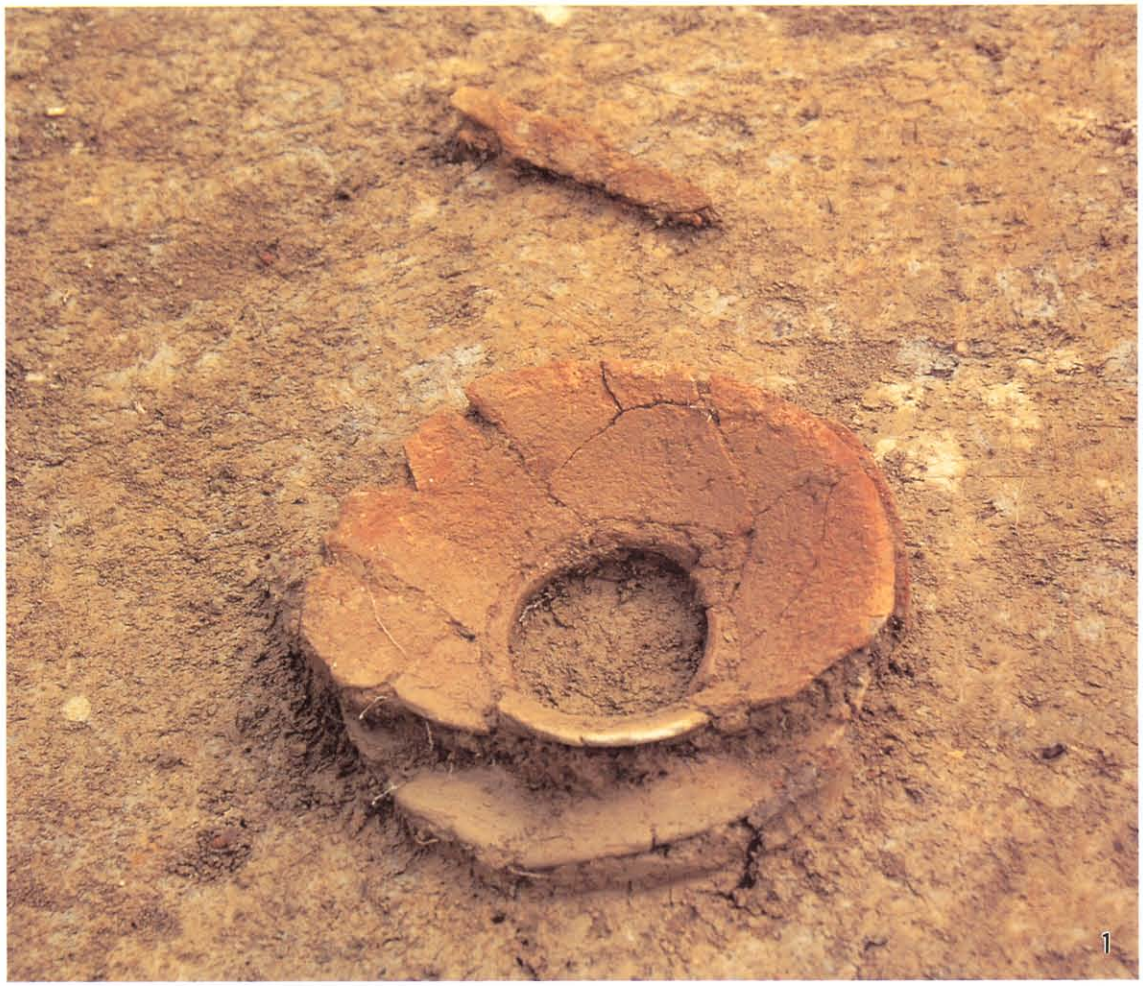


１９９７

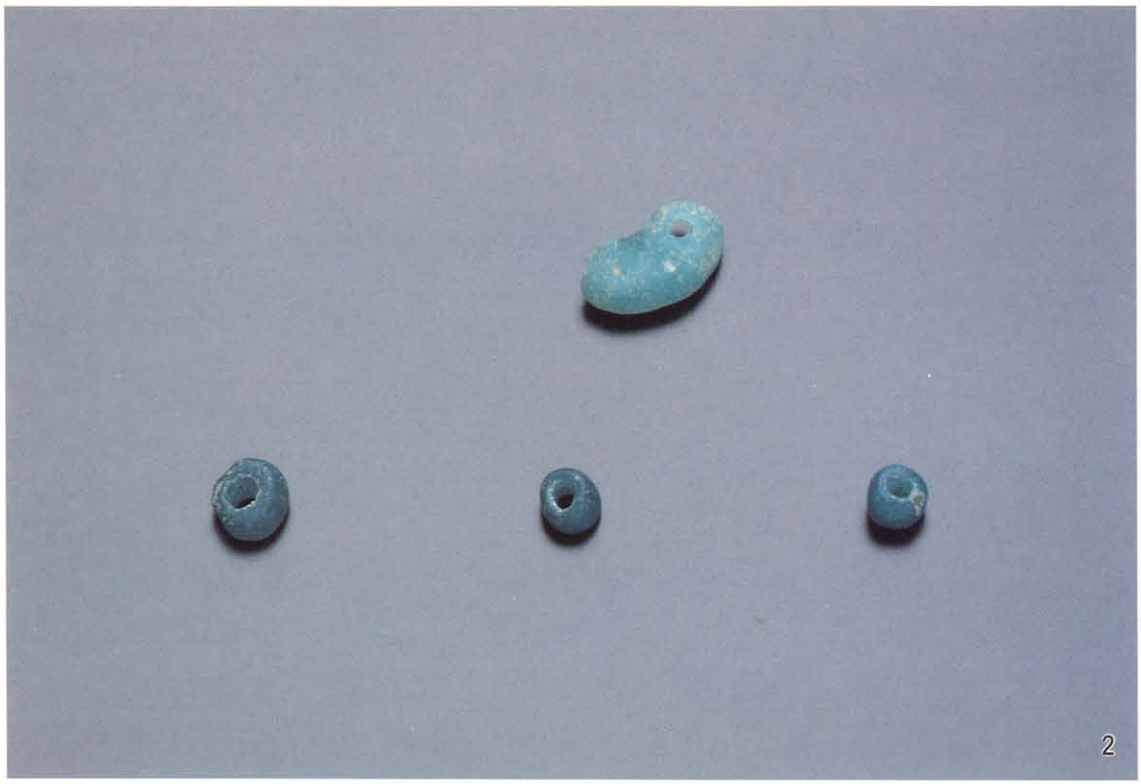
津山市土地開発公社
津山市教育委員会



津山総合流通センター全景（ＲＣスカイワーク提供）



1．1号墳第1主体



2．1号墳第1主体勾玉(上) 3号墳小玉(下)

序

津山市は、中国山地の山並みに囲まれた肥沃な盆地に位置し、太古から先人の足跡をたどることができます。弥生時代の沼住居跡群、古墳時代の美和山古墳群、美作国ができますと国府が置かれ、中世になりますと院庄館跡、江戸時代になりますと津山城を中心に城下町が整備されます。現在の町並みもこれを基盤に発展して参りました。現在、市内を縦断する形で中国自動車道が開通してからは、中核工業団地をはじめ各地に工業団地が誘致され、西日本内陸部の物資流通の拠点として重要な役割を担って参りました。今回の遺跡は、この中国自動車道の院庄インター近くに計画された、津山総合流通センター建設に伴い調査されたものであります。

有本古墳群は、周知の遺跡ではなく今回新たに発見された遺跡であります。調査の結果、古墳はすべて四角い方墳で、埋葬施設としては木棺という木の棺桶が多く使用されており、これら埋葬施設のほとんどが東西方向を向くといった当時の埋葬風習の一端も明らかとなりました。副葬品は非常に少ないのですが、鉄剣、鉄鏃などの鉄製品や勾玉、管玉などの装身具が出土しております。これら調査成果は、美作地方の古墳研究の一助となるものと期待しております。

また、流通センター予定地内では本古墳群を含め７遺跡が調査されております。本報告書はその中の第１分冊となります。その他の遺跡につきましても今後整理作業が済み次第、順次報告書を刊行していく所存であります。

なお、末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成に至るまで多大なるご協力をいただいた津山市土地開発公社、津山市シルバー人材センター並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成９年３月３１日

津山市教育委員会
教育長　松尾　康義

例　　言

1．本書は津山総合流通センター造成に伴う有本（ありもと）古墳群の発掘調査報告書である。

1．津山総合流通センター造成事業で７箇所の遺跡が調査された。報告書は３冊にまとめて刊行する予定であり、本書はその第１冊目である。

1．発掘調査経費はすべて、原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。

1．発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター安川豊史、小郷利幸が担当した。

1．本書の執筆は小郷がおこなった。

1．本書に用いたレベル高は海抜高である。また、方位は平面直角座標系第Ｖ系の北である。

1．本書第３図に使用した「津山総合流通センター内遺跡と周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行５万分の１（津山西部）を複製したものである。

1．整理作業から報告書作成に至るまで、小澤かおり、大谷みゆき、丸王佳苗、橋本玲恵、浅図美恵、野上恭子、岩本えり子、家元博子各諸氏の協力を得た。

1．出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センターに保管している。

1．自然科学的分析として、岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「有本古墳群出土土器の胎土分析」、「有本古墳群・男戸嶋古墳出土の赤色顔料について」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。

本　文　目　次

Ⅰ　津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過 1
1．津山総合流通センター造成に至る経過 1
2．発掘調査に至る経過 1

Ⅱ　津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡 2
1．津山総合流通センター内の遺跡 2
2．周辺の遺跡 6

Ⅲ　有本古墳群 8
1．位置と立地 8
2．調査経過 8
（1）調査に至る経過 8
（2）調査の経過 8
（3）調査体制 13
3．調査の記録 15
（1）1号墳 15
（2）2号墳 24
（3）3号墳 29
（4）4号墳 31
（5）5号墳 38
（6）6号墳 42
（7）7号墳 44

Ⅳ　自然科学的分析 53
1．有本古墳群出土土器の胎土分析 53
2．有本古墳群・男戸嶋古墳出土の赤色顔料について 59

Ⅴ　ま　と　め 64
1．有本古墳群の特質と群構成について 64
2．有本古墳群の時期について 68

挿　図　目　次

第１図　津山市位置図……1
第２図　津山総合流通センター内周知の遺跡(左)と実際に調査した遺跡(右)……3
第３図　津山総合流通センター内遺跡と周辺の遺跡分布図……5
第４図　有本古墳群調査前墳丘測量図……9～10
第５図　有本古墳群墳丘測量図……11～12
第６図　有本１号墳平面図……14
第７図　１号墳断面図……15
第８図　１号墳第１主体平・断面図……16
第９図　１号墳第２主体平・断面図……17～18
第10図　１号墳第３主体平・断面図……19
第11図　１号墳第４主体平・断面図……21
第12図　１号墳出土遺物……22
第13図　有本２号墳平面図……23
第14図　２号墳断面図……24
第15図　２号墳第１主体平・断面図……25～26
第16図　２号墳第２主体平・断面図……27
第17図　２号墳出土遺物……28
第18図　有本３号墳平・断面図……29
第19図　３号墳主体平・断面図及び遺物出土状況……30
第20図　３号墳出土遺物……30
第21図　有本４号墳平・断面図……32
第22図　４号墳第１主体平・断面図……33～34
第23図　４号墳第２主体平・断面図……35
第24図　４号墳出土遺物……36
第25図　有本５号墳平面図……37
第26図　５号墳断面図……38
第27図　５号墳葺石平・断面図……39
第28図　５号墳主体平・断面図及び出土遺物……40
第29図　有本６号墳平面図……41
第30図　６号墳断面図……42
第31図　６号墳第１主体平・断面図及び出土遺物……43
第32図　６号墳第２主体平・断面図及び出土遺物……44
第33図　有本７号墳平面図……45
第34図　７号墳断面図……46
第35図　７号墳第１主体平・断面図及び出土遺物……47～48
第36図　７号墳第２主体平・断面図……49
第37図　７号墳土器棺１平・断面図……50
第38図　７号墳土器棺１出土遺物……51
第39図　７号墳土器棺２平・断面図及び出土遺物……52
第１図　K_2O-CaO 散布図 美作、山陰地方の各遺跡の比較(白石氏分析)……56
第２図　Sr-Rb 散布図　美作、山陰地方の各遺跡の比較……56
第３図　K_2O-CaO 散布図 有本１号・２号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡出土の鼓形器台と山陰地方の土器との比較……57
第４図　Sr-Rb 散布図 有本１号・２号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡出土の鼓形器台と山陰地方の土器との比較……57
第５図　K_2O-CaO 散布図 津山市内の各遺跡出土土器と山陰地方の土器との比較……58
第６図　Sr-Rb 散布図 津山市内の各遺跡出土土器と山陰地方の土器との比較……58
第１図　有本１号墳第１主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート……61
第２図　有本１号墳第３主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート……61
第３図　有本４号墳第１主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート……62
第４図　有本４号墳第２主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート……62
第５図　男戸嶋古墳主体部出土赤色顔料の蛍光Ｘ線部析チャート……63
第６図　男戸嶋古墳周溝外甕内(底付近)出土赤

色顔料の蛍光X線部析チャート……63
第40図　有本古墳群木棺推定規模
及び主軸方向比較図……65
第41図　岡山県内鼓形器台を枕に
使用する埋葬施設……67

表　目　次

第１表　津山総合流通センター地内遺跡調査
一覧表……4
第２表　３号墳出土玉類一覧表……30
表１　分析試料一覧表(白石氏分析)……55
表１　有本古墳群・男戸嶋古墳出土赤色顔料
の蛍光X線分析による分析結果
(白石氏分析)……60
第３表　有本古墳群一覧表……64

図　版　目　次

巻頭図版１　津山総合流通センター全景
２－１　１号墳第１主体
２　１号墳第１主体勾玉(上)３号墳小玉(下)
図版１－１　有本古墳群周辺
２　有本古墳群周辺
３　有本古墳群周辺
図版２－１　有本古墳群全景
２　調査風景
３　現地説明会
図版３－１　有本１号墳全景
２　１号墳埋葬施設
３　１号墳盛土
図版４－１　１号墳第１主体
２　１号墳第１主体出土遺物
図版５－１　１号墳第１主体出土遺物
２　１号墳第１主体出土遺物
３　１号墳第１主体床面粘土
図版６－１　１号墳第２主体
２　１号墳第２主体出土遺物
図版７－１　１号墳第３主体
２　１号墳第３主体枕石付近
図版８－１　１号墳第４主体
２　１号墳第４主体枕石
図版９－１　１号墳周溝
２　有本２号墳全景
３　２号墳周溝
図版10－１　２号墳第１主体
２　２号墳第１主体出土遺物
図版11－１　２号墳第１主体出土遺物
２　２号墳第１主体出土遺物
３　２号墳第２主体
図版12－１　有本３号墳全景
２　３号墳主体
図版13－１　３号墳主体出土遺物
２　有本４号墳全景
３　４号墳埋葬施設
図版14－１　４号墳第１・２主体検出状況
２　４号墳第１主体作業風景
図版15－１　４号墳第１主体
２　４号墳第１主体小口部分
図版16－１　４号墳第１主体側石部分
２　４号墳第１主体出土遺物
３　４号墳第１主体出土遺物
図版17－１　４号墳第２主体
２　４号墳第２主体出土遺物
図版18－１　４号墳第２主体枕石

2　有本５号墳全景
3　５号墳葺石状況
図版19－１　５号墳葺石状況
2　５号墳主体
3　５号墳主体出土遺物
図版20－１　有本６号墳全景
2　６号墳第１主体
3　６号墳第２主体
図版21－１　６号墳周溝
2　有本７号墳全景
3　７号墳埋葬施設
図版22－１　７号墳第１主体
2　７号墳第１主体枕石
図版23－１　７号墳第２主体
2　７号墳第２主体出土遺物
図版24－１　７号墳土器棺１検出状況
2　７号墳土器棺１
3　７号墳土器棺２
図版25　出土遺物（１）
図版26　出土遺物（２）
図版27　出土遺物（３）

Ⅰ　津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過

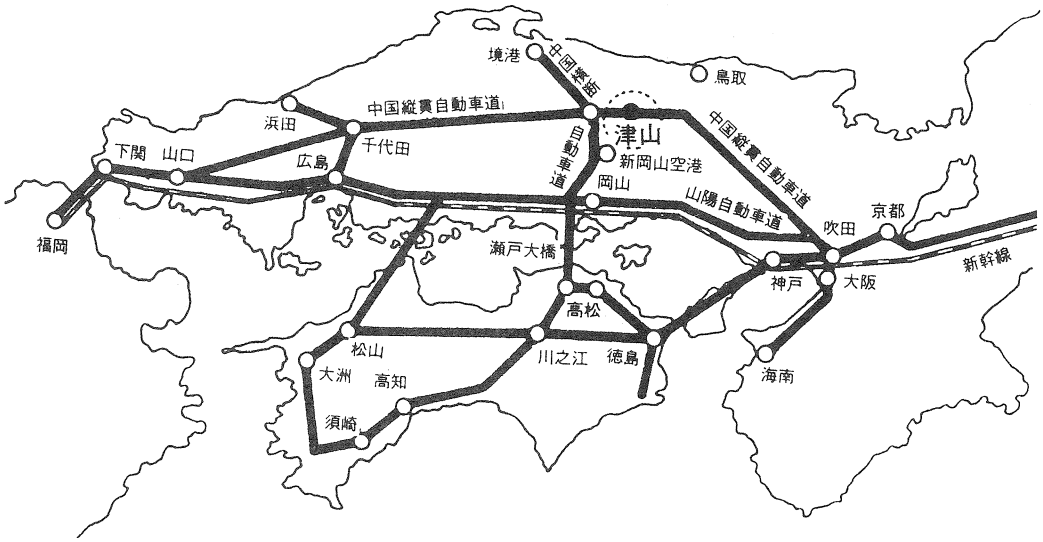
１．津山総合流通センター造成に至る経過

津山市は、岡山県の北部、中国山地と吉備高原の中間に位置し人口約８万９千人、南北19㎞、東西15㎞、面積約185㎢、面積の約54％を山林・原野が占め、宅地となっているのは約11％ほどである。盆地の東から南へと県内三大河川の吉井川が、加茂川や広戸川など多くの支流をしたがえて流れている。本市の地質は、主に古生層と第三紀層、第四紀層で構成されている。また、市内最高峰は加茂町との境にある天狗寺山（831.8m）である。

この盆地をぬうように昭和50年中国自動車道が開通し、市内に２つのインターチェンジ（津山・院庄）が設けられる。これが産業・教育・文化等あらゆる面に多大なる影響を与え、これを契機に工業団地（院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地、津山中核工業団地）の造成が各地で行われた。この事により阪神地域や九州地域などとの物流の拠点として、中国地方内陸部の中核都市としてますますの発展が期待された。その後、中国横断道が米子さらには総社まで開通し、瀬戸大橋を経由する事により山陰・四国地方を含めた高速交通網が整い、さらに広範囲の物流も可能となる。また、岡山空港の整備からさらに流通網が徐々にではあるが整いつつある。その中で、21世紀へ飛躍する物流・情報の発信基地、情報により高度化した流通団地の形成と情報ネットワークによる配送システムの確立をめざし、中国自動車道院庄インターチェンジ近くに計画されたのが、津山総合流通センターである。

２．発掘調査に至る経過

津山総合流通センター建設予定地は、津山市と鏡野町との境に位置する約93ha である。そのほとんどが津山市分であるものの鏡野町分もあるため、開発主体の津山市土地開発公社、鏡野町教育委員会、津山市教育委員会の三者が、埋蔵文化財の取り扱いについて事前に協議を行った。その結果敷地内の鏡野町分については同町教育委員会が、その他の津山市分については同市教育委員会が、埋蔵文化財の有



第１図　津山市位置図

無を確認し、あわせて発掘調査を担当する事とした。その後平成７年３月に造成計画の工程が確定したため、その工程計画に合わせ、埋蔵文化財の調査を実施する事とした。

平成７年６月26日付津土公第17号で文化財保護法第57の３第１項に基づき、津山市土地開発公社理事長中尾嘉伸から「埋蔵文化財発掘の通知」が文化庁長官に提出された。この段階では周知の遺跡として認識されていたのは、田邑丸山古墳群と戸島・戸島Ｂ遺跡だけであった。しかし、開発面積が広いため、これら以外についても地形的に遺跡の立地が予想される部分については、立木伐採後に分布調査を実施する事とした。この分布調査の結果、遺跡の立地が広範囲に及ぶと予測されたので、必要箇所については確認調査を実施する事とした。確認調査はバックホーを借り上げ、幅２ｍ程のトレンチを尾根の稜線に直行するように設定した。その結果、遺跡は敷地の東側丘陵に存在する事が判明したため、全面発掘調査は避けられない結果となった。発掘調査の対象となったのは、有本古墳群、有本遺跡（Ａ・Ｂ地区）、上遠戸嶋遺跡、男戸嶋遺跡、男戸嶋古墳、荒神峪遺跡、有元遺跡の７遺跡である。発掘調査に先立ち平成７年７月１日付、津教委文第48号により津山市教育委員会教育長藤原修己から文化財保護法第98条の２第１項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」が文化庁長官宛に提出された。なお、田邑丸山古墳群については現状のまま保存される事となった。

Ⅱ　津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡

１．津山総合流通センター内の遺跡

津山総合流通センターは、津山市上田邑、下田邑、戸島、鏡野町布原、沖にまたがる約93ha が建設予定の敷地である。その大半を占める津山市分の中に、周知の遺跡として認識されていたのは、第２図左のとおり戸島・戸島Ｂ遺跡（男戸嶋遺跡の一部）と田邑丸山古墳群だけであった。今回の調査に先立ち立木伐採前に事前に分布調査を行い、その最新たに有本古墳群の一部を確認した。さらに立木伐採前の段階では樹木の繁茂がはげしく古墳の確認も困難であり、集落遺跡の存在する可能性の大きい丘陵も存在する事から、立木伐採後に再度分布調査を行い、あわせてトレンチ調査による確認調査を実施する事とした。その際の調査面積は約153,000㎡である。その結果第２図右のとおり６遺跡（有本遺跡、上遠戸島遺跡、男戸島古墳、男戸島遺跡、有元遺跡、荒神峪遺跡）を新たに確認し、結局流通センター建設予定地内の遺跡（津山市分）は合計８遺跡となり、田邑丸山古墳群が保存される以外はすべて発掘調査が行われる結果となった。発掘調査面積は約37,000㎡である。なお、鏡野町分については葡萄田頭遺跡と槙之木峪古墳の２遺跡が発掘調査の対象となった。

以下、各遺跡の概要を記す事にする。

（１）**有本古墳群**（ありもと、第２図１）

方墳７基からなる古墳群である。埋葬施設はいずれも東西方向を向いており、竪穴式石槨が１基ある以外はほとんど木棺を使用している。内部に枕石を置くものの他に鼓形器台を転用しているものもある。副葬品としては、鉄剣、鉄鏃などの鉄製品の他、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などの装身具が出土している。これら出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる（本報告書参照）。

（２）**有本遺跡**（ありもと、同２・３）

弥生時代後期の集落遺跡が中心であり、便宜的にＡ・Ｂ両地区にわけている。Ａ地区は住居跡４軒、建物跡６軒、貯蔵穴４基などがある。Ｂ地区は集団墓地である。溝や石列による区画が３基ありこの区

a．田邑丸山古墳群
b．戸島遺跡
c．戸島Ｂ遺跡

1．有本古墳群
2．有本遺跡（Ａ地区）
3．　〃　（Ｂ地区）
4．上遠戸嶋遺跡
5．男戸嶋古墳
6．男戸嶋遺跡
7．荒神峪遺跡
8．有元遺跡
9．田邑丸山古墳群
10．葡萄田頭遺跡
11．槙之木峪古墳

第２図　津山総合流通センター内周知の遺跡（左）と実際に調査した遺跡（右）（Ｓ＝１：10,000）

画内外で約140基の土壙墓を検出した。鉄鏃、ガラス製管玉の他特殊器台の破片が出土している。これ以外に江戸時代の近世墓16基と弥生時代中期の段状遺構も検出している。

（3）**上遠戸嶋遺跡**（かみおんどしま、同4）

弥生時代中期の集落遺跡であり、住居跡1軒を確認した。この住居から石斧、石錘、砥石などが出土している。

（4）**男戸嶋古墳**（おんどしま、同5）

直径17m、高さ1.8m程の円墳で、周溝が部分的にめぐっている。埋葬施設は木棺1基で主軸は北東方向を向いている。副葬品として鉄刀2、鉄鏃、刀子などがある。特に鉄鏃は複数が束となってまとまって出土している。また、周溝外に土師器の甕に赤色顔料を詰め高杯で蓋をしたものがあり、その周辺から滑石製の小玉も1点出土している。

（5）**男戸嶋遺跡**（おんどしま、同6）

弥生時代中期の集落遺跡と近世墓からなる。弥生時代の集落は、住居跡18軒、建物跡7軒、貯蔵穴などからなる。住居跡から碧玉製の管玉が出土している。近世墓は9基あり、寛永通宝、くしなどが出土している。

（6）**荒神峪遺跡**（こうじんざこ、同7）

弥生時代後期の集落遺跡。住居跡20軒、建物跡3軒、貯蔵穴などからなる。住居跡には直径が11mを測る大形住居もある。石包丁や青銅製の銅釧、ガラス製の勾玉、小玉などが出土している。その他、縄

番号	遺跡名	調査面積(m²)	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定
1	有本古墳群	4,000	H7.8.1～12.4	安川・小郷	平成8年度
2	有本遺跡(A地区)	4,500	H7.9.1～10.13	〃	平成9年度
3	〃 (B地区)	2,800	H7.10.13～H8.4.10	小郷	〃
4	上遠戸嶋遺跡	400	H8.12.12～12.15	安川・小郷	〃
5	男戸嶋古墳	650	H8.2.16～2.28 5.7～6.14	小郷	〃
6	男戸嶋遺跡	14.000	H8.2.29～10.8	安川・小郷	〃
7	荒神峪遺跡	6,800	H8.5.15～12.24	小郷	平成10年度
8	有元遺跡	3,200	H8.10.4～H9.1.20	安川	〃

第1表　津山総合流通センター地内遺跡調査一覧表(番号は第2図に対応)

文時代と考えられる落とし穴や近世墓などがある。

（7）**有元遺跡**（ありもと、同8）

弥生時代後期と古墳時代後期の集落遺跡である。弥生時代は住居跡2軒、貯蔵穴などを検出した。古墳時代としては、住居跡4軒、建物跡2軒、段状遺構などを検出し、須恵器、土師器、鉄滓が出土している。

1．津山総合流通センター内遺跡
2．大開遺跡
3．竹田遺跡
4．アモウラ東遺跡
5．アモウラ遺跡
6．二宮大成遺跡
7．二宮遺跡
8．九番丁場遺跡
9．田邑丸山古墳群
10．東花穴古墳群
11．赤峪古墳
12．土居天王山古墳
13．土居妙見山古墳
14．竹田妙見山古墳
15．古川3号墳
16．大開遺跡
17．郷観音山古墳
18．美和山古墳群
19．狐塚古墳
20．門の山古墳群
21．寺山古墳群
22．美作国府跡
23．久米廃寺
24．宮尾遺跡
25．院庄館跡
26．神楽尾城跡

第3図　津山総合流通センター内遺跡（トーン部分）と周辺の遺跡分布図（S＝1：50,000）

（8）**田邑丸山古墳群**（たのむらまるやま、同9）

円墳9基で構成されていたが現存するのは5基である。その内1号墳は直径37m程の円墳で竪穴式石槨から乳文鏡1面、鉄斧、剣、車輪石形銅器2点が出土している。2号墳は、円墳と考えられていたが、確認調査の結果全長40m程の前方後方墳で竪穴式石槨から鏡が4面出土したと伝えられているが所在不明である。3～5号墳については出土遺物は知られていない。また、9号墳（古墳がどうかは不明）から鼓形器台の破片が発見されている。本古墳群（1～5号墳）は緑地公園として整備される予定である（註1）。

（9）**葡萄田頭遺跡**（ぶどうだがしら、鏡野町、同10、註2）

弥生時代中期から後期の集落遺跡。住居跡、建物跡、貯蔵穴、木棺墓などを検出。

（10）**槙之木峪古墳**（まきのきざこ、鏡野町、同11、註2）

円墳で埋葬施設は木棺と推定される。須恵器が出土しており、6世紀後半ごろの古墳である。

2．周辺の遺跡

津山総合流通センターは、吉井川の支流戸島川右岸の南北に長い低丘陵一帯が敷地であり、樹枝状に小さな丘陵が派生している。周辺では西側の鏡野町布原地区にかなり広い平野部が存在するが、反対の東側は西側ほど広くはなく、どちらかと言えば奥まった地形である。そのため集落としての生活基盤を周辺に求めると西側の布原地域の方が重要視されていたと考えられる。この事が周辺の遺跡の分布状況（西側の鏡野町側に多い）からも伺える。

以下周辺の遺跡を時代別に概観してみる（第3図参照）。

（旧石器・縄文時代）

旧石器時代の遺跡としては、大開遺跡（津山市、註3）が唯一知られており、ナイフ形石器が1点出土している。この遺跡では縄文時代早期の押型文土器や石鏃などが出土しているが明確な遺構は確認されていない。同じく早期の遺跡として、竹田遺跡（註4）がある。この遺跡では住居跡6軒などの遺構が検出され、数多くの土器片と石鏃などが出土している。流通センター内の遺跡では遺物の出土はほとんどないが、狩猟用の落とし穴と考えられる遺構が多数検出されている。

（弥生時代）

この時代は丘陵上に集落が営まれている事が多い。中国自動車道建設などに伴い調査された二宮大成遺跡（註5）、二宮遺跡（註6）、アモウラ遺跡（註7）などがあり、大開遺跡（津山市）では、住居跡4軒が検出され板状鉄斧が出土している。また竹田遺跡（註8）では、列石による区画をもつ墳墓が調査されている。この墳墓は埋葬施設として土壙墓14基、土器棺4基があり、後期前半頃の所産である。また、九番丁場遺跡（註9）では、直径11.9mの大形住居からガラス製の管玉が出土している。

（古墳時代）

集落遺跡としては西側布原地域の平野部に大開遺跡（鏡野町、註10）があり古墳時代初頭の住居跡が検出されている。また、アモウラ東遺跡（註11）では、住居跡や段状遺構が検出され鉄滓や須恵器、土師器が多量に出土し、6世紀末から7世紀初頭頃と考えられている。古墳では吉井川の流域と内陸部では、古墳群の構成が大きく異なっている。内陸部では円・方を主体とした古墳群であるのに対し、流域では前方後円墳が一定間隔に築かれている。内陸部では流通センター予定地内の有本古墳群（方墳）、東花穴古墳群（方墳7基、註12）などがあり、前方後円墳は見られない。逆に吉井川流域では、美作最

大の美和山１号墳（全長80m註13)、狐塚古墳（全長60m註14)、郷観音山古墳（全長43m註15)、古川３号墳（全長30m註16)、赤峪古墳（全長45m註17)、竹田妙見山古墳（全長36m註18)、土居天王山古墳（全長27m註19）などがあり、首長の系譜がある程度たどれる地域である。

（古代以降）

古代になり東４㎞に美作国府（註20）が沖積地を臨む段丘上につくられると、南西３㎞には出雲街道沿いに久米郡衙に比定されている宮尾遺跡（註21)、久米廃寺（註22）が隣接して存在する。また、中世になると院庄館跡（註23）が南1.5㎞に置かれる。この事から、おそらくこの辺りが古代～中世にかけて交通の要所であった事が伺える。ただ近世になるとこの院庄もお城の候補地としてあげられるが、東５㎞の鶴山に津山城が築かれ、同時に城下町や街道が整備されていく。

(註１)土居徹他「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報１』津山市教育委員会1975
整備に伴い、1997年に確認調査を実施。
(註２)鏡野町教育委員会立石盛詞氏に御教示を得た。
(註３)平岡正宏「大開古墳群・大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会1994
(註４)土居徹「竹田遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註５)栗野克巳他「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
(註６)高畑知功他「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会1979
(註７)1981～1982年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。
(註８)今井堯他『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会1984
(註９)氏平昭則「九番丁場遺跡」『最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会』1996
(註10)鏡野町教育委員会が1994年～1995年、岡山県教育委員会が1995年に調査。
井上弘「国道179号改良工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告26』岡山県教育委員会1996
(註11)行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会1990
(註12)立石盛詞「鏡野町東花穴古墳群の調査」『調査団ニュース第３号』岡山県遺跡保護調査団1992
(註13)中山俊紀「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会1992
(註14)小郷利幸「狐塚古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
(註15)土居徹「郷観音山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註16)安川豊史「古川３号墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
(註17)近藤義郎「赤峪古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986
(註18)土居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」『古代吉備第６集』古代吉備研究会1969
(註19)安川豊史「土居天王山古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社1991
(註20)岡田博他「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６』岡山県教育委員会1973
岡田博「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
安川豊史「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集』津山市教育委員会1994
平岡正宏「美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第２号』津山弥生の里文化財センター1995
安川豊史他「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第56集』津山市教育委員会1995
平岡正宏「美作国府跡（藤森地点）の調査」『年報津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター1996
(註21)橋本惣司他「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
(註22)栗野克巳「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会1973
栗野克巳「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会1978
(註23)河本清『史跡院庄館跡発掘調査報告』津山市教育委員会1974
行田裕美「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第７集』津山市教育委員会1981

Ⅲ　有本古墳群

１．位置と立地

有本古墳群は、岡山県津山市下田邑2237番地他に所在する。吉井川の支流戸島川の上流やや奥まった所には灘池があり、その南側には現在谷を挟んで南北方向の丘陵が二筋伸びている。これら丘陵の内、西側は隣の鏡野町との境界が稜線上をとおり東西方向を向いた馬の背状の痩せた丘陵である。逆に東側の丘陵は、比較的平坦で地形的に見ても、古墳や集落遺跡の存在しそうな南北方向の比較的なだらかな地形である。本古墳群はその東側丘陵中央よりの南北に伸びた丘陵頂部に立地する。北から７基の古墳が南北に並んでおり､北からそれぞれ１～７号墳と呼称している。１～３号墳は稜線からやや東側に下った所、４～７号墳はほぼ稜線上に築かれている。南北両端の１号墳と７号墳の標高が高く、その内７号墳が最高所に立地している。古墳群から西側は奥まった谷水田しか望めず、どちらかと言えば東側の平野部の方が眺望がよく、そのためこの東側平野部をかなり意識して構築されているものと推測される。この平野部との比高差は24ｍ程である。

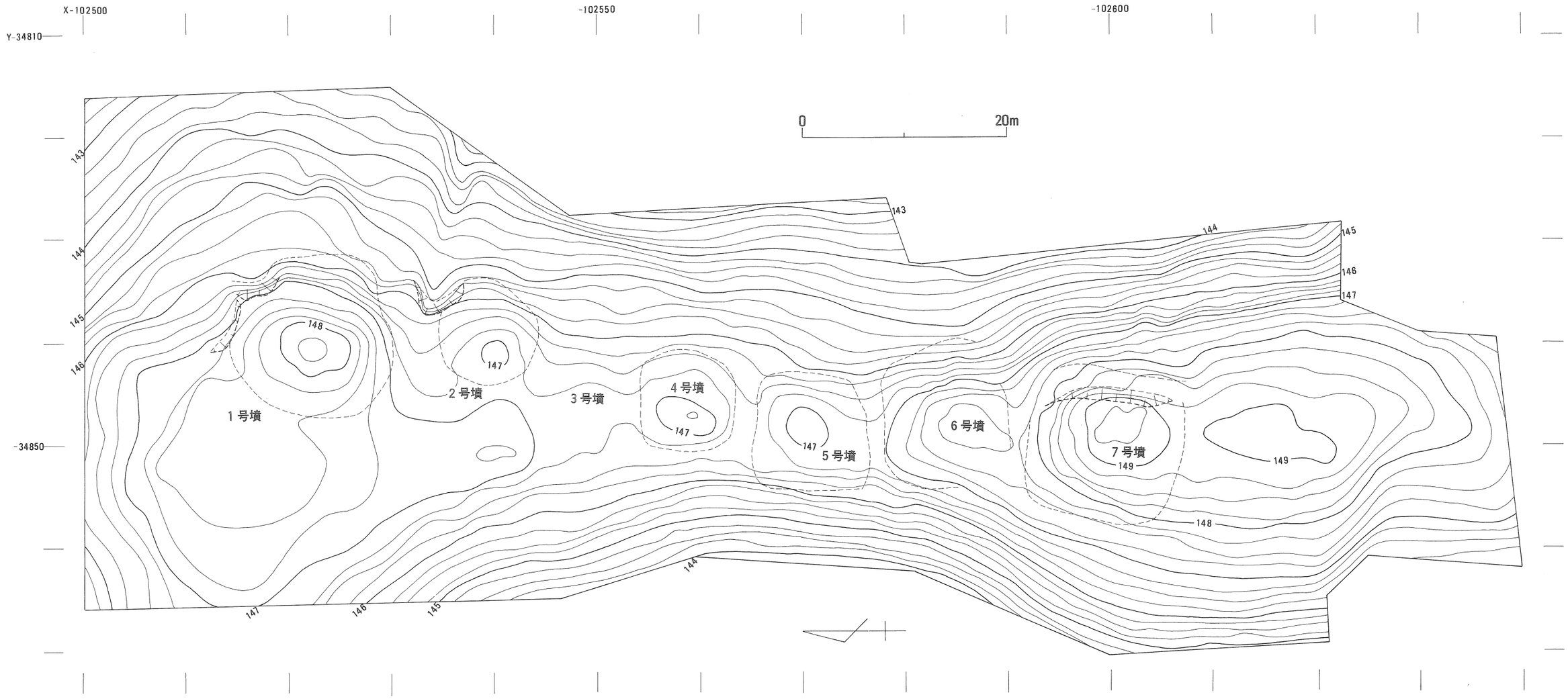
２．調査経過

（１）調査に至る経過

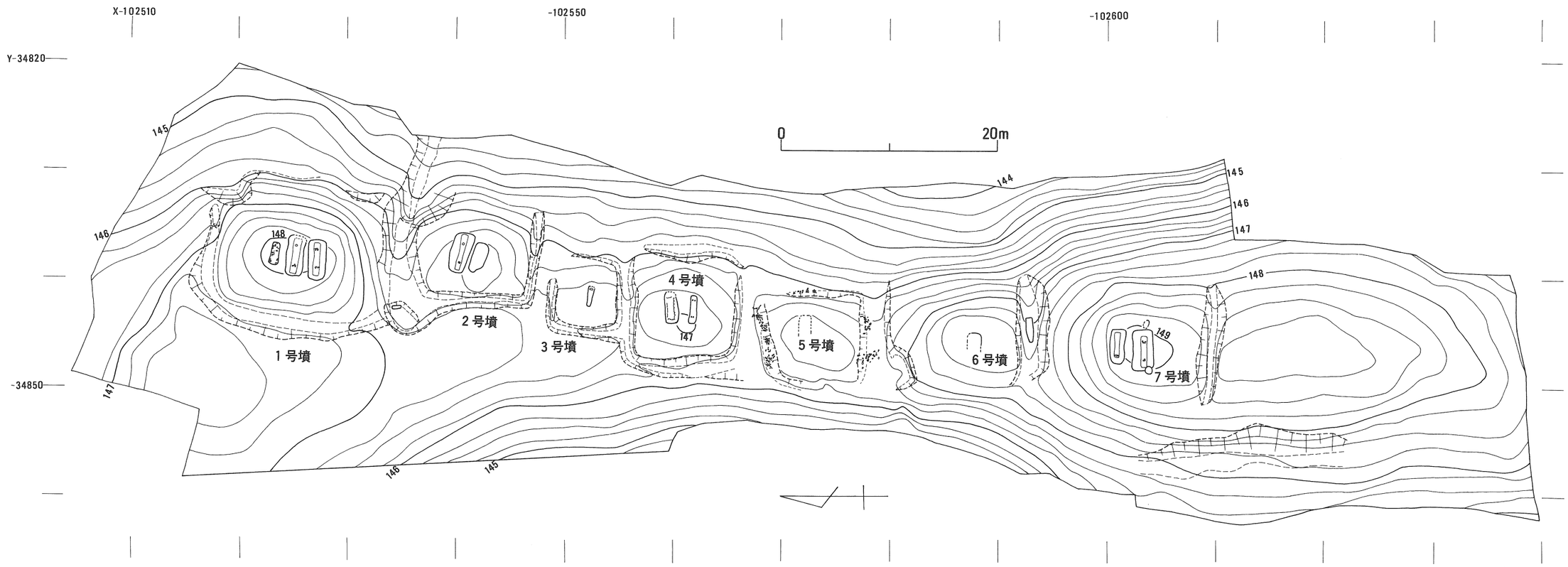
本古墳群は周知の遺跡ではなく、事業確定後（樹木伐採前）の分布調査でも古墳らしき高まりが２基（１・７号墳）確認できたにすぎなかった。その後、樹木伐採後に再度分布調査をおこない古墳らしき高まりを６基（１・２・４～７号墳）確認した。また、この段階ではほとんど墳丘をもたない３号墳については確認できていなかった。さらに古墳以外の丘陵については確認調査としてバックホーで幅２ｍ程のトレンチを稜線に対し直交に入れた。その結果、古墳の北西側の丘陵には弥生時代の集落の存在が、また南側の連続する丘陵では弥生時代の集団墓地が存在する可能性がでてきた。そのためこれらの全面調査を余儀なくされた。この北西側（古墳群の下層を含む）を有本遺跡Ａ地区、南側を同Ｂ地区と呼称する事とした。これらの調査は古墳群の調査後、継続しておこなった。

（２）調査の経過

平成７年７月18～20日に古墳群調査前の墳丘測量調査をおこなった。この時点では古墳は６基確認したのみで３号墳の存在は知られていなかった。また、１・２号墳は円墳、４～７号墳は方墳として認識していた。調査は各古墳とも南北、東西方向に土層観察用のあぜを設定し、バックホーで表土をあらかじめ除去した後は、人力によって掘り下げていった。調査の結果３号墳が新たに確認されたため、古墳の総数は７基となり、さらに周溝の形態からいずれも方墳であることが判明した。１号墳から７号墳まで周溝を掘り下げた段階で、墳丘の測量調査を９月６～７日、12～13日にかけて実施した。その後は各古墳の埋葬施設の検出を行い、１～４、７号墳に関しては比較的残りが良く埋葬施設の全容がほぼ判明したものの、５・６号墳に関しては墳丘自体の流失が著しく、埋葬施設の痕跡を辛うじて検出したのみである。並行して調査していた有本遺跡Ａ地区の調査終了後、10月13日にラジコンのヘリコプターで航空写真を撮り、各埋葬施設の写真、測量、出土遺物の取り上げを行った。その後は古墳の下層に弥生時代の遺構（有本遺跡Ａ地区）がある事が判明したため、１～４号墳に関してはすべての盛土を除去し、下層遺構の調査を継続しておこなった。また、有本古墳群、有本遺跡Ａ・Ｂ地区について平成８年３



第４図　有本古墳群調査前墳丘測量図（Ｓ＝１：400）



第５図　有本古墳群墳丘測量図（Ｓ＝１：400）

月30日に一般を対象とした現地説明会（約70名参加）を実施した。その後、男戸嶋遺跡、男戸嶋古墳、荒神峪遺跡などのの調査と並行して本古墳群の整理作業を行い本報告書の作成をおこなった。

（3）調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会	教育長		藤原修己（～Ｈ８．９．30）
			松尾康義（Ｈ８．10．１～）
	教育次長		内田康雄（～Ｈ８．３．31）
			中尾義明（Ｈ８．４．１～）
	文化課長		籾山三千穂
	文化財センター	所長	神田久遠
		次長	中山俊紀
		主査	安川豊史（調査担当）
		主事	小郷利幸（　〃　）
		主任	青木睦子（事務担当、～Ｈ８．９．30）

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元博子、小澤かおり、大谷みゆき、丸王佳苗、橋本玲恵、浅図美恵が担当した。

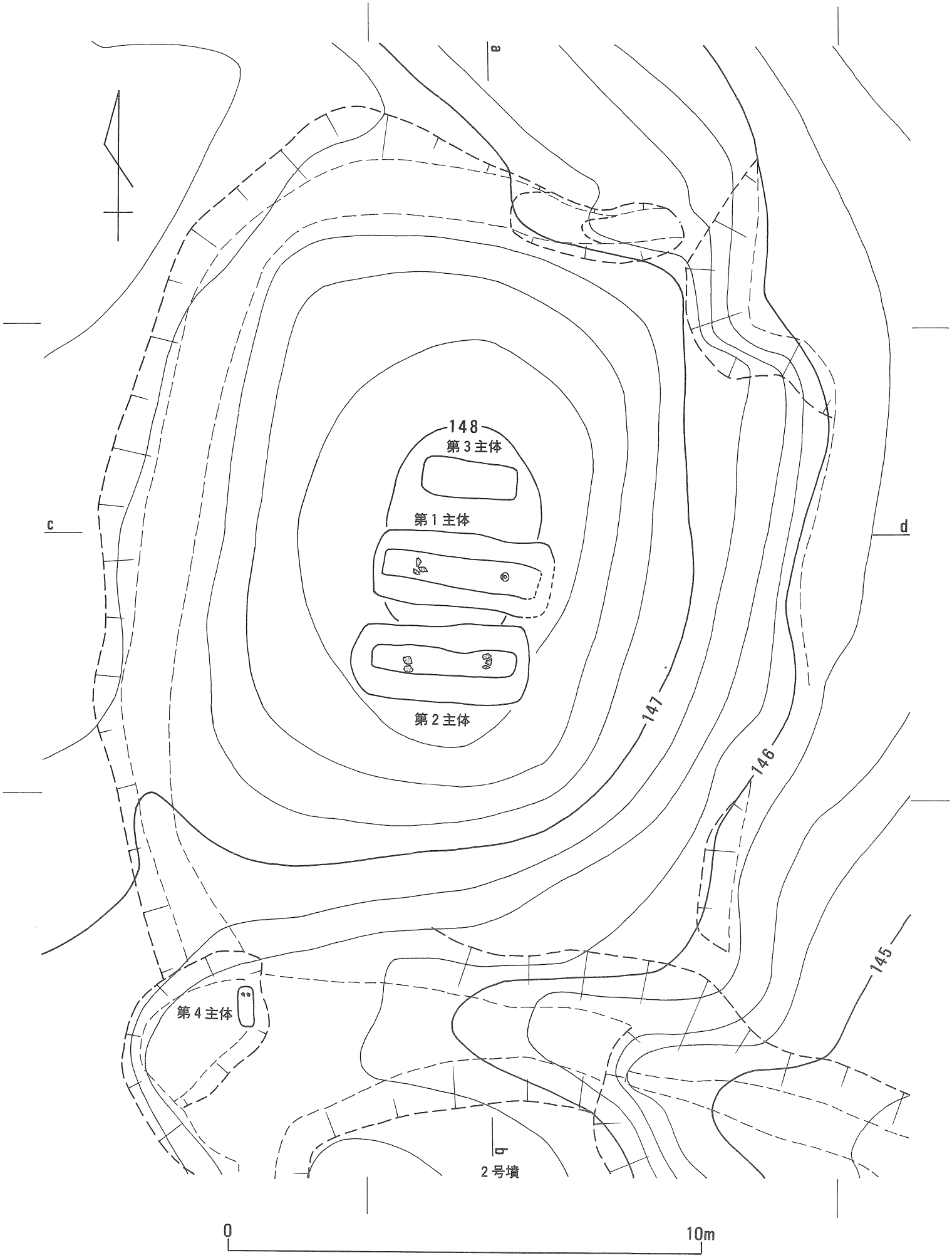
発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。（敬称略）

（調査作業員）青木　保、内田克巳、内田久仁男、沢　　保、柴田揚一、杉山由和、高山　実、田口晴道、田中琢志、中尾一雄、中村　信、西本　徳、橋本　満、平林一好、広野　守、細田憲一、三好昭二、水島友一、水杉暁四、横部　明、米井英祐、脇山　康、脇山静馬、青木敬子、青木照美、青木敏子、稲村奈美子、右近冬子、内田秀子、内山芙喜子、坂手美恵子、高橋不三子、高山祥子、田渕高子、橋本琴枝、

（学生アルバイト他）赤坂健太郎、為貞義弘、仁木良知、藤本　優、片岡大助、田渕芳宣、八木利恵、春名葉子

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

綾野早苗、小野雅明、梶岡辰男、草原孝典、倉林眞砂斗、肥塚隆保、近藤義郎、澤田秀実、白石　純、高橋進一、立石盛詞、田中清美、土居　徹、弘田和司



第6図　有本1号墳平面図(S＝1：100)

3．調査の記録

（1） 1号墳

1　**墳丘**（第6図）

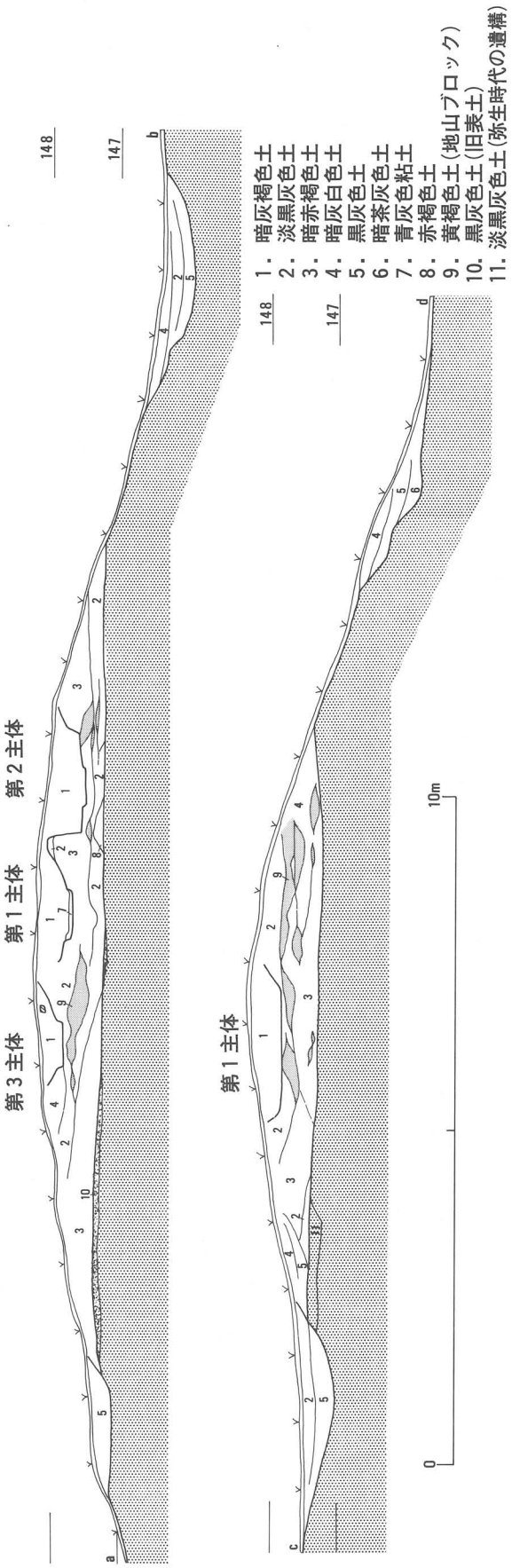
古墳群の中で一番北に位置し、丘陵の稜線から東側にやや下った緩斜面に立地する。北・西側には幅1～2m程の周溝がL字形に巡り、南側の周溝は2号墳と共有し上面で幅3mを測る。この南側の周溝の西側は大きくえぐれる形となり、東側はさらに幅広の溝が下方に伸びている。また、東側には周溝がなく地山の削りだしによる整形と考えられ、墳端がかろうじて部分的に確認できる。

1号墳は南北16.2m、東西13.1m程の方墳で、高さは東側で約2.4m、西側で1.2mを測る。墳丘は盛土によって造られ約1m程現存する。その中でも東側はもともと斜面に立地するため入念に盛土が行われている。地山ブロックを含む互層で水平を保ちながら墳丘の半分程を構築し、その後はほぼ1層で墳丘を作っているようである。西側の墳丘斜面から周溝内にかけてかなり大きめの石が多数検出された。その状況は、葺石と言うには少なく石が散在的に出土するため、これらはすでに動いているものと解される。おそらく石を使用している第3主体の石材の一部である可能性が考えられる。また、周溝の土層状況から1・2号墳の前後関係は明瞭でない。

さらに、古墳の下層には弥生時代の遺構が存在する（第7図11など）。墳丘構築にあたり弥生時代の遺構をかなり破壊していると考えら、盛土中に弥生土器片がかなり含まれている。さらに北側には旧表土（同10）が部分的に観察される。

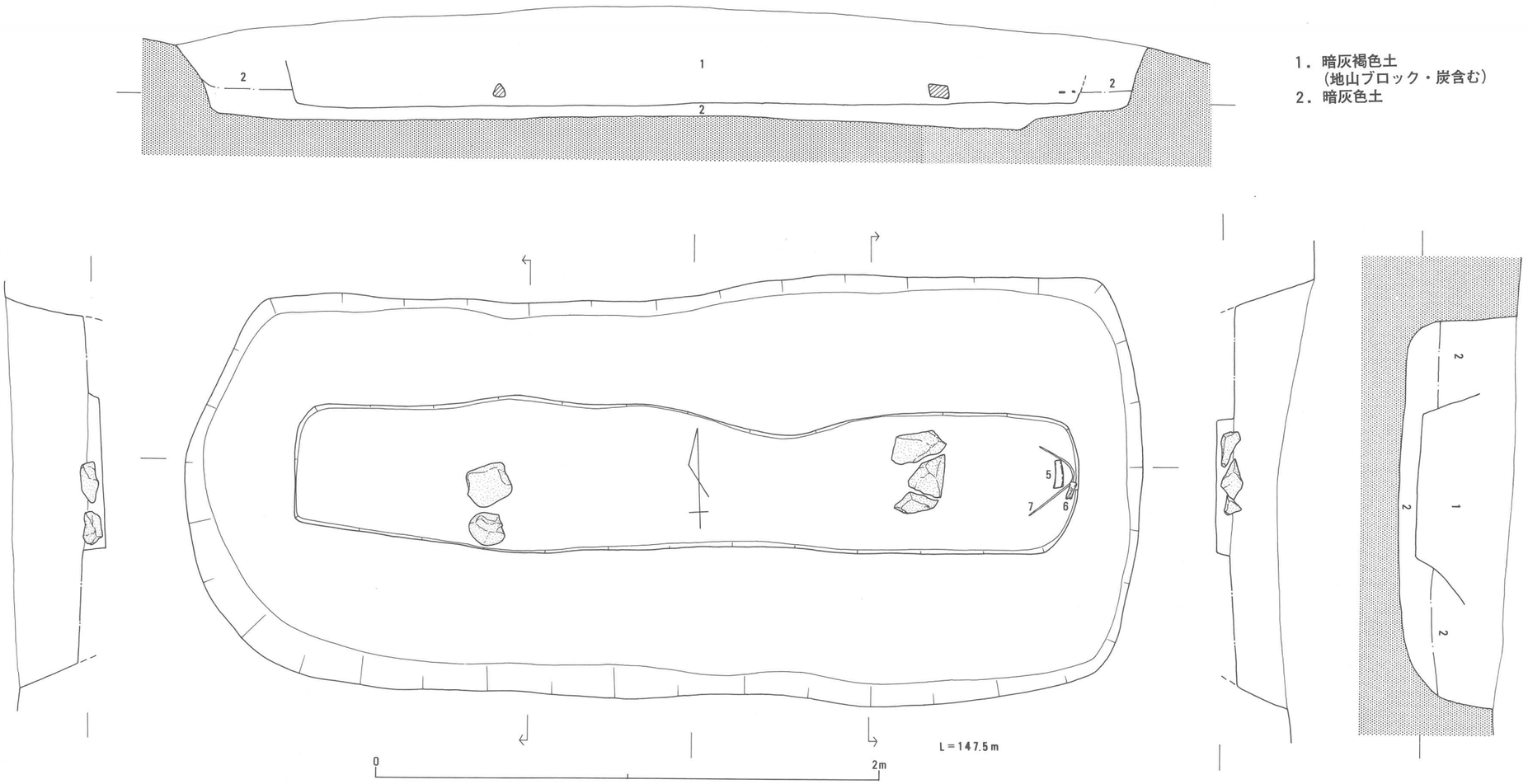
2　**埋葬施設**（第8～11図）

埋葬施設として4基検出した。墳丘上に3基、周溝内に1基である。墳丘上の3基はほぼ東西方向を向き平行に配置されている。中

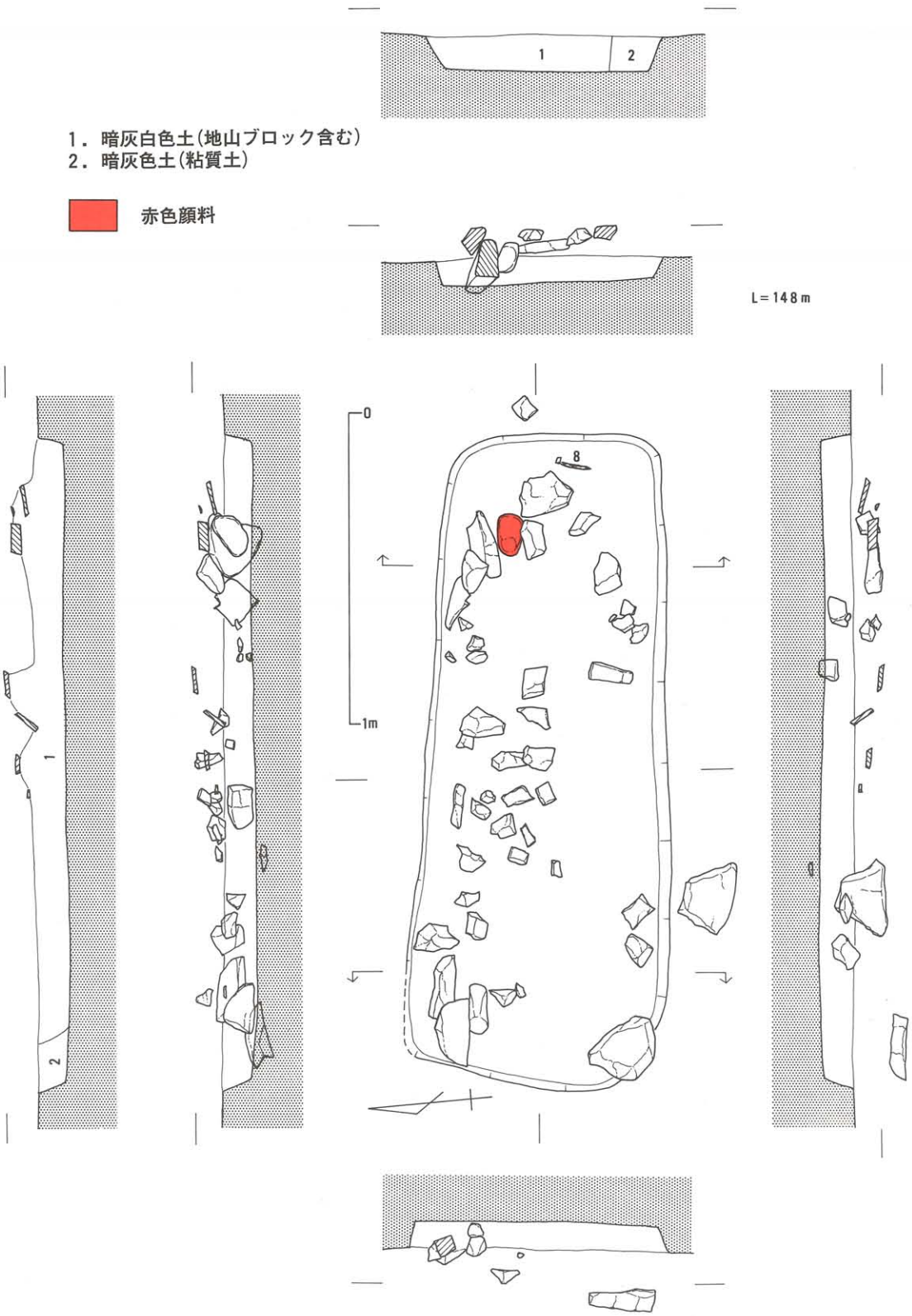


第7図　1号墳断面図（S＝1：100）

第8図　1号墳第1主体平・断面図(S＝1：20)



第９図　１号墳第２主体平・断面図（Ｓ＝１：20）



第10図　1号墳第3主体平・断面図(S＝1：20)

心を第１主体、南側を第２主体、北側を第３主体と呼称している。南西隅の周溝内に小形の埋葬施設が１基単独で検出された（第４主体）が、この周溝は２号墳とも共有するためどちらに属するかは明瞭でない。ただこの部分の周溝が２号墳本来の周溝を大きくえぐる形であり、どちらかと言えば１号墳の墳端よりにあるため、ここでは１号墳の埋葬施設として認識している。土層観察から第１～３主体とも盛土を掘り込んで築かれている。第１・２主体については現段階では前後関係は明瞭でなく、両者に切り合い関係が存在しない事から両者は相前後ないしはほぼ同時に築かれた可能性が大きい。レベル的には第２主体の方が深い位置にある。また第３主体については第１主体よりレベル的に浅く、切り合い関係は明瞭でないが位置的に第１主体を一部切ってつくられているものと解し、第１主体よりは新しいものと考えられる。

第１主体（第８図）

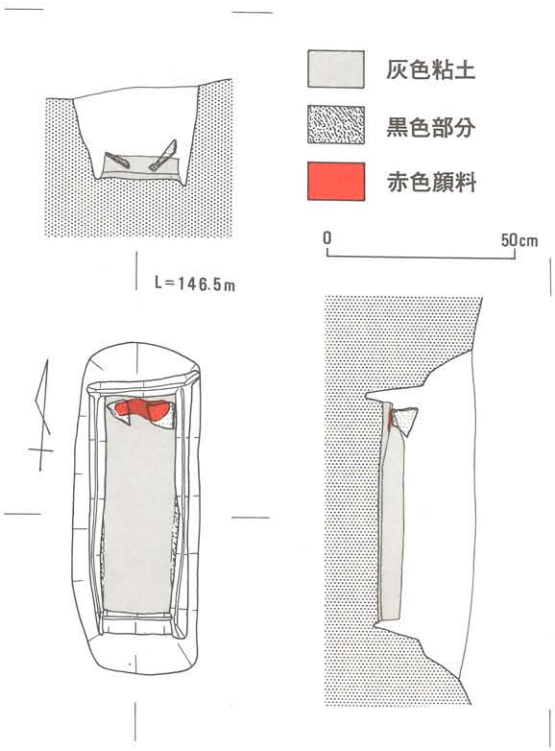
墓壙の東側が一部削平を受けている。掘り方現長約3.8m、幅1.55m程の隅丸長方形で、この中に現長約3.3m、幅東小口0.7m、西小口0.5m程の堀り込みあり、この中に木棺を配していたものと考えられる。木棺の床面と周囲には厚さ３～12㎝、断面⊔字形に青灰色の粘土が存在する。これら粘土は木棺を固定していたものと推測される。この形態から床面は平らな組み合わせ式の木棺と考えられる。木棺を埋葬するには、まず２段に墓壙を堀り２段目に粘土を断面⊔字形に敷きその上に木棺を置き周囲を埋めている様である。棺内東小口側には鼓形器台（第12図１）が置かれ、口縁部の一方を打ち欠いていており、おそらく枕に転用したものと推測される。その北側に赤色顔料が部分的に見られる。さらにその東側に刀子（同２）が１点単独で置かれている。また、中央付近からガラス製の勾玉（同３）・小玉（同４）各１点が出土している。これら玉類が出土したため、埋土の精査を行ったがこれら以外に玉類は検出されなかった。そのため、複数で一連のものとなっていなかった可能性も考えられる。さらに西小口側には３個の石が出土している。これらの石は床面の粘土よりやや浮いており、さらに上端のレベルがほぼそろっている。そのため上部から落ち込んだものとは考えにくく、木棺内に最初から入れられていた可能性が大きく、枕石であった可能性もある。ただこれについては石の配置関係から枕石と断定する根拠は乏しい。

第２主体（第９図）

墓壙掘り方全長3.8m、幅1.6m程の隅丸長方形で、この中に全長3.1m、幅東小口0.5m、西小口0.47mの堀り込みがあり、この中に木棺を配したものと推測される。この木棺には粘土を使用していないが床面は平な形式である。木棺はまず大きめの墓壙を堀り床面を６～７㎝程埋め、その上に木棺を置き周囲を埋める方法である。土層観察では木棺の痕跡はかなり明瞭だが、周囲の土はほぼ１層でさほど綿密には埋められている状況ではない。棺内東小口側には３個の石による枕と考えられる施設があり、西小口側にも同様の石がやや主軸をずらして２個存在する。東小口側の枕石東側に故意に曲げられた棒状の鉄製品（第12図７）とその中に鎌（同５）、外に斧（同６）がまとまって出土している。掘り方との間が狭いため、これらが棺内に入れられていたかどうかは定かではない。西小口側の石２個を枕として解すると２体が同時に埋葬されていたと考えられる。副葬品はないが主軸がやや南側によっているためやや窮屈な感はあるがその可能性は大きい。

第３主体（第10図）

墓壙の掘り方全長2.1m、幅東小口0.7m、西小口0.8mの隅丸長方形で内部はかなり撹乱されている。内部には石材がかなり見られるが破片となりさらに動いているものが多くその構造は明瞭でない。ただ



第11図　1号墳第4主体平・断面図（S＝1：20）

東側には枕石と考えられる石が1個存在し、その北側の石が立っているため、箱式石棺の可能性が考えられるが、小口や側壁の石の掘り方などが存在しないため、箱式石棺と言うよりは、木棺の周囲に石を配した、配石木棺墓の可能性を指摘しておきたい。木棺の痕跡は土層観察から部分的に見られる。さらに墳丘のところで述べた西側の墳丘斜面で出土した石は、この主体の石材の可能性が十分考えられる。東小口側の枕石は赤色顔料の塗布が見られ、その東側から鉇（同8）が1点出土している。西小口側には枕らしき施設も、副葬品も存在しない。

第4主体（第11図）

南西周溝内に存在し、墓壙掘り方全長88㎝、幅北小口31㎝、南小口29㎝程の小形で主軸はほぼ南北方向である。墓壙の底には長さ57㎝、幅20㎝、厚さ6㎝の粘土が置かれ両小口と側壁に掘り込みが存在する。そのためある程度木棺の形式が推測される。木棺の形式は北小口が両側壁の外側に、南小口は内側に組む形式のものと考えられる。さらにこの両小口板の底面は平ではなく角のとれた丸い形となっていたものと推測される。この粘土上面の両側壁側の一部が黒色に変色しているが、これが何の痕跡かは不明である。北小口側には板石2個がV字に配置され枕石と考えられる。これが床面の粘土内に入り込んでいた事から、床面には板材を敷いていなかった可能性が考えられる。この枕石付近には赤色顔料の塗布がかなり広範囲に見られた。内部から副葬品は何も出土していない。

3　**出土遺物**（第12図）

第1主体から、鼓形器台、刀子、ガラス製勾玉・小玉が出土している。

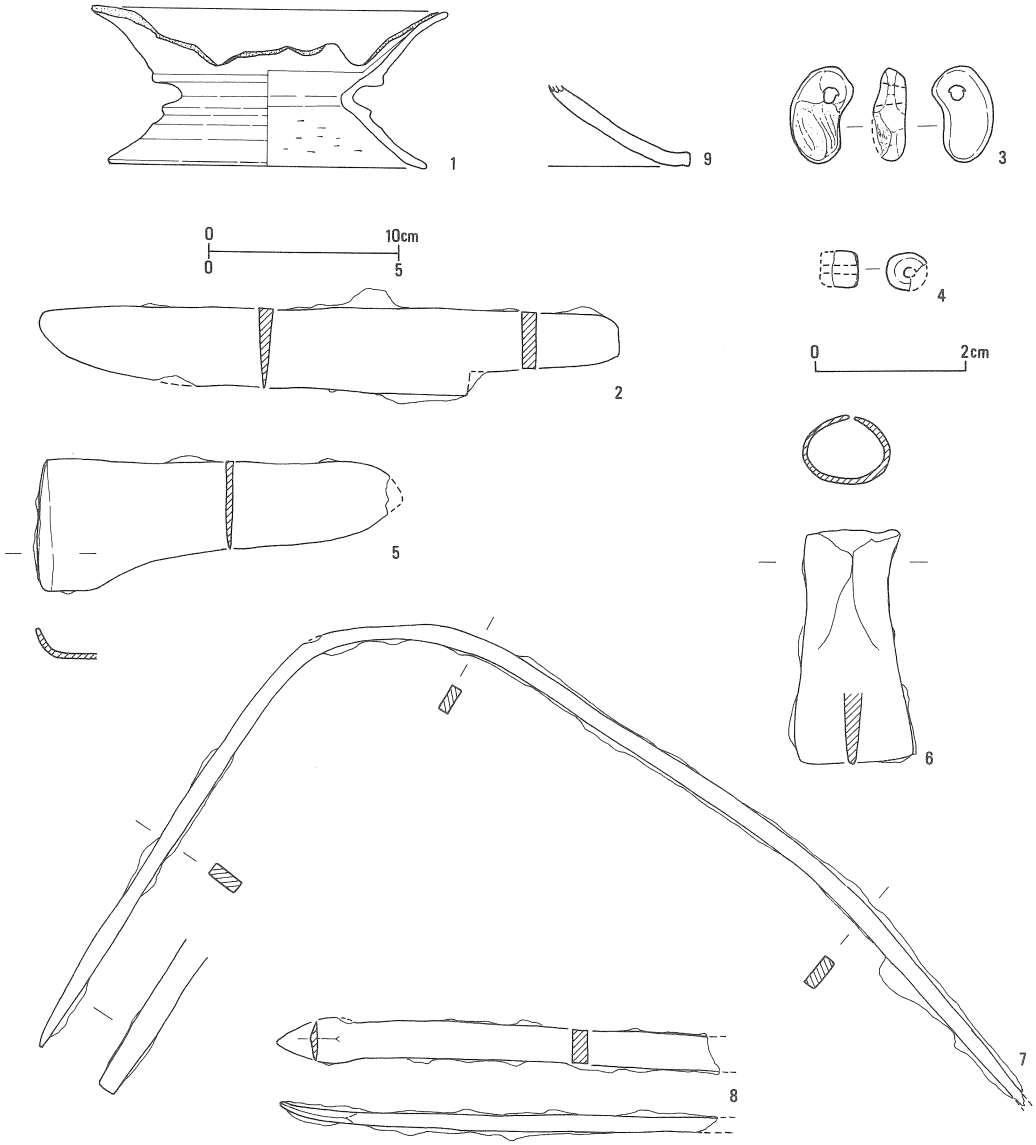
1は鼓形器台である。口径18.7㎝、底径16.7㎝、くびれ部9.1㎝、器高8.5㎝を測り、ほぼ完形に復元できる。ただ口縁部の一方は当初から幅18㎝にわたり打ち欠いており、この部分に頭をのせていたものと推測される。外面はナデ、内面底部側はヘラケズリ後ナデで仕上げている。赤色顔料の塗布は見られない。

2は刀子である。全長16.4㎝、刃部長さ11.4㎝、幅2.2㎝を測る。

3はガラス製の勾玉である。全長1.3㎝、幅7を測り、2～4㎜の穿穴がある。片面は剝落が顕著である。色調はスカイブルーで剝落面は白色化している。材質は分析の結果、鉛バリウムシリカガラスである（分析は奈良国立文化財研究所により、結果はあらためて公表する予定である）。

4はガラス製の小玉である。色調はブルーで全長5㎝㎜、幅5㎜で中央に1㎜の穴がある。材質は分析の結果カリシリカガラスである（分析は同上）。

第2主体から、鎌、鉄斧、棒状鉄器が出土している。



第12図　1号墳出土遺物（1・9…S＝1：4、2・5～8…S＝1：2、3・4…S＝1：1）

5は直刃鎌である。刃先が欠損し、装着部分を折り曲げている。残長9.5㎤、刃部最大2.5㎤を測る。

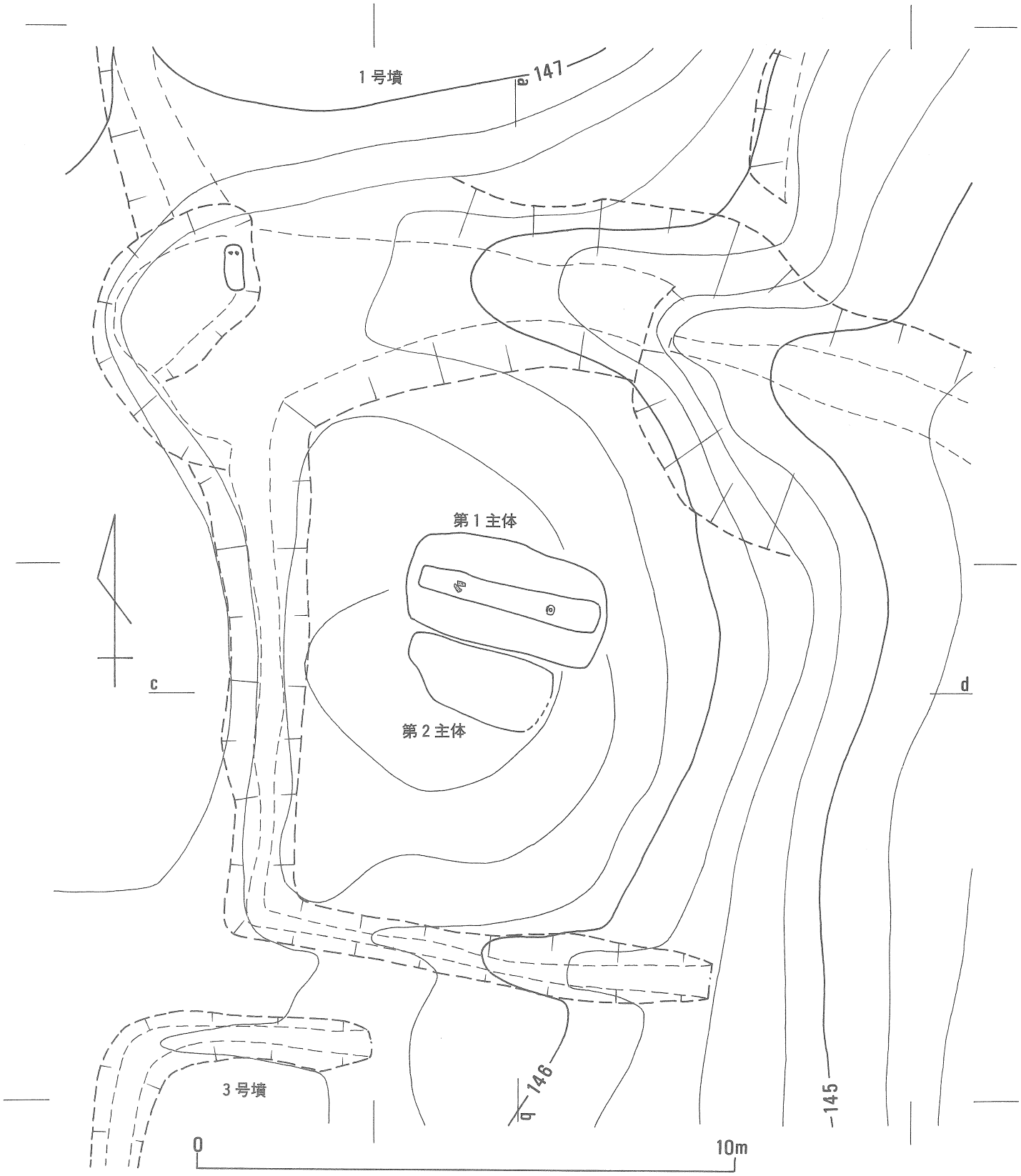
6は小形の鉄斧である。全長6.2㎝、刃部幅3.1㎝を測る。両側を丸く折り曲げて袋部が作られている。

7は棒状の鉄器で故意に曲げられている。全長約36.6㎝、幅7㎜で片方の先が刃部となっているようである。そのため鑿状の鉄器と考えられるが、長さの割に非常に幅が狭いため違う用途のものかも知れない。

第3主体から、鉇が出土している。

8は残長11.8㎝、刃部長2㎝を測り刃部の残りは良好である。

その他西側周溝内から土師器らしき破片が出土しているが、下層に弥生時代の遺構があり盛土内に多数の弥生土器片が含まれているため、土師器とは特定できないものも多い。その中で図示した9は高杯の脚裾部分の破片と考えられる。



第13図　有本2号墳平面図（S＝1：100）

（2） 2号墳

1．**墳丘**（第13図）

1号と主軸を同じくし稜線より東側に下った緩斜面に立地する。コの字形に周壙が巡り、北側は1号墳の周溝と共有している。周溝は幅0.8～3mを測り1号墳と共有する北西部分は大きくえぐれる形となっている。

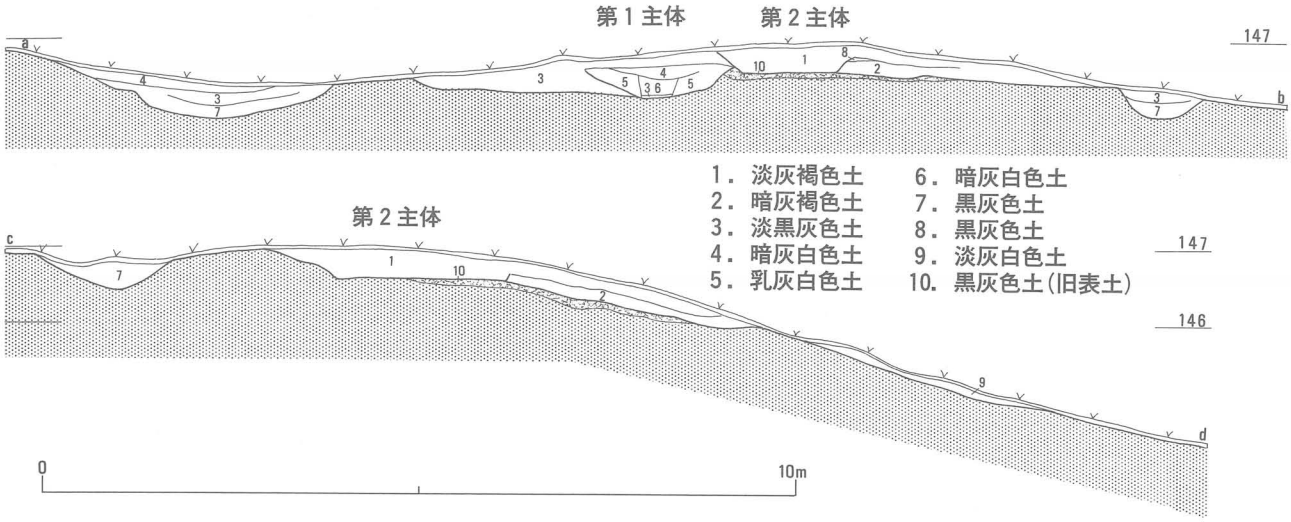
2号墳は南北11.9m、東西約9m程の方墳である。東側には周溝はなく削り出しにより整形されているものと考えられるが、すでに流失している部分が多く墳端については土層観察からも明瞭でない。高さは西側で0.55m、南側で0.95mを測る。北側の周溝は1号墳と共有しているが、土層観察から両者の前後関係は明確でない。北側の周溝は、さらに東側斜面に続いており、一部には後世の撹乱も見られるが、これがかなり下方に伸びている事から墓道としての役割を担っていた可能性も考えられる。墳丘は盛土によってつくられる。盛土は約40㎝程残存しほぼ1層であり、1号墳の様な地山ブロックなどは見られない。なお、本墳の下層には弥生時代の住居跡が存在する。そのため盛土内に弥生土器片が多数含まれている。旧表土（第14図10）もかなり観察される。

2．**埋葬施設**（第15～16図）

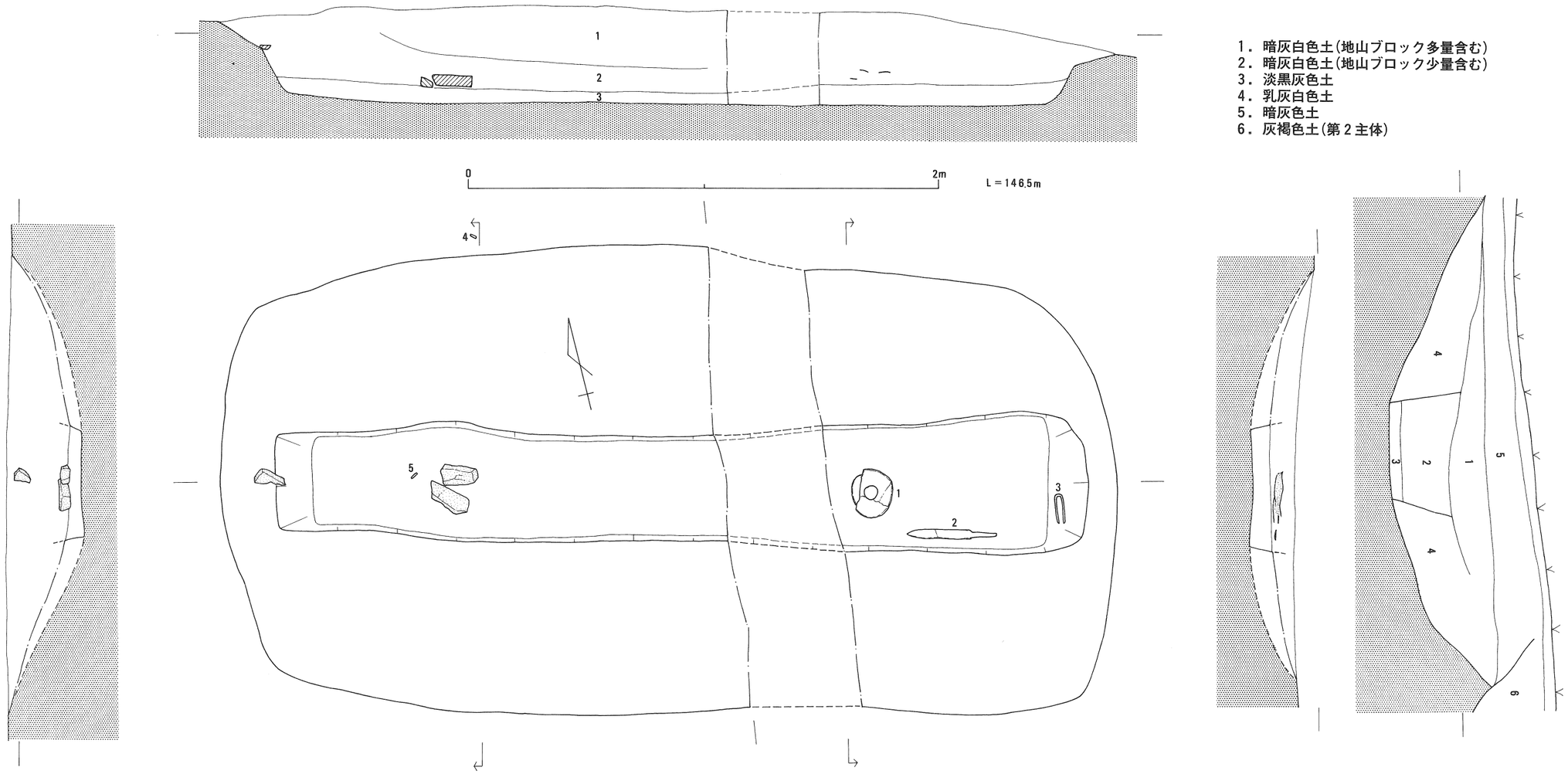
埋葬施設は墳丘内に2基検出し、いずれもほぼ東西方向を向いて平行に配されている。北側を第1主体、南側を第2主体と呼称している。両者とも盛土を掘り込んで作られているが、土層観察から切り合い関係があり、深い位置にある第1主体の方が古い事がわかった。

第1主体（第15図）

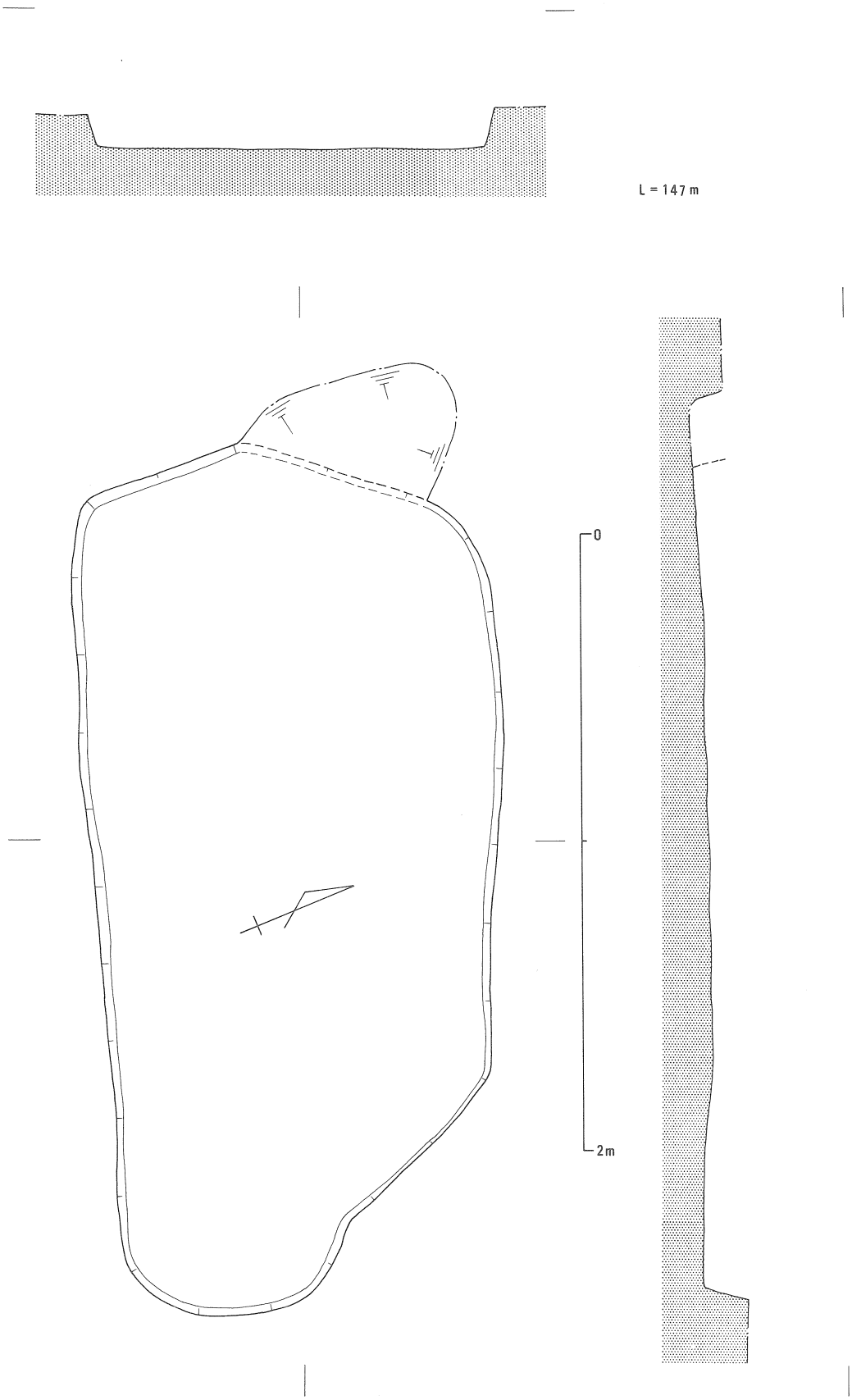
墓壙掘り方全長3.78m、幅東小口1.7m、中央2m、西小口1.5mの隅丸長方形で内部に全長3.43m、幅東小口0.58m、西小口0.41m程の掘り込みがあり、この中に木棺が配されていたものと考えられる。粘土は一切使用していないが床面は平らであり、土層観察から棺材の厚さは5㎝程である。棺内東小口側には鼓形器台（第17図1）が置かれ、口縁の一部を打ち欠き枕に転用している。その外側側壁よりに鉄剣1（同2）、さらに小口側に折り曲げられた鉇（同3）1が副葬されている。鉄剣については棺内におかれていたものと考えられるが、鉇については明瞭でない。この剣と木棺掘り方との幅が木棺の側壁材の厚さと考えらおよそ4～5㎝である。また西小口側にも石が2個ハの字形に存在し、土層観察



第14図　2号墳断面図（S＝1：100）



第15図　２号墳第１主体平・断面図(Ｓ＝１：20)



第16図　2号墳第2主体平・断面図(S＝1：20)

から木棺内に置かれていたものと推測され、枕石の可能性も考えられる。これが枕石の場合両枕の位置関係（両枕間1.6m程）から２体埋葬するにはやや窮屈であろう。この石の西側から鉈（同４）の刃先が、さらに北側墓壙外より鑿状の鉄器（同５）が出土している。そのため２体埋葬されていた可能性は大きい。さらに西小口側に石が１点出土しているが、これは浮いているため流れ込みであろう。

第２主体（第16図）

墓壙掘り方全長2.8m、最大幅1.37m程で隅丸長方形と言うよりいびつな形である。これは木の根による撹乱穴が周辺に存在することが大きく起因しているものと考えられる。また深さは15cm程残存し、精査したにもかかわらず木棺の痕跡すら検出されなかった。すでに流失しているものと考えられる。副葬品も皆無である。

３．出土遺物（第17図）

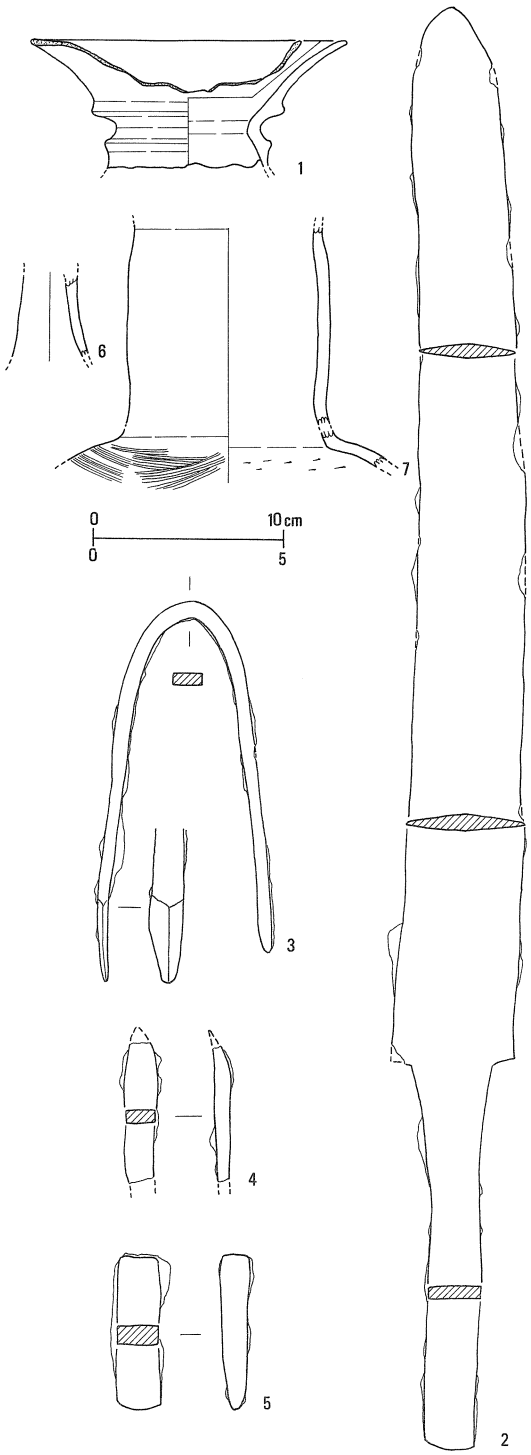
第１主体から、鼓形器台、鉄剣、鉈、鑿状鉄器が出土している。

１は鼓形器台で、口縁部とくびれ部分のみで底部は存在しない。口径16.7cm、くびれ部7.6cm、残存高6.8cmを測り、口縁部の一方は幅13cmにわたり当初から打ち欠かいている。おそらくこの部分に頭を置いていたと考えられる。赤色顔料の塗布は見られない。

２は鉄剣である。全長38.2cm、刃部長27.9cm、厚さ５mmを測る。木質は観察されない。

３は鉈で２つに折り曲げられ、全長約20.3cm、刃部長2.3cmを測る。刃部の残りも良好である。

４は鉈の刃部と考えられる。残長3.7cmを測り刃先は欠損する。



第17図　２号墳出土遺物(1・6・7…S＝1：4、2～5…S＝1：2)

５は全長4.2cm、幅1.1cm程の鉄器で刃部らしきものが片方に存在する事から、鑿の刃先のようなものであろう。

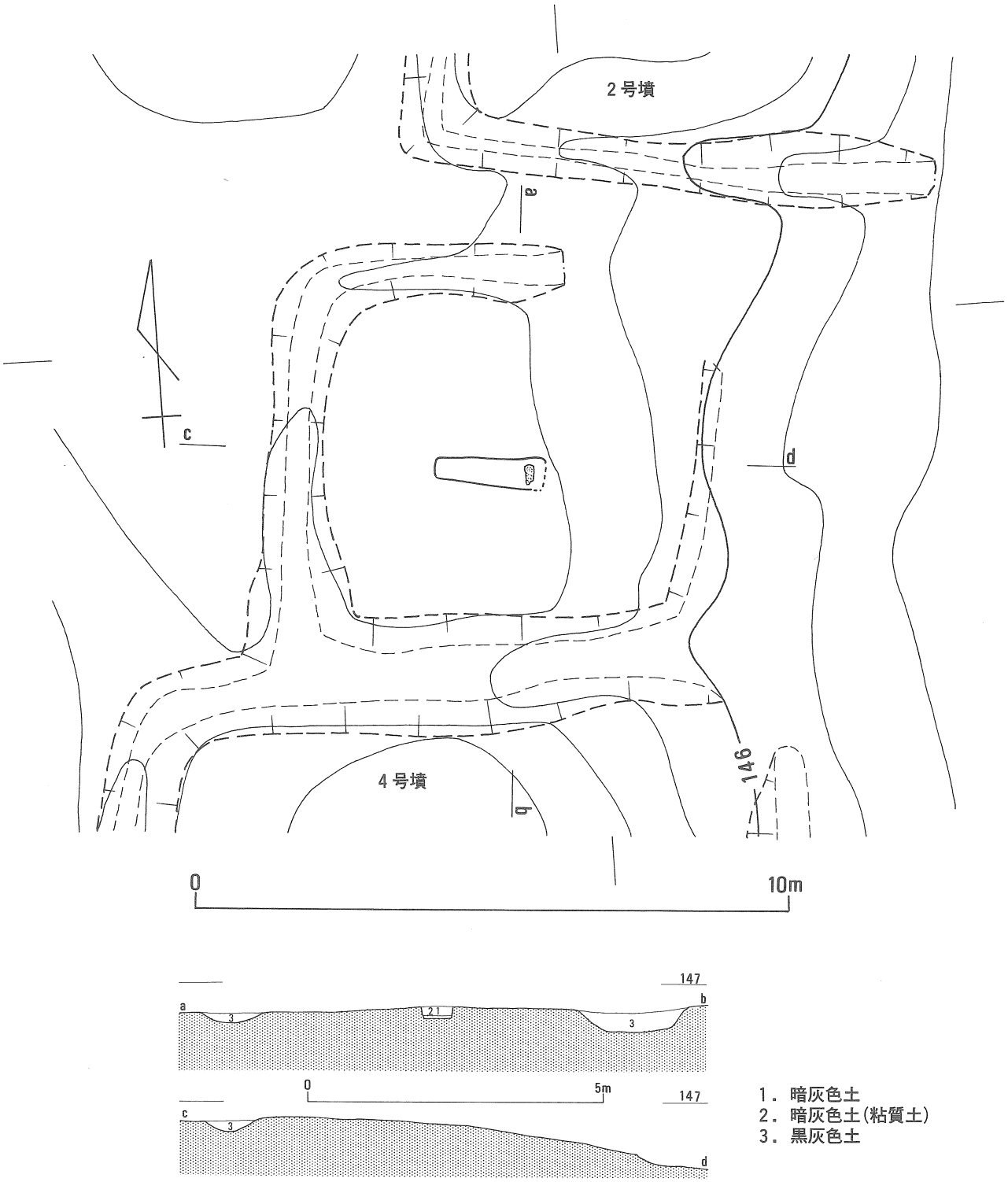
その他北側周溝内より土師器の破片が出土している。６は高杯の脚部である。剝離が著しいため調整は不明である。７は壷が何かの頸部付近と思われ、口縁部分は不明で、中央がやや膨らむ器形である。外・内面はナデ仕上げである。なお、胴部の屈曲部分を図示しているが頸部とは接合しない。また、胴部の破片もかなりあり外面はヨコハケ、内面はヘラケズリである。

（3） 3号墳

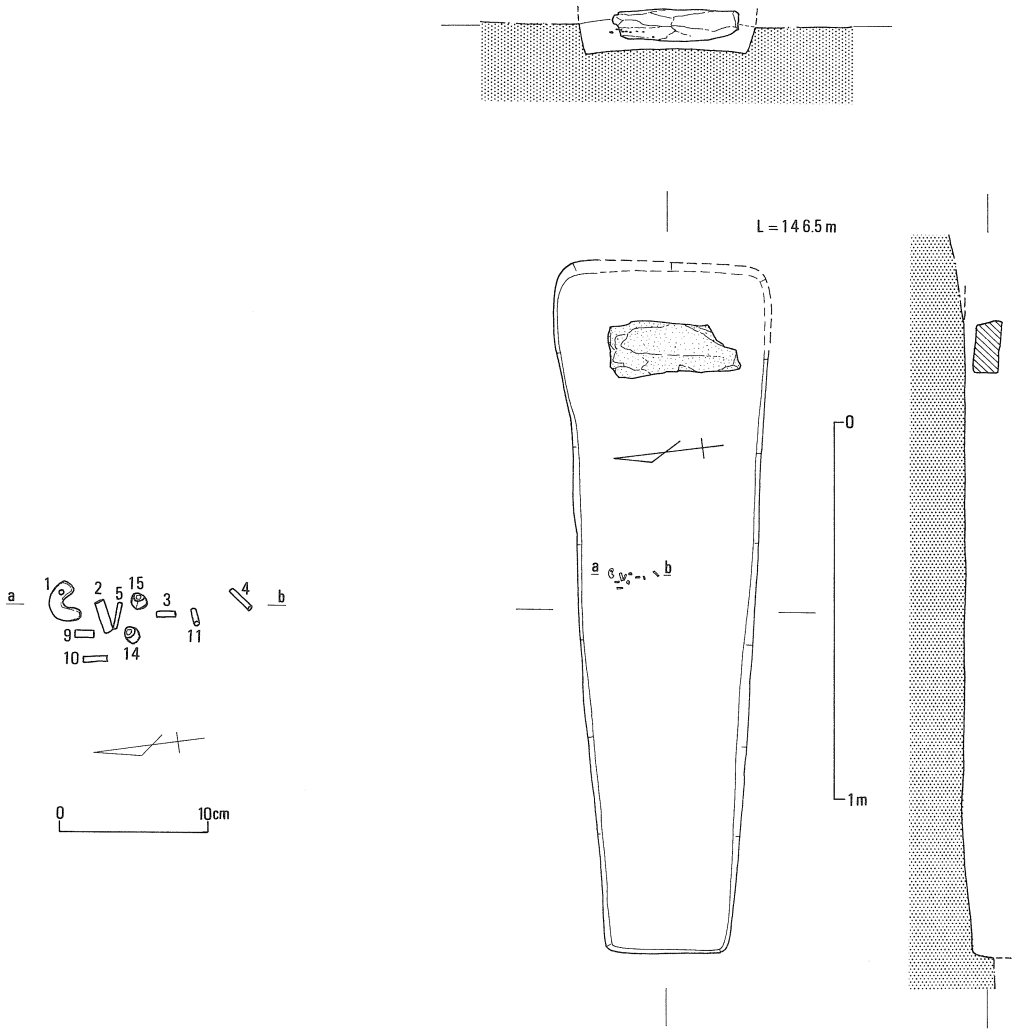
1　**墳丘**（第18図）

1・2号墳とは主軸が西側にずれ、稜線よりやや東側に下った緩斜面に立地する。周溝はコの字形に存在し、南側が4号墳と共有している。周溝の埋土は1層である。東側は周溝ではなく地山を削り出して整形している。

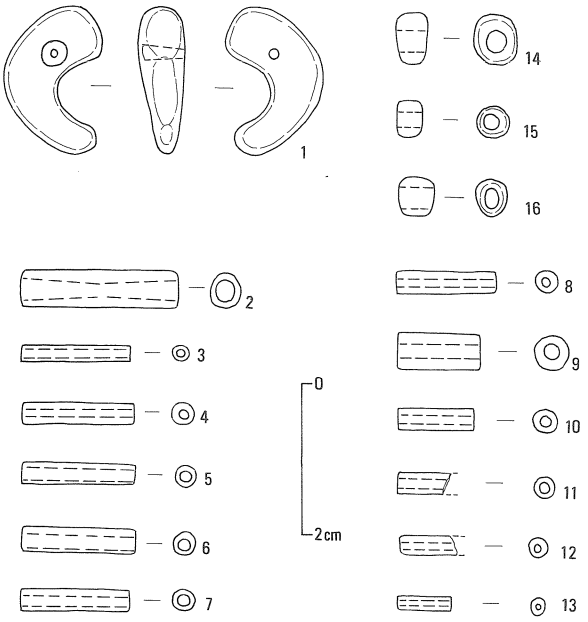
3号墳は南北6.3m、東西6.8mの方墳で高さは東側0.85m、西側0.27mを測る。調査前には本墳の存



第18図　有本3号墳平・断面図（S＝1：100）



第19図　3号墳主体平・断面図（S＝1：20）及び遺物出土状況（S＝1：5）



第20図　3号墳出土遺物（S＝1：1）

勾玉　(mm)

No	全長	幅	厚さ	孔径	穿孔方向	材質	色　調
1	20	8	6	1～3	片　方	ヒスイ	乳緑白色

管玉　(mm)

No	全長	径	孔径	材質	色　調
2	21	5	3	碧玉	暗緑色
3	14.5	2	1.3	〃	淡緑色
4	15	3	1	〃	〃
5	15	3	1.9	〃	〃
6	14.3	3	1.4	〃	〃
7	14.5	3.4	2	〃	〃
8	13.5	3	1.2	〃？	乳緑色
9	11	5	1.8	〃？	〃
10	10	3	1	〃	暗緑色
11	7＋	3	1	〃？	乳緑色
12	7.5＋	2.8	1	〃？	〃
13	7	2	0.8	〃	淡緑色

小玉　(mm)

No	全長	径	孔径	材質	色　調
14	4.2	7	2.7	ガラス	青　色
15	3.5	5	2	〃	〃
16	5	5	2.5	〃	〃

第2表　3号墳出土玉類一覧表

在は知られておらず、調査時にかろうじて周溝を検出したのみである。そのため盛土は現状ではまったく見られず、本来は存在していたのかも知れない。ただ埋葬施設の残り具合から墳丘自体はさほど高くなかったものと考えられる。

2．埋葬施設（第19図）

埋葬施設は墳丘内に1基検出した。中心に位置しほぼ東西方向を向き地山を掘り込んでいる。墓壙の掘り方は全長約1.83m、幅東小口5.8cm、西小口3.4cmを測る。東小口側には平らな1枚石が存在し枕石と考えられる。この石は長さ35cm、幅15cm、厚さ8cmを測る。また、土層観察から木棺材の厚さは5cm程であるが、形式については不明である。棺内中央付近から勾玉1、管玉12、小玉3がまとまって出土した。その出土状況から紐などに通され一連のものとして副葬されたと考えられる（第19図左）。また、出土位置から首のあたりではなく胸のあたりに置かれていたものと推測される。この玉類以外に副葬品は見られない。

3．出土遺物（第20図、第2表）

1はヒスイ製の勾玉で全長2cm、幅7cm、厚さ6cmを測り、穿穴は片側から行っている。

2～13は碧玉製の管玉で長さから3種類（A・B・C）に分類できる。A類は2cm前後で2の1点のみである。B類は1.5cm前後で3～8の6点ある。C類は1cm前後で9・10・13である。また、色調では濃色系（2・10）と薄色系（3～9、11～13）の2種類に分類できる。14～16は、ガラス製の小玉である。材質は、分析の結果、カリシリカガラスである。詳細は一覧表参照（第2表）。　その他、西側と南側の周溝内より土師器の壷と考えられる破片が出土しているが細片のため図示できない。

（4）4号墳

1．墳丘（第21図）

3号墳とほぼ主軸を同じくし、ほぼ丘陵の稜線上に立地する。周溝はほぼコの字形に巡り、北側周溝を3号墳と南側の周溝は5号墳と共有している。西側については周溝の外周が一部途切れている箇所がある。東側については、削り出しによる整形で墳端もほぼ確認できた。

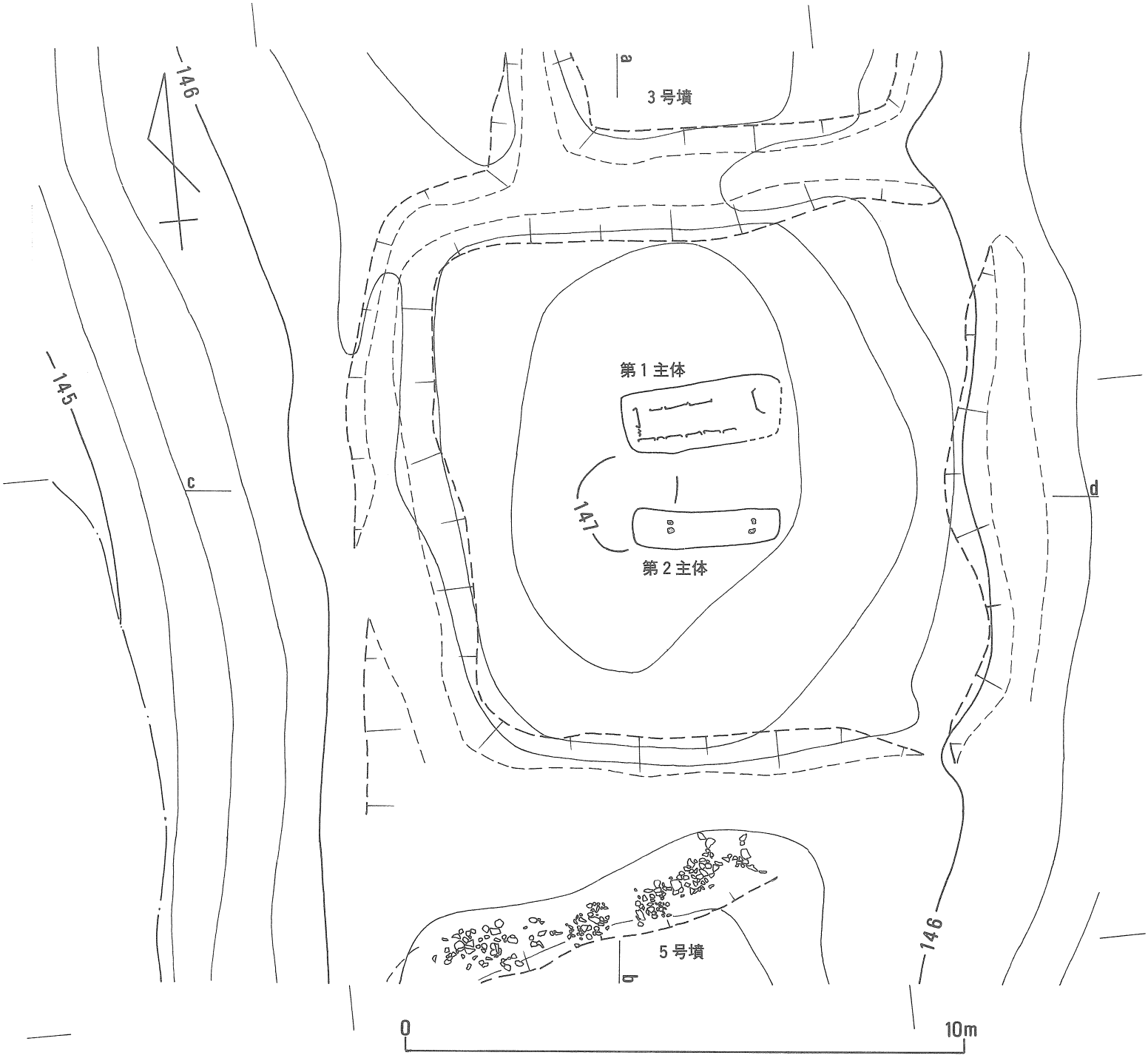
4号墳は南北10.2m、東西10.4mのほぼ正方形に近い方墳である。高さは東側1.3m、西側1mを測る。本墳には旧表土（第21図6）が全面に存在しその上に40cm程の盛土がある。盛土には地山ブロックなどは見られず1層である。

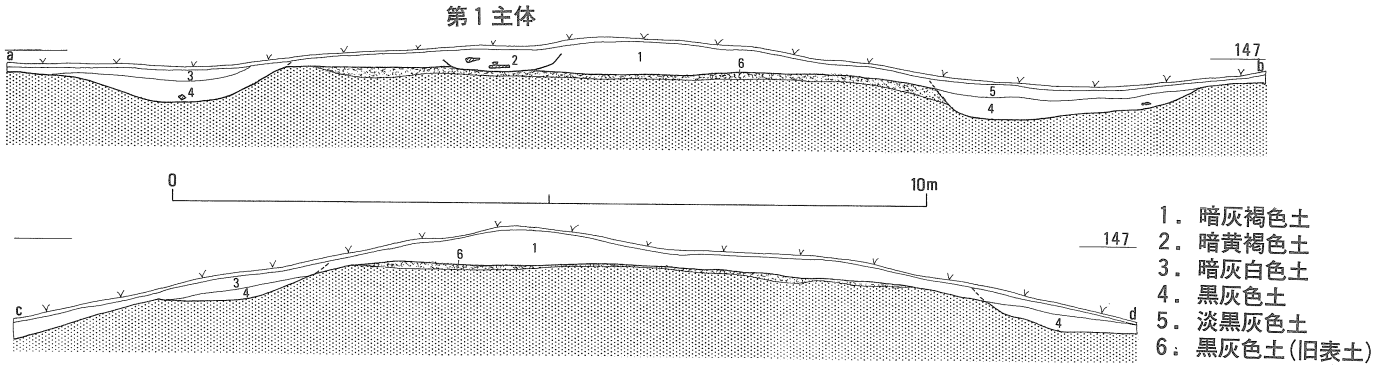
2．埋葬施設（第22～23図）

埋葬施設は、墳丘の中心に2基確認した。いずれも東西方向を向き平行に配置され、北側を第1主体、南側を第2主体と呼称している。いずれも盛土を掘り込んで作られている。両者の前後関係は不明である。

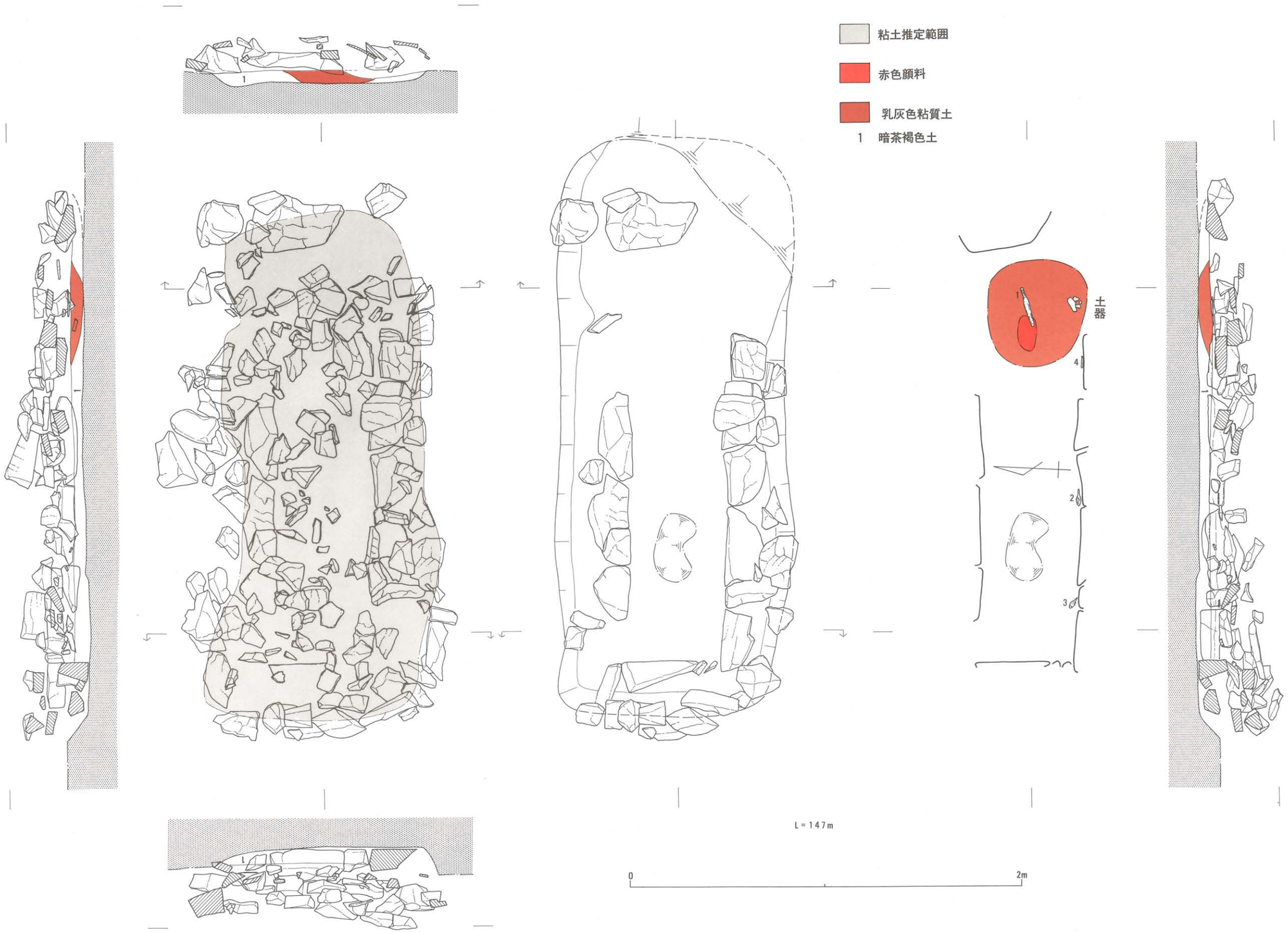
第1主体（第22図）

かなり撹乱を受けており調査前に既に石材の一部が露出していた。墓壙掘り方は全長約2.95m、幅東小口1.2m、西小口1.05mの隅丸長方形で、内部には石で囲まれた石槨が築かれている。撹乱を受けているため上部構造は明確でなく、基底石も西小口についてはほぼ元位置を保っているものの、東小口や

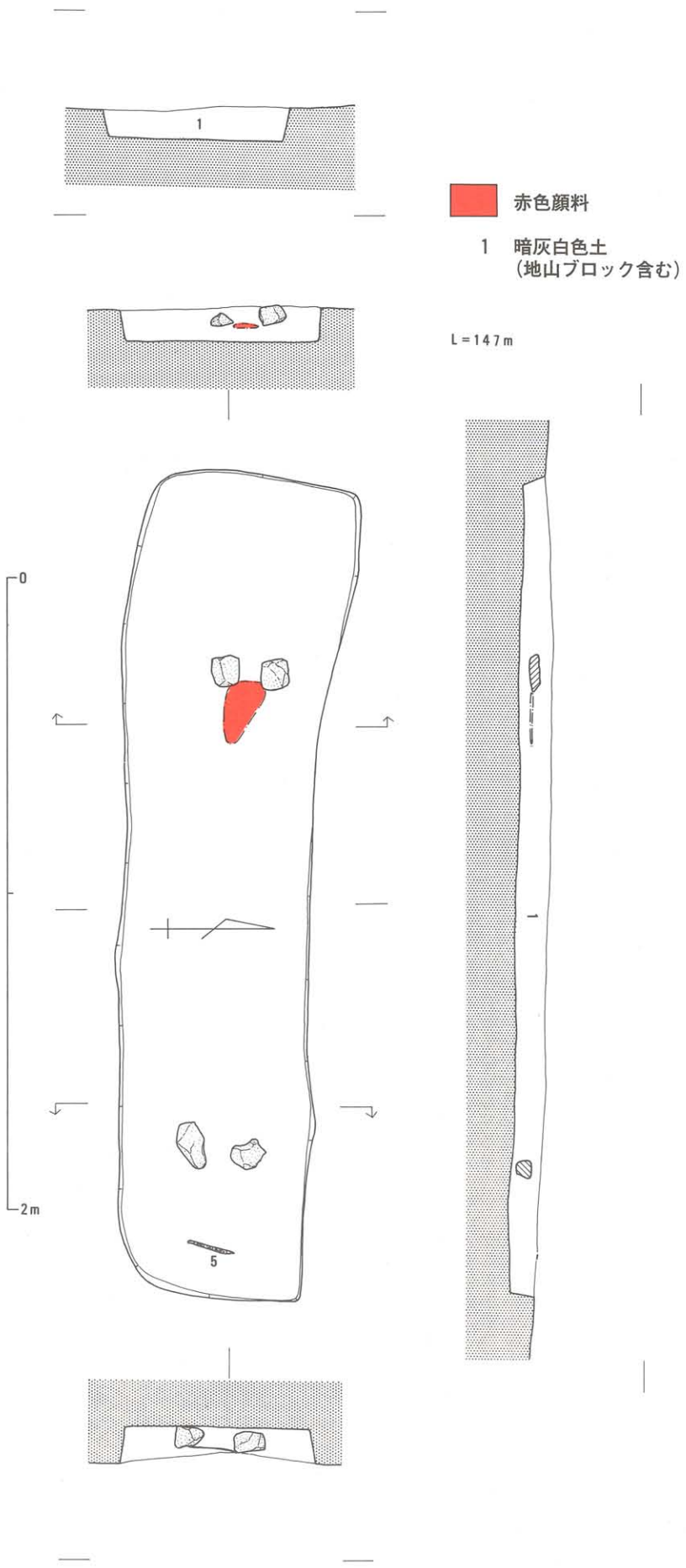




第21図　有本4号墳平・断面図(S＝1：100)

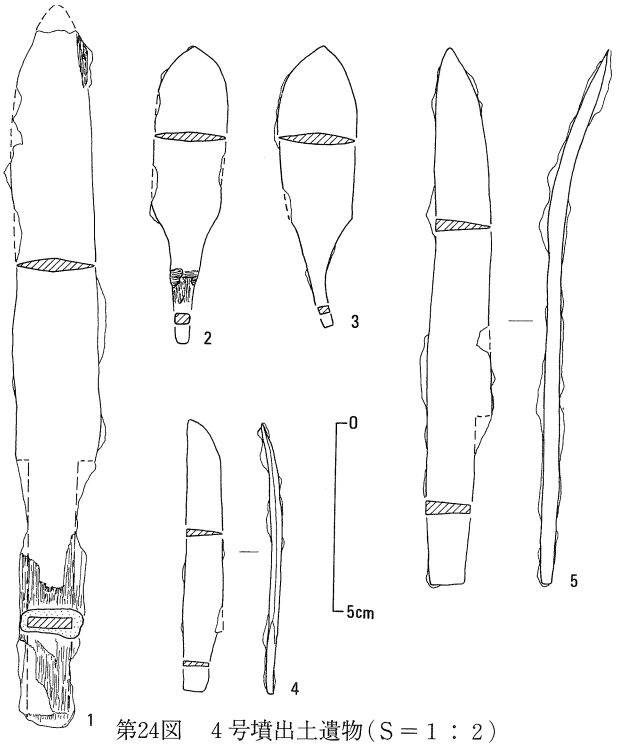


第22図　4号墳第1主体平・断面図(S＝1：20)



第23図　4号墳第2主体平・断面図(S＝1：20)

両側壁についてはすでに抜き取られている箇所もある。また、確認できるのは2段に積まれている状況だけである。おそらくこの2段では人を埋葬するにはやや低すぎるので、2段以上は積まれていたものと考えられる。内法は全長2.1m、幅西小口0.5mを測る。また、側壁部分に粘土が存在する事から、ほぼ全面にわたって粘土による目張りが施されていたものと考えられる。床面には厚さ5㎝程の土が敷かれ、特に東小口側は一端円形に掘られ、やや粘土質の土で再度埋めている。この部分の上部は赤色顔料の散布が見られ、その東側に鉄剣（第24図1）が置かれていた。よってこの部分が頭部と推測されより念入りに作られているようである。その南側には土師器の破片が数点出土している。また、南側壁に沿って鉄鏃2点（同2・3）、刀子1点（同4）がほぼ当間隔に離れて出土した。この石槨について蓋石らしき大きな石は存在しないため蓋の構造については明確でない。おそらく既に流失しているのか、木蓋であった可能性も考えられる。また、細片となった石材が多く内部に入っている事から蓋をし粘土で目張りをした上を覆っていたものかもしれない。



第24図　4号墳出土遺物（S＝1：2）

第2主体（第23図）

現存する墓壙の掘り方全長2.6m、幅東小口56㎝、西小口67㎝を測る。土層観察から木棺の痕跡は明瞭でないが、ほぼこの掘り方が木棺の規模を表しているものと推測される。東側小口付近に枕石と考えられる石が2個存在し、その東側に刀子1点（同5）が置かれていた。また、西側小口付近にも枕石と考えられる石が2個あり、その周囲に赤色顔料の散布が見られる。よって両者を枕石とすれば2体同時に埋葬されていたと考えられる。この枕石がやや浮いている事からこの幅が木棺材の厚さと考えられ、およそ4㎝程である。

3．出土遺物（第24図）

第1主体から、鉄剣、鉄鏃、刀子が出土している。

1は鉄剣で刃先が一部欠損し、残長15.8㎝、刃部長11.4㎝、幅2㎝、厚さ4㎜を測る。刃部と茎部に木質が一部観察される。

2は鉄鏃で柳葉形をしている。全長7.9㎝、刃部長4.4㎝、幅1.9㎝、厚さ3㎜を測る。茎に木質が残りその外側を皮状のものがまかれている。

3は鉄鏃で柳葉形をしている。全長7.5㎝、刃部長4.5㎝、幅2㎝、厚さ3㎜を測り茎は曲がっている。

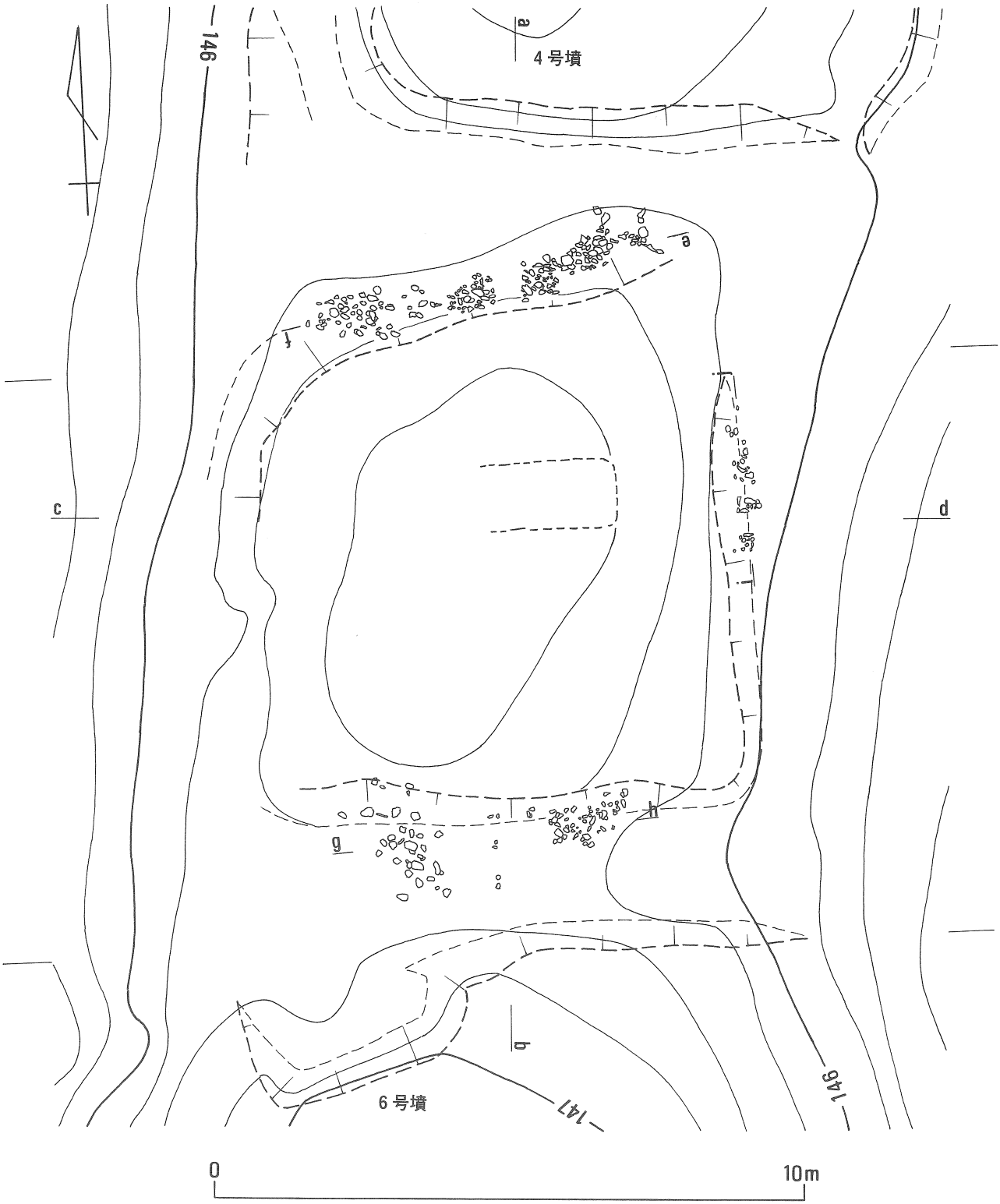
4は刀子で刃先を曲げている。全長7.2㎝、幅1㎝、刃部長5.7㎝を測る。

その他、土師器の壷ないしは甕の破片が出土しているが、細片のため図示できない。

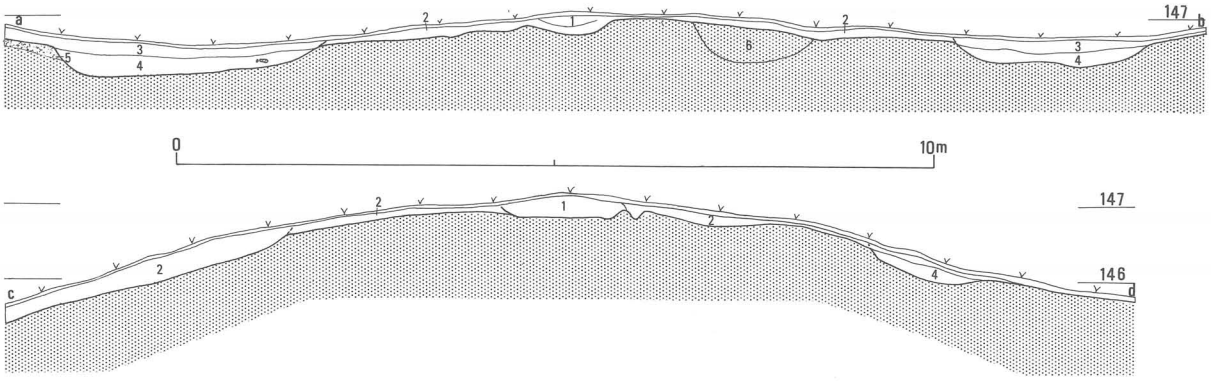
第２主体から、刀子が出土している。

５は刀子で刃先を曲げている。全長14.2㎝、刃部長9.8㎝、幅1.5㎝を測る。

その他、周溝内より土師器と思われる破片が出土している。



第25図　有本５号墳平面図（Ｓ＝１：100）



1．暗茶褐色土　　4．黒灰色土
2．暗灰白色土　　5．黒灰色土(旧表土)
3．淡黒灰色土　　6．暗灰色土(弥生時代の遺構)

第26図　5号墳断面図(S＝1：100)

（5）5号墳

1．**墳丘**（第25図）

4号墳の南側、稜線上に立地する。北と南側は丘陵の切断による周溝があり、それぞれ4・6号墳と共有している。本墳にのみ山石による葺石が見られる（第27図参照)。北側の葺石が比較的残りが良いが、密に積まれている状況ではなく平面的に置かれているようである。西側には現状では見られず、墳端も明瞭でないため、すでに流失しているのかも知れない。しかし東側平野部を意識した構築であるとしたら当初から葺かれていなかった可能性も考えられる。南側の西半分はすでに転落した状況と考えられる。よって、全体的に見て転落石の数がかなり少ない事から、斜面全面に密に葺かれていた可能性は少なく、おそらく墳端から墳丘側に幅1m程葺かれていたのではないかと推測される。

5号墳はこの葺石の状況から四角というより台形に近く南北8.5～10m、東西9m、高さは北側0.83m、南側0.63mを測る。墳丘のほとんどが流失しているため盛土も10cm程しか残存せず、埋葬施設についてもその痕跡を部分的に確認したにすぎない。本墳の下層には弥生時代の貯蔵穴（第26図6）が存在する。

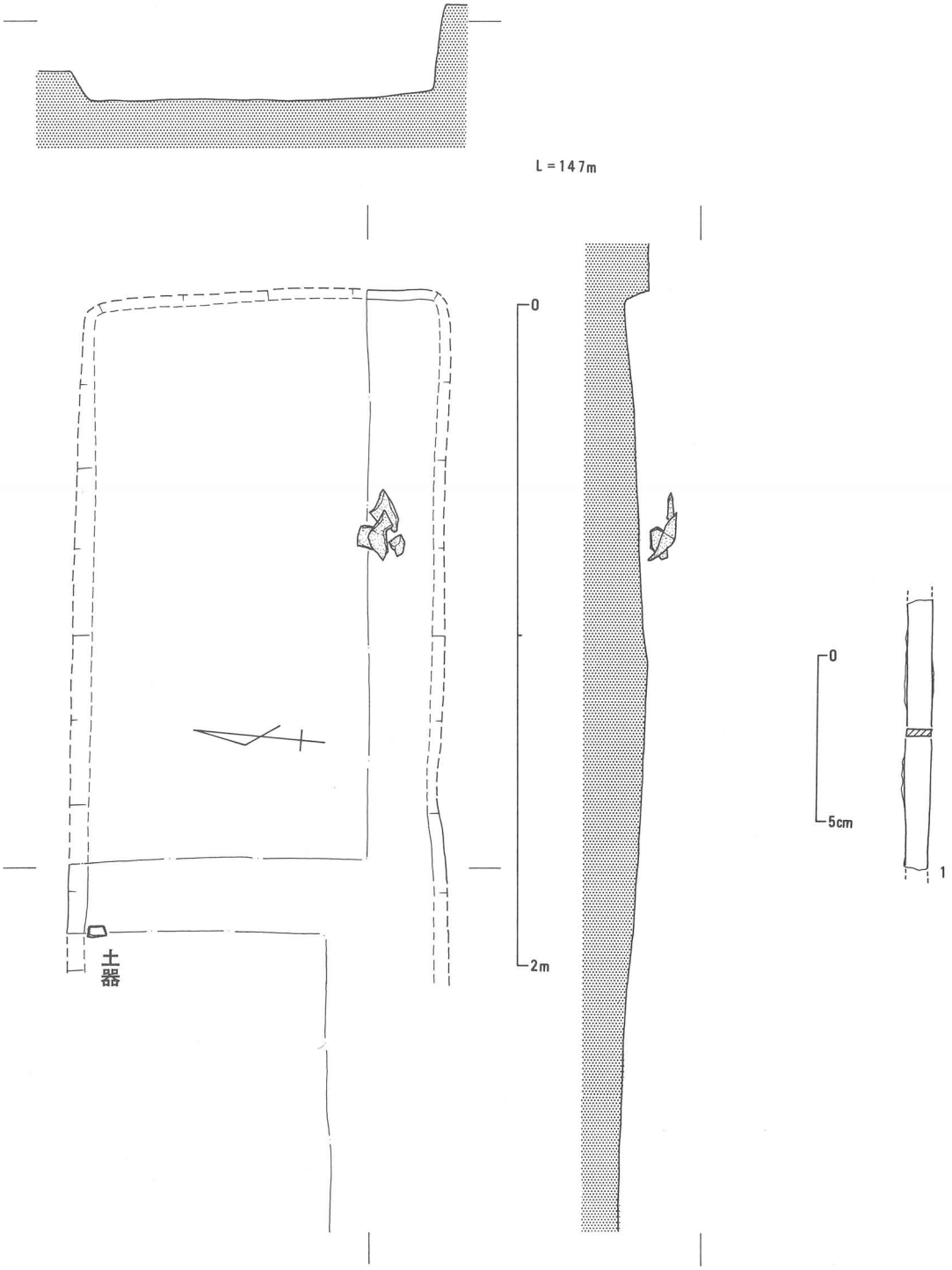
2．**埋葬施設**（第28図）

埋葬施設は墳丘のほぼ中央北よりに1基その痕跡を確認した。ほぼ東西方向を向いていると考えられるが東小口側のみ痕跡を確認した。盛土を掘り込んで作られており、規模については、全長2m以上、幅1.14mである。東小口側で石材の細片が4点出土したがその性格については不明である。また、北側壁の西よりから土師器とおもわれる高杯の破片が出土している。また、埋葬施設の検出時に鉄器片（第28図1）が1点出土している。本埋葬施設が墳丘のやや北よりにあるため、これの南側にもう1つ埋葬施設が存在していた可能性は大きい。

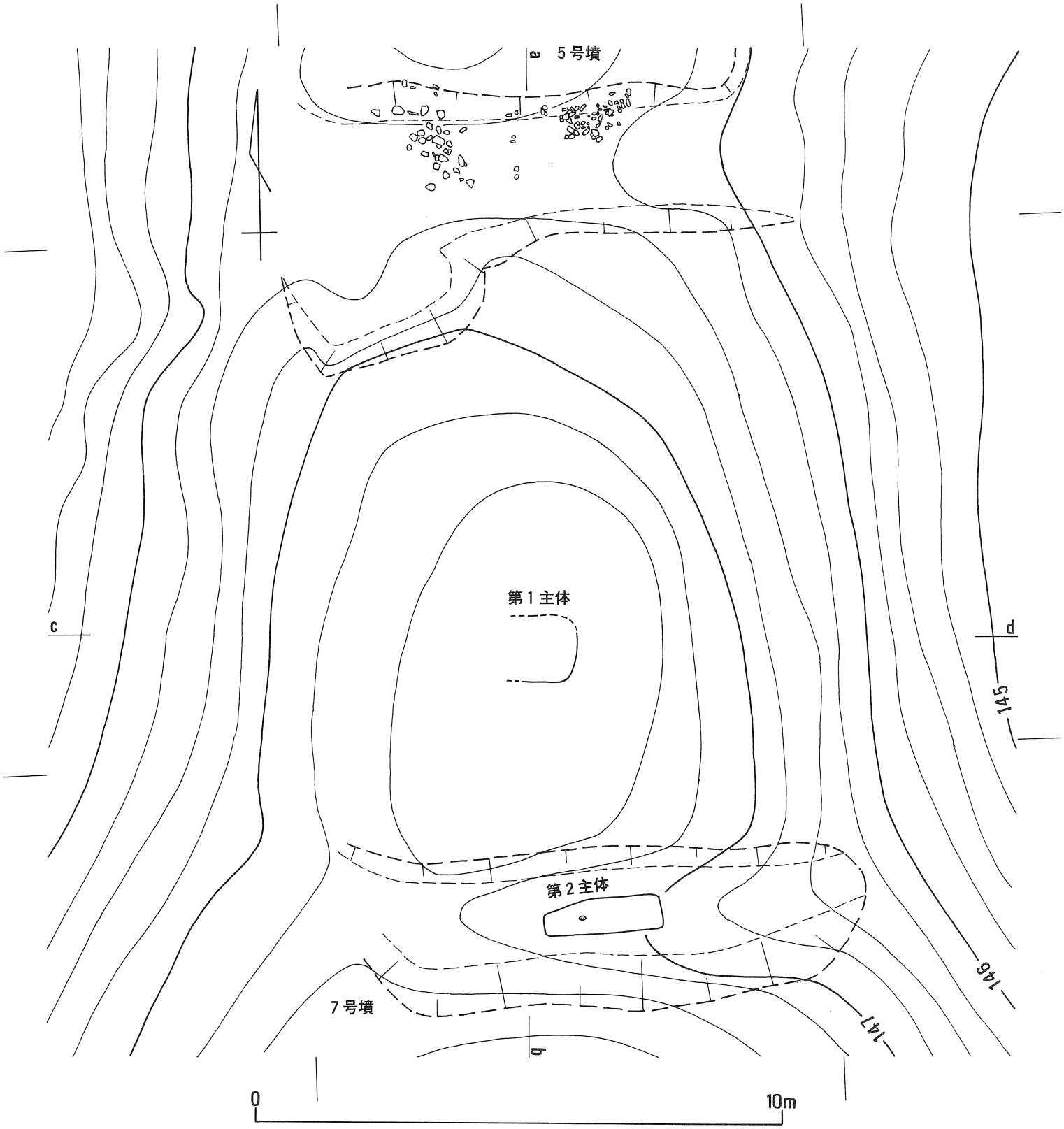
3．**出土遺物**（第28図）

鉄器片が1点出土している。1は全長8.2cm、幅0.8cm、断面長方形の破片である。器種は不明であるが、鉈の一部であろうか。中央北よりから土師器と思われる高杯の破片が出土しているが、細片のため図示していない。

第27図　5号墳葺石平・断面図(S＝1：40)



第28図　5号墳主体平・断面図(S＝1：20)及び出土遺物(S＝1：2)



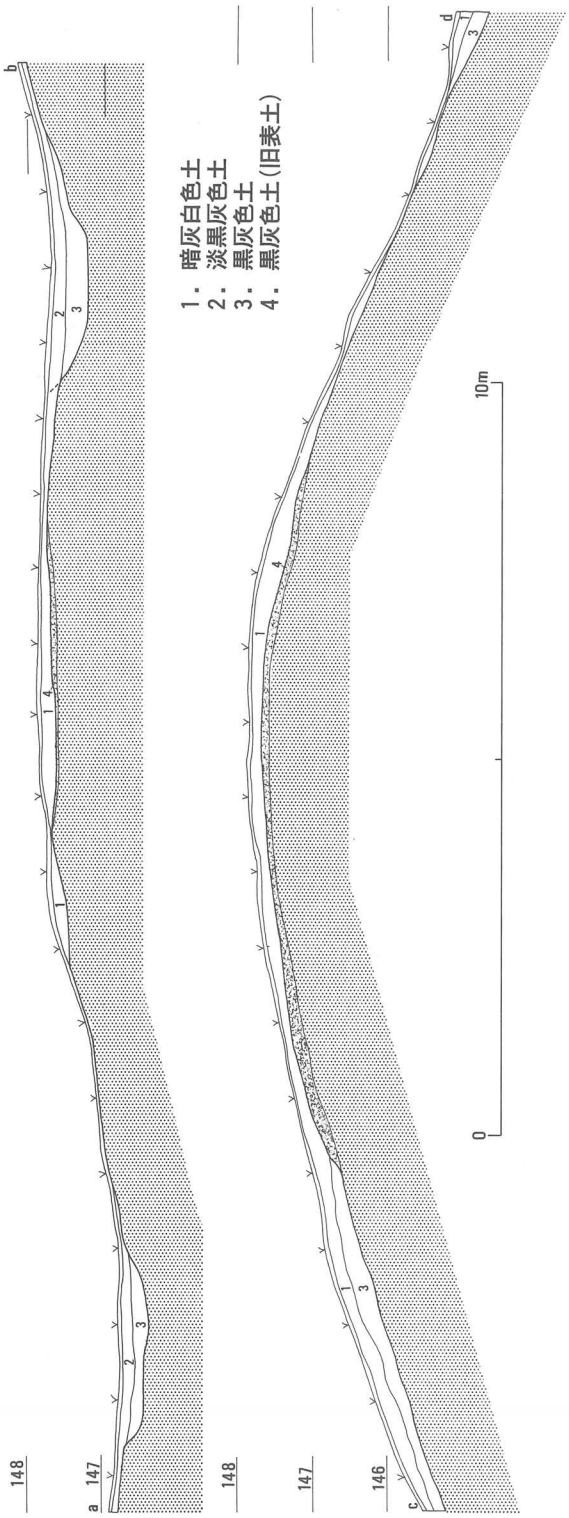
第29図　有本6号墳平面図(S＝1：100)

（6） 6号墳

1．**墳丘**（第29図）

5号墳の南側、南北の丘陵を切断する周溝により墳形が整えられている。北側は5号墳、南側は7号墳と周溝を共有している。北側周溝の西側が墳丘を一部えぐる形となっている。この部分のみ当初から土質が異なっていた。そのため別遺構の可能性もあるが出土遺物も無く、この部分に立木があった事から、ここでは木の根などによる撹乱と解釈したい。東、西側は地山整形と考えられるがすでに流出しているのか墳端は明瞭でない。

6号墳は南北12.5m、東西10m以上の方墳である。高さは北側1.45m、南側0.65mを測る。南側の周溝内から土壙墓1基を検出した。ただこの周溝は7号墳とも共有するためどちらに属するかは明瞭でないが、位置的に6号墳に近い事から6号墳に所属させている。墳丘の大部分はすでに流失しているため、盛土は約20cm程でほぼ1層である。本墳には旧表土（第30図4）がかなり顕著に観察される。墳丘中央やや南側に埋葬施設の痕跡を1基確認した。この埋葬施設が墳丘中央の南側にある事からこれの北側にもう1つ埋葬施設が存在していた可能性は大きい。



第30図　6号墳断面図（S＝1：100）

2．**埋葬施設**（第31～32図）

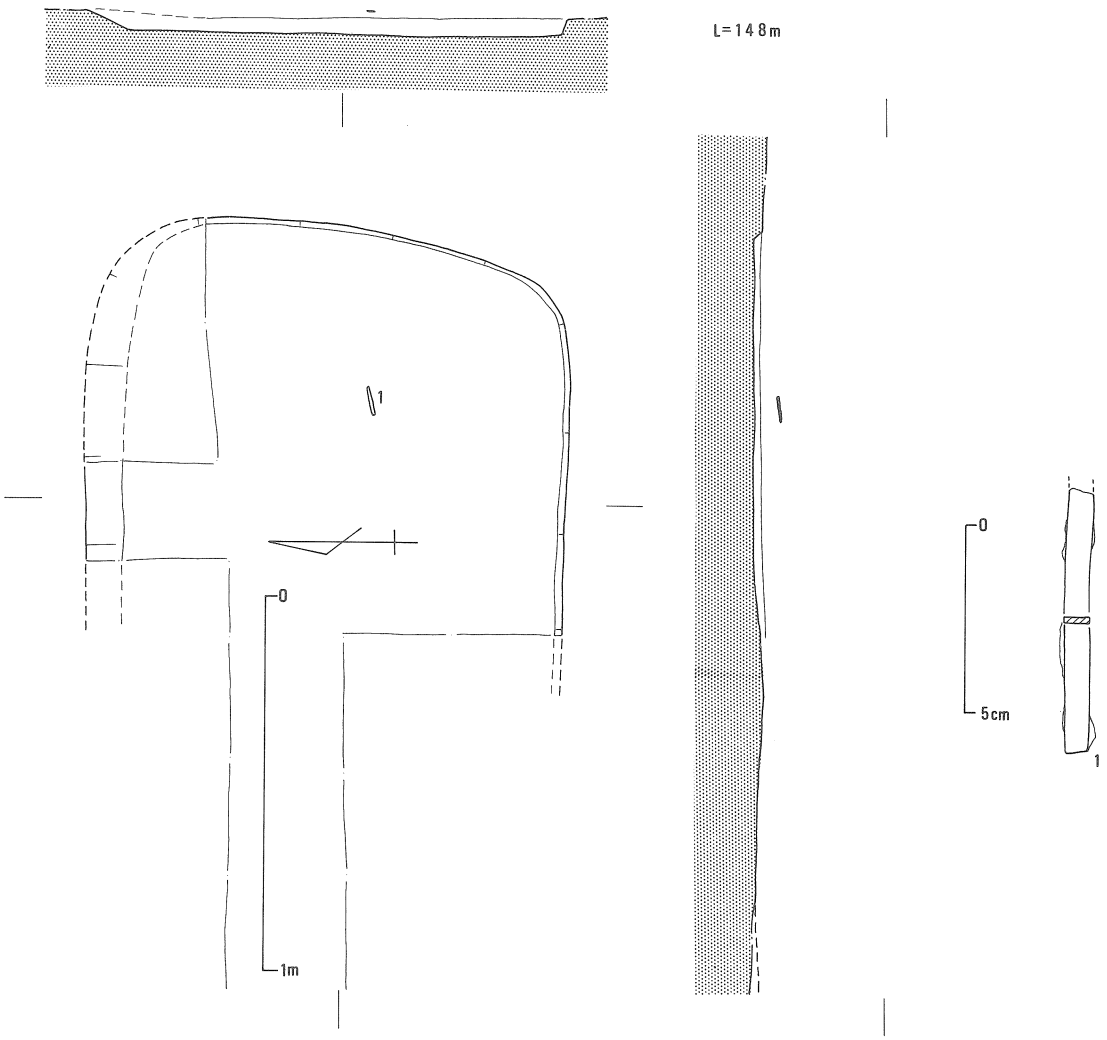
埋葬施設として墳丘内に1基（第1主体）、周溝内に1基（第2主体）検出した。

第1主体（第31図）

東西方向を向くと考えられるが、その東小口側のみを検出した。墓壙は掘り方残長2m、幅1.28m、隅丸長方形と考えられる。盛土を掘り込んでつくられ、内部から鉄器片（1）がやや浮いて1点出土している。木棺の痕跡は見られない。

第2主体（第32図）

南側周溝内に存在する。墓壙は2段掘りで



第31図　6号墳第1主体平・断面図(S＝1：20)及び出土遺物(S＝1：2)

掘り方全長2.26m、幅東小口62cm、西小口37cm、その内側に長2.16m、幅30cm程の掘り込みがある。墓壙中央上面西よりに石が1個出土し、その状況から一種の墓標的なものと考えられる。出土遺物として埋土から土師器の破片が出土している。

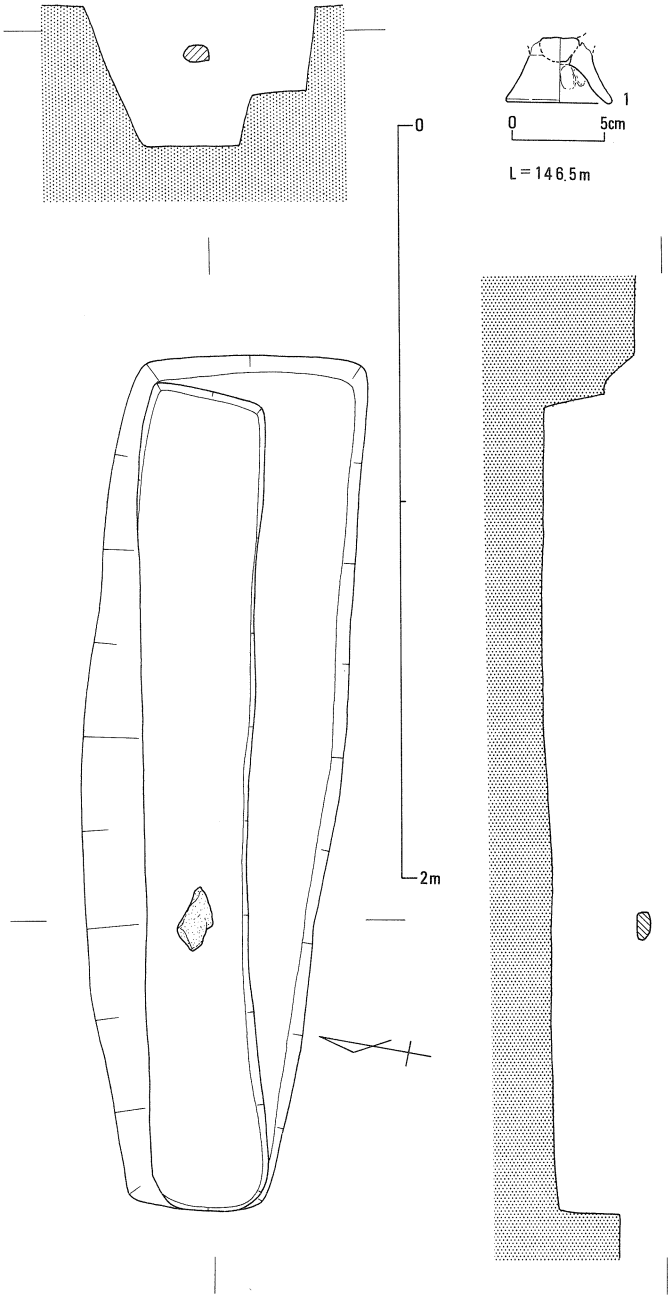
3．出土遺物（第31・32図）

第1主体から、鉄器片が出土している（第31図）。

1は長さ7cm、幅7mm程のもので、刃部らしきものは存在しない。そのため、鉈か何かの一部分と考えられる。

第2主体の埋土から土師器の破片が出土している(第32図)。

1は台付きの器種の台の部分で、ハの字に開き接合部分には、粘土の塊を上からつめて充填している。内面には指頭ナデの痕跡が明瞭である。

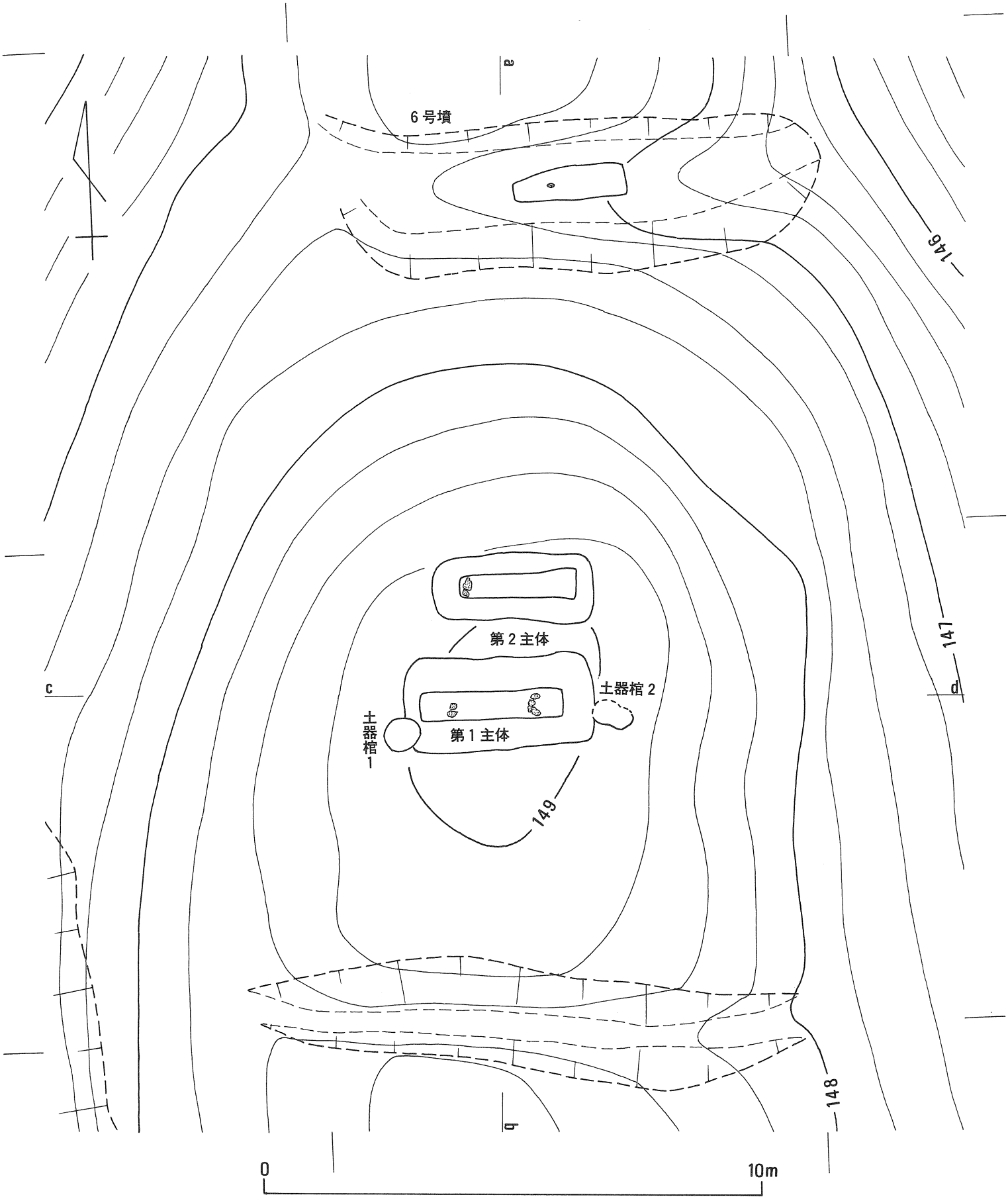


第32図　6号墳第2主体平・断面図(S＝1：20)及び出土遺物(S＝1：4)

(7) 7号墳

1．**墳丘**（第33図）

本丘陵の最高所に立地し南北の丘陵切断の周溝によって墳形を整えている。北側の周溝は6号墳と共有している。東、西側は地山整形によるものと考えられるが、既に流出しているのか墳端は明瞭でない。東西約11m以上、南北15.8m、高さ北側で2m、南側0.83mの方墳である。盛土は約30cm残存し地山ブロックは含まずほぼ1層である。この盛土を切って埋葬施設が作られている。本墳には旧表土（第34図7）が観察される。土層観察では東側に段のようなものが見られるが、これは後世の道で、墳丘を削りその土を斜面に敷いて段としている（第34図4）。



第33図　有本7号墳平面図（S＝1：100）

2．埋葬施設（第35～39図）

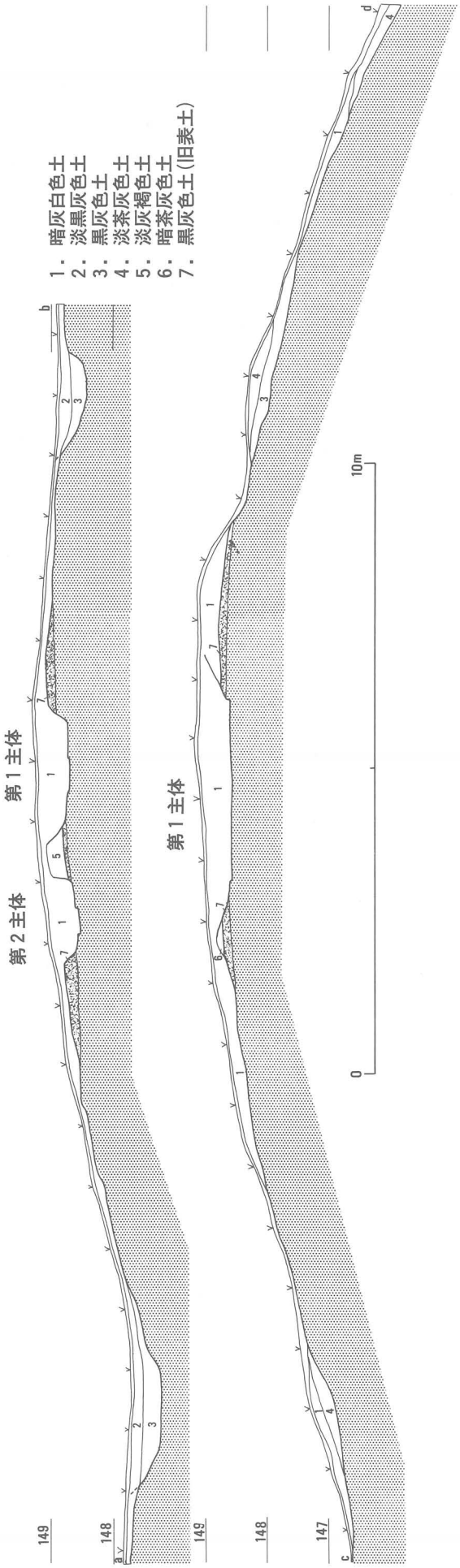
中央に２基検出し、いずれも東西方向を向き平行に配置されている。南側を第１主体、北側を第２主体と呼称している。両者の前後関係は不明である。おそらく相前後ないしはほぼ同時につくられているものと考えられる。また、第１主体の両小口側には土器棺が存在する。切り合い関係からいずれも第１主体を切って作られている。西側を土器棺１、東側を土器棺２と呼称している。

第１主体（第35図）

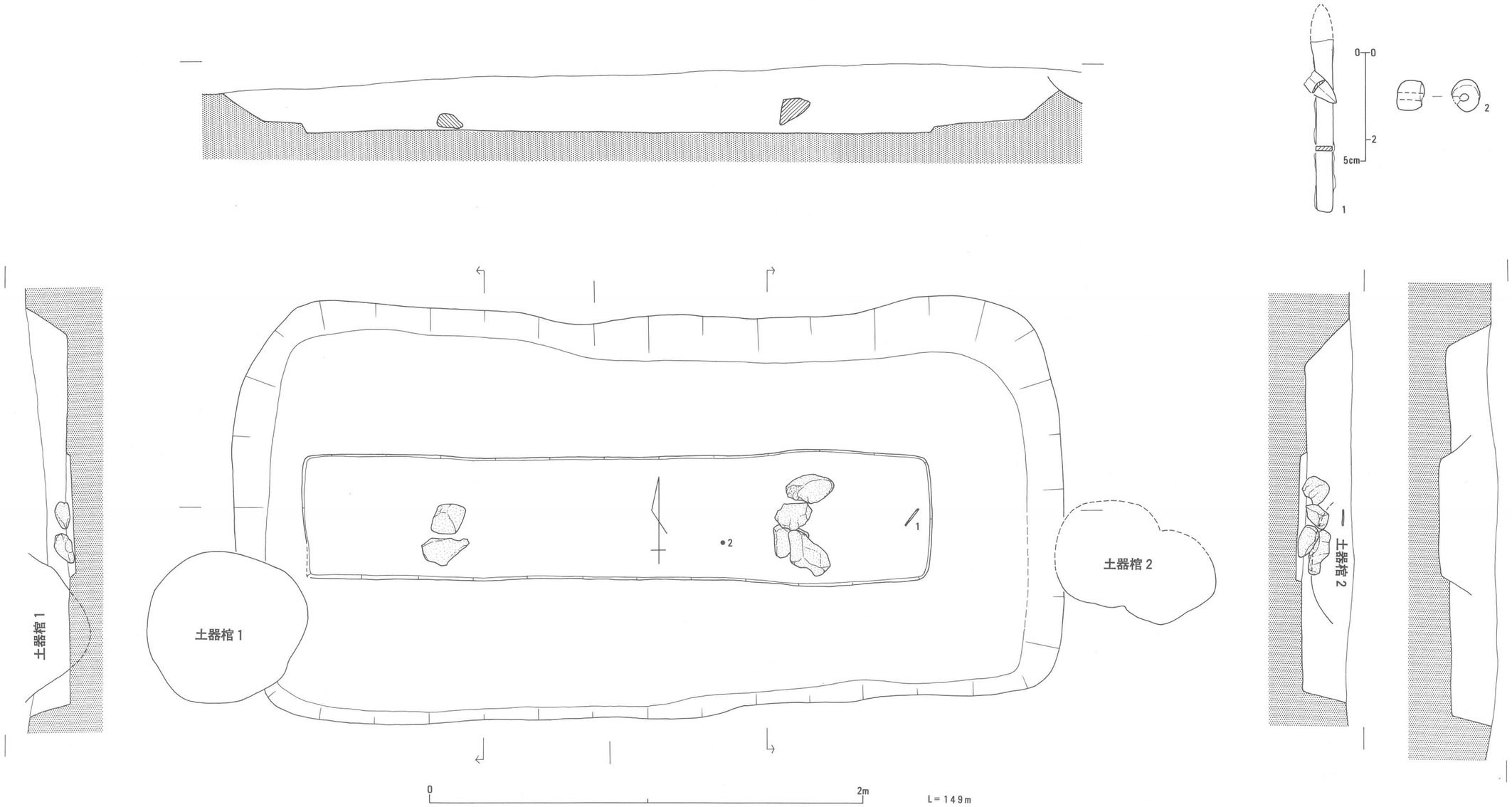
墓壙掘り方は２段掘りで全長3.8m、幅東小口1.8m、西小口1.9mの隅丸長方形で、その中央に全長2.88m、幅東小口55㎝、西小口56㎝程の掘り込みがあり、この中に木棺が置かれていたものと考えられる。木棺の形態については明瞭でないが床面は平らな形式である。粘土の使用は見られない。棺内東側には４個の石があり、枕石と考えられ、その東側に鉇（第35図１）の破片が１点、西側でガラス製小玉１点（同２）が出土した。そのため埋土を精査したが、その他の玉類は出土していない。西小口側にも石が２個やや南側にずらして存在する。これについては枕石の可能性も考えられるが、その場合２体入れれば、両枕石間が1.4ｍしかなく、やや窮屈な感もある。両小口側には土器棺がそれぞれありいずれも本埋葬施設を切ってつくられている。

第２主体（第36図）

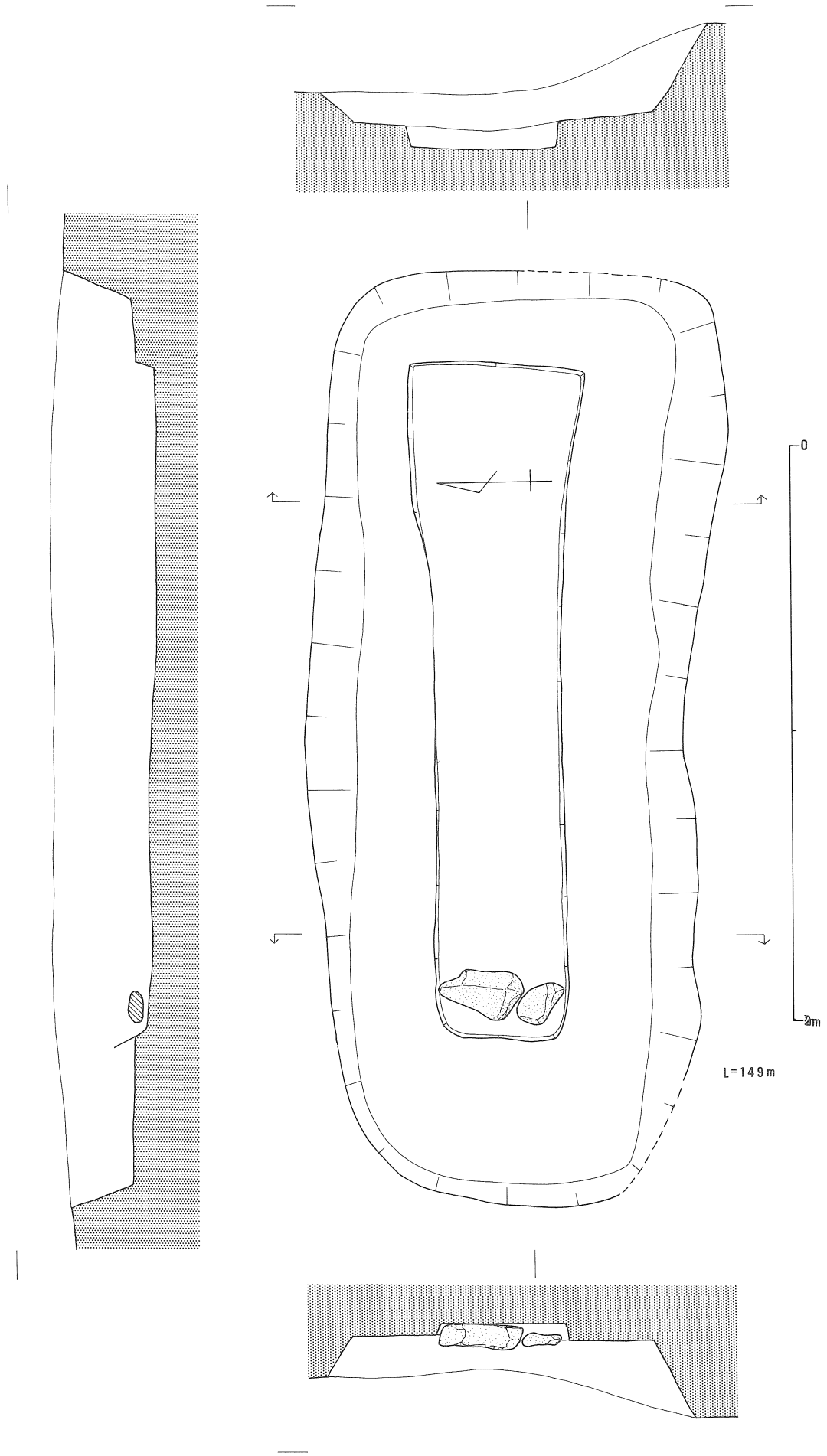
墓壙掘り方は２段掘りで全長3.23m、幅東小口1.3、西小口１ｍの隅丸長方形で、その中央に全長2.34m、幅東小口60㎝、西小口43㎝の掘り込みがあり、この中に木棺が置かれていたものと考えられる。木棺の形態については明瞭でないが、床面は平な形式である。粘土の使用は見られない。東側の小口部分の幅が西側に比べ長いため、枕石は存在しないが、東側が頭位と考えられる。また、西側に



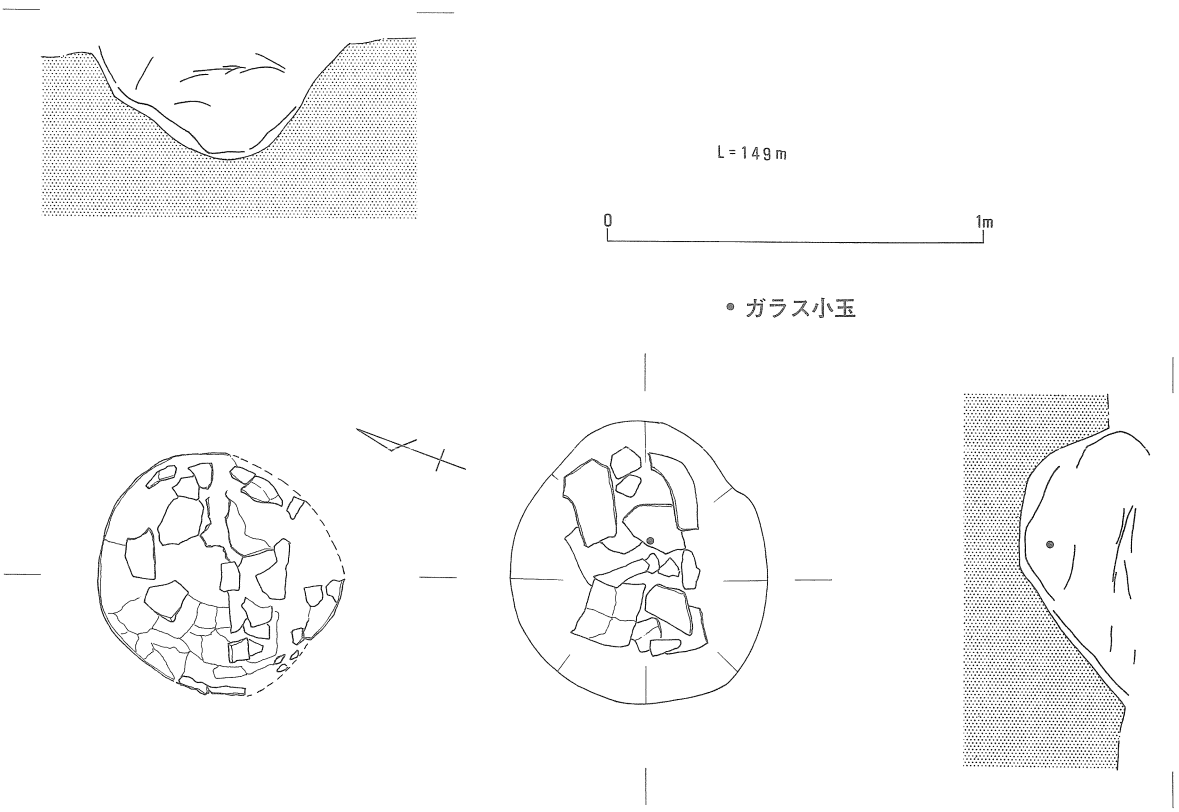
第34図　７号墳断面図（Ｓ＝１：100）



第35図　7号墳第1主体平・断面図(S＝1：20)及び出土遺物(1…S＝1：2、2…S＝1：1)



第36図　7号墳第2主体平・断面図（S＝1：20）



第37図　7号墳土器棺1平・断面図(S＝1：20)

は2個の石が見られ枕石とも考えられるが明瞭でない。出土遺物は皆無である。

土器棺1（第37図）

第1主体の西小口側を一部切る形で作られている。直径75㎝、現高30㎝程の円形墓壙に高さ67.5㎝程の壷を口縁部を上にしそのままいけ、高杯を逆さにし杯部で蓋をしていたと考えられる。原位置を保っていたのは胴部下半で、それより上部は内部に落ち込んでいた状態であった（第37図左）。埋土を精査したが出土遺物としてガラス製小玉（同●）が1点底部付近から出土したのみである。このガラス玉は二つに割れていたが、当初から割れていたかどうかは不明である。

土器棺2（第39図）

第1主体の東小口側を一部切る形で作られている。かなり削平を受けているため詳細は不明だが、円形の掘り方が二つくっついた形で、西側は土師器の壷の口縁部を打ち欠きそれを横にし、その口縁部で蓋をしている様である。さらに東側の胴部は圧しつぶれた状態であるが、別個体の肩部付近の破片を使用し2～3重に重ねていた様である。いずれにしても現状では埋葬状態の復元は難しい。内部からの出土遺物は皆無である。

3．出土遺物（第35・38・39図）

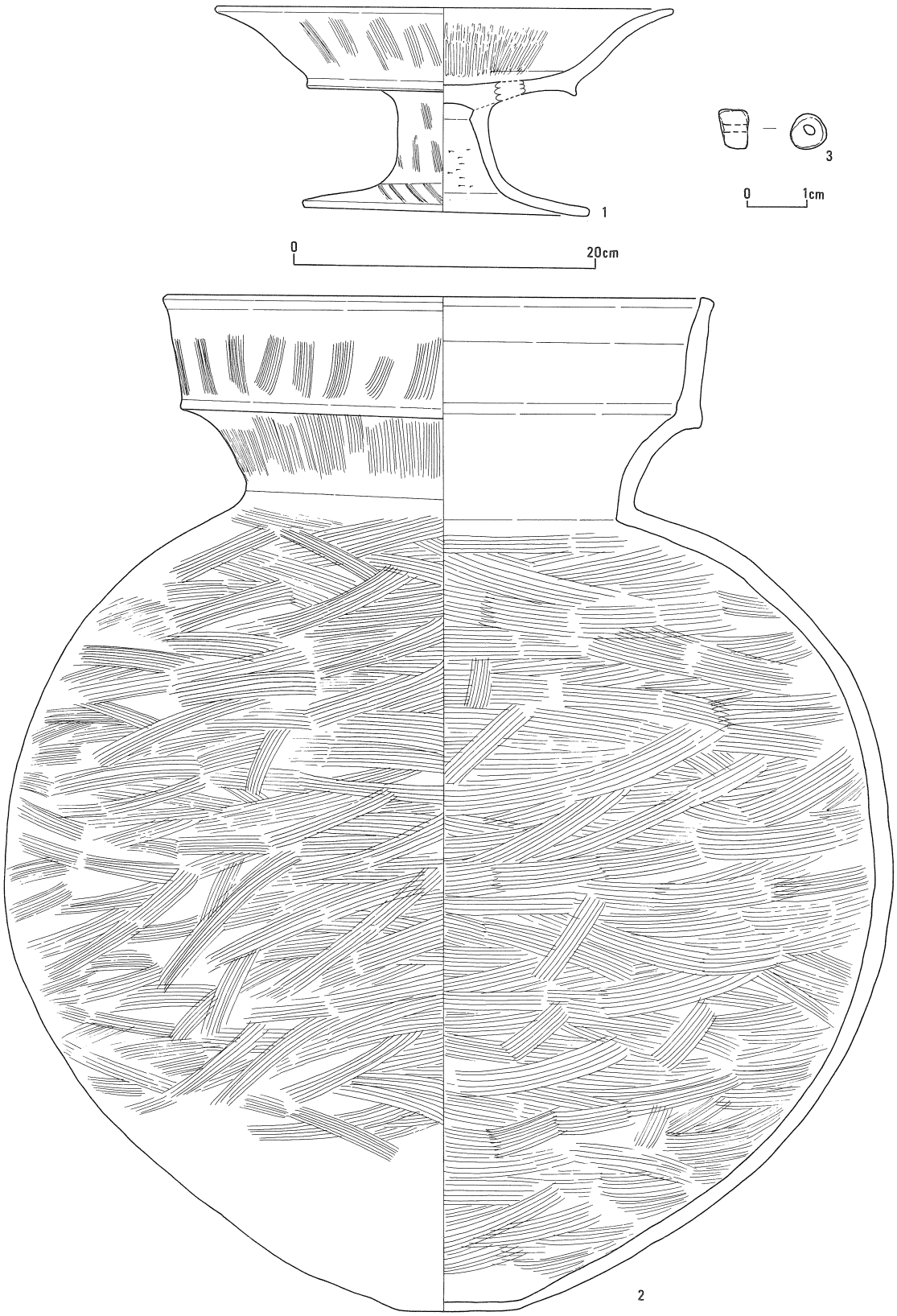
第1主体から、鉇、ガラス製小玉が出土している（第35図）。

1は鉇で刃部が割れ茎部とくっついている。刃部を復元した全長は9.6mを測る。

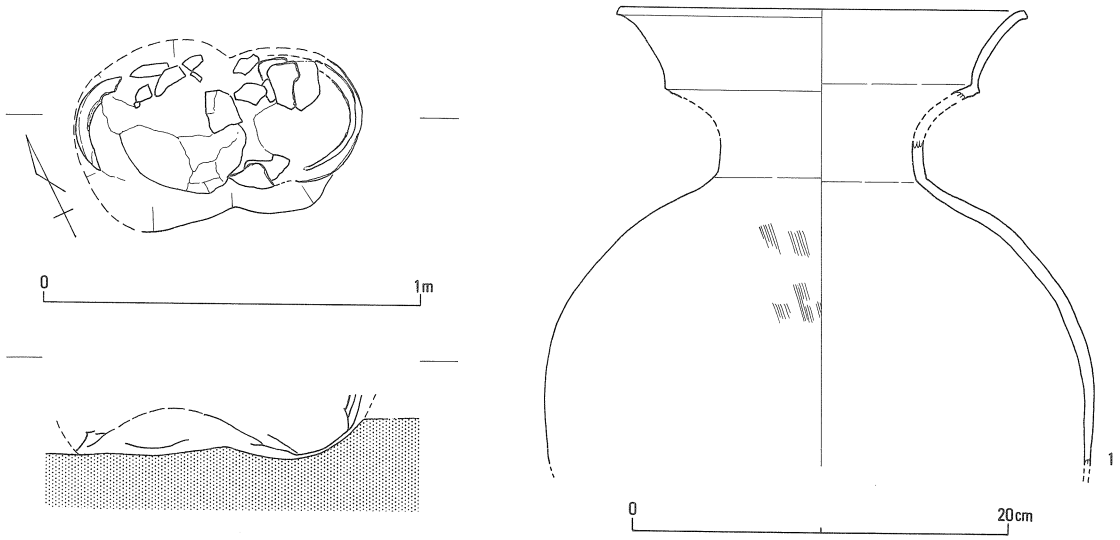
2はガラス製の小玉である。一部欠損している。

土器棺1は土師器の壷と高杯からなり、内部からガラス製小玉が1点出土している（第38図）。

1は高杯で口径30.3㎝、底径19㎝、器高13㎝に復元できる。杯部は屈曲部が下方にかなりしつかりと



第38図　7号墳土器棺1出土遺物（1・2…S＝1：4、3…S＝1：1）



第39図　7号墳土器棺2平・断面図(S＝1：20)及び出土遺物(S＝1：4)

つまみ出され、口縁はやや外半し端部は丸く仕上げている。外面はタテハケ調整の後ナデ手仕上げ、内面には縦方向のヘラ磨きが観察される。脚部は幅6㎝程でかなりしっかりしたつくりである。底部の屈曲も大きく、裾部がかなり開ろがっているため、端部の接地面が多い器形である。外面はタテハケやナナメのハケの後ナデ仕上げ、内面はヘラケズリを施している。

2は土師器の壷で口径34.5㎝、底径8㎝、器高67㎝にほぼ復元できる。口縁は二重口縁でやや開きぎみに立ち上がり、端部をやや内側につまみ上げ端面はほぼ平に仕上げている。口縁外面にはタテハケがやや当間隔に模様の様に施されている。頸部にも緻密なタテハケが見られる。胴部は球形に近く、底部がわずかに残っている。外面にはヨコないしはナナメのハケがほぼ全面にに施され、内面も同様な仕上げである。胴部の粘土紐の痕跡はかなり明瞭に観察される。

3は、ガラス製の小玉である。

土器棺2は土師器の壷である（第39図)。

1は壷で二重口縁であるが口縁部を打ち欠いているため、頸部付近がなく胴部とは接合できない。口縁は大きく外反し端部は平らに仕上げている。胴部の最大径はほぼ真ん中あたりにある。外面はハケ、内面は剝落のため調整は不明である。底部付近については存在しないため形態は不明である。その他2個体分と考えられる頸部付近の破片が存在するが、図示してはいない。

Ⅳ　自然科学的分析

有本古墳群出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1．はじめに

この分析では、蛍光X線分析法により有本古墳群および津山市内の古墳時代前期から出土した土師器について胎土分析を実施し、以下の点について検討した。

（1）有本1号墳第1主体および2号墳第1主体内の枕として転用されていた鼓形器台が、胎土分析により在地で生産されたのかあるいは、山陰からの搬入品なのか検討した。

検討方法としての資料の選びかたは、在地の土器であるかどうかの比較資料として、有本古墳群で出土した土器・津山市内のほぼ同じ時期に出土した土師器（近長丸山1・2号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡）そして、搬入されたかどうかの比較資料として、山陰地方の8遺跡（倉吉市夏谷遺跡・二夕子塚遺跡・猫谷遺跡、鳥取市秋里遺跡・岩吉遺跡、米子市上福万妻神遺跡・米子城西町遺跡・青木遺跡）から出土した土器を分析し検討した。

2．分析方法・結果

分析方法は、理学電機製波長分散型蛍光X線分析装置(KG－4型)を使用して、分析試料の作製は、試料粉砕機により200メッシュほどに粉砕し、この粉末試料を塩化ビニール製のリングに装填、油圧成形器により15トンに加圧成形を施し、分析試料とした。測定方法は現在まで筆者がおこなっている方法である[(1)]。

ここで分析した土器は、第1表に揚げた有本古墳群および津山市内の遺跡（近長丸山1・2号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡、一貫東遺跡）と倉吉市二夕子塚遺跡、夏谷遺跡から出土した66点の土器である。また、その他の山陰地方の土器は、以前分析した分析結果のデータを使用した[(2)]。

分析の結果、K_2O・CaO・Sr の各元素に顕著な差がみられることから、K_2O-CaO と Sr-Rb のXY散布図により比較した。

第1図 K_2O-CaO 散布図では、各地域・遺跡ごとに比較してみた。まず、津山市内の各遺跡の比較では、有本古墳群と近長丸山1・2号墳の土器が一つにまとまる。そして、京免遺跡と大田十二社遺跡の土器が一つにまとまり、K_2O 量が2% を境界ラインとして、有本・近長丸山古墳と京免・大田十二社遺跡の二つのグループに大きく分かれた。また、山陰地域の土器は、倉吉地区（夏谷遺跡・二夕子遺跡・猫谷遺跡）と鳥取地区（秋里遺跡・岩吉遺跡）で一部重複するがほぼ識別できる。しかし、米子地区の3遺跡（上福万妻神遺跡・米子城西町遺跡・青木遺跡）はまとまりがなく、分散して分布した。

第2図 Sr-Rb 散布図では、津山市内の有本古墳群、近長丸山1・2号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡の各遺跡とも、Sr（ストロンチウム）量が100前後と低い値を示し、散布図でもほぼ一つにまとまる傾向を示した。また、山陰地域の各遺跡の土器は、Sr 量が120より高い領域に分布した。

次に、第1・2図の山陰地方の土器の分布領域をもとに、有本古墳群、京免遺跡、大田十二社遺跡の各遺跡から出土した鼓形器台をプロットした散布図を第3・4図に示す。第3・4図から、有本1・2号墳出土の鼓形器台（1・2）は、山陰地域の分布領域に入らなかった。ただ、2点の器台とも山陰領域

（米子・鳥取の各遺跡）に接してプロットした。

京免遺跡の鼓形器台（22・23・24・25）のうち、22・24の器台と大田十二社遺跡の鼓形器台（31）が山陰領域（米子、倉吉、鳥取の各遺跡）に入った。また、23・25の器台はK_2O（カリウム）量が山陰領域（米子の各遺跡）にプロットされたが、第４図のSr（ストロンチウム）量では山陰領域に入らなかった。

第５・６図では、有本古墳群、近長丸山１・２号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡の器台以外の壷・甕について検討した。この結果、京免遺跡の甕（21・27）の２点が山陰地方の領域にプロットした。しかし、その他の壷・甕は、各遺跡ごとにまとまり特異な分布をする土器はなかった。

３．まとめ

以上のように、有本古墳群その他出土の土器を分析したが、簡単にまとめと今後の課題について述べる。

（１）有本古墳群、近長丸山１・２号墳（古墳出土土器）と京免遺跡、大田十二社遺跡（集落跡出土土器）の土器がそれぞれ一つにまとまり、別々のグループを作る様相を呈している。このことから、供献土器と日常的に使用される土器の間で、胎土に差があることがこの結果から推察される。ただ、今回の限られた土器の資料から明確なことは言えず、今後の資料の蓄積を待ちたい。

（２）有本１・２号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡から出土した鼓形器台の分布では、有本１・２号墳の２点の器台とも山陰地域の分布領域に完全に入らなかった（非常に接近した分布を示したが）。しかし、山陰地方の土器自体も資料数で限定されており、今後資料を増やして再検討する必要がある(3)。また、京免遺跡の22・23・24・25の器台のうち22・24と大田十二社遺跡の31の器台が山陰領域に入る結果となったが、美作地域の在地土器を蓄積して検討する必要がある。また、京免遺跡の甕21・27の２点は、確実に山陰領域に入るようである。

このように、蛍光Ｘ線分析法による胎土分析では、津山市内の各遺跡（美作地域）と山陰地域の遺跡との比較で、美作、山陰の両地域の在地産土器が明瞭に識別できず、分布領域が重複する部分があり、非常によく似た胎土であることがわかった。ただSr-Rb散布図からSr（ストロンチウム）量が120前後を境にして美作と山陰に分かれる傾向にある。

また、有本１・２号墳および京免遺跡、大田十二社遺跡の鼓形器台が、在地で生産されたものか山陰から持ち込まれたものか検討したが、前記したように生産地（美作と山陰）の比較資料に限界があり産地を明確にすることはできなかった。今後の課題である。

最後になったが、この分析を実施するにあたり、津山市および倉吉市の教育委員会の職員の方々にお世話になった。記して感謝いたします。

（註）

(1) 白石　純「蛍光Ｘ線による考古学遺物（石器・土器）の化学的分析（Ⅲ）」『自然科学研究所研究報告』13 岡山理科大学　1987

(2) 白石　純「津寺遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 津寺遺跡３』岡山県教育委員会　1996.3

(3) 今回の分析で山陰領域の米子周辺（青木遺跡はわずか2点の分析試料であった）の分析資料が少なく山陰領域を確定することができなかった。

表1　分析試料一覧表(%)　ただしSr、Rbはppm

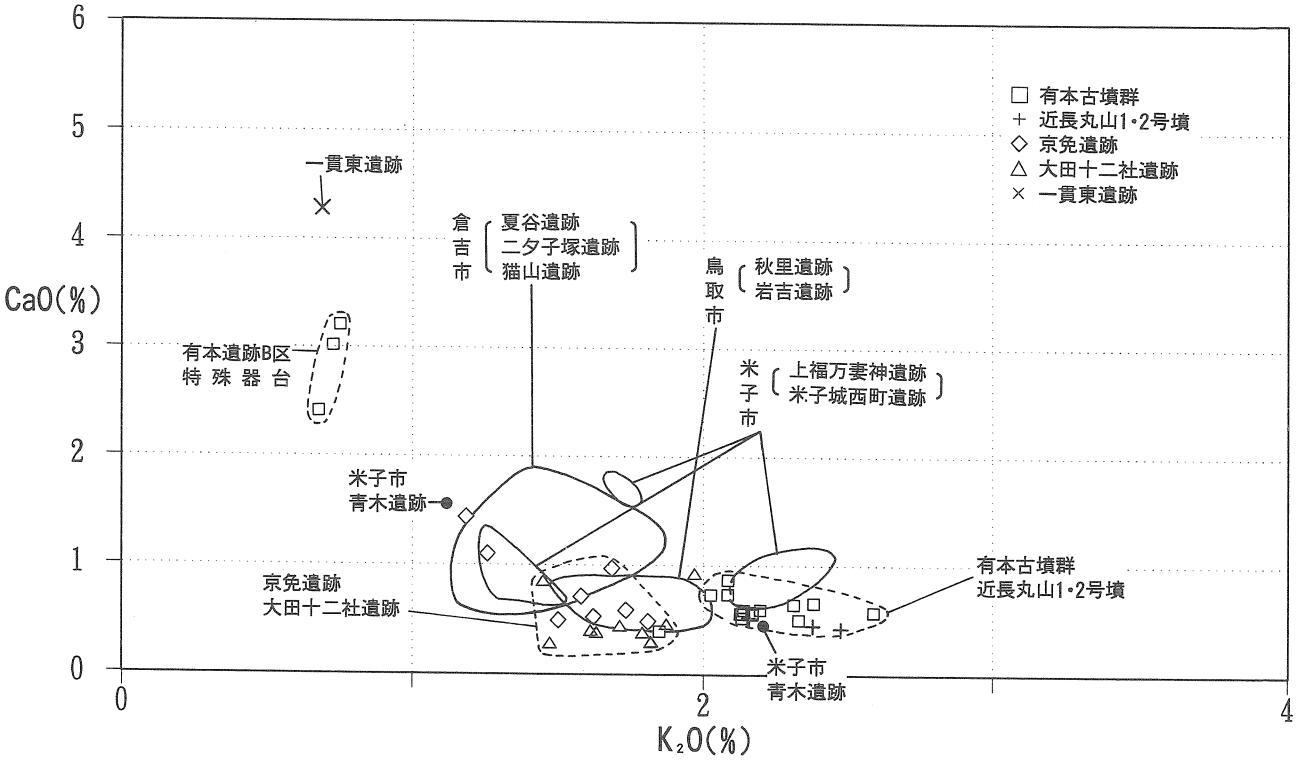
資料番号	遺　跡　名	地　区	器　種	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb	報告書図番号
1	有本1号墳	第1主体	器台	2.17	6.89	70.43	1.06	13.87	0.58	125	72	第12図1
2	有本2号墳	第1主体	器台	2.38	6.74	65.76	0.98	16.29	0.67	128	92	第17図1
3	有本1号墳	西周溝内		2.14	6.25	73.74	0.89	13.81	0.61	117	84	
4	有本2号墳	北西周溝内		2.20	6.81	68.42	1.00	15.97	0.60	118	82	
5	有本3号墳	南周溝内		2.02	6.77	68.54	1.06	15.24	0.75	131	90	
6	有本3号墳	西周溝内		2.08	8.64	69.34	0.99	12.52	0.74	119	76	
7	有本4号墳	北東周溝内		2.33	7.17	74.05	1.03	13.06	0.51	96	87	
8	有本4号墳	南周溝内		2.59	7.47	59.34	1.31	19.19	0.58	100	106	
9	有本6号墳	第2主体		2.13	6.30	71.50	0.91	15.57	0.56	103	88	
10	有本7号墳	土器棺1	壷	2.13	11.66	59.25	1.02	16.13	0.53	74	78	第38図2
11	有本7号墳	土器棺1	高杯	2.08	8.55	61.43	0.98	17.53	0.88	149	104	第38図1
12	有本7号墳	土器棺2	壷	2.31	8.52	60.14	1.00	17.63	0.65	114	90	
13	有本遺跡	B地区	特殊器台	0.75	14.46	42.22	1.36	20.51	3.21	129	37	
14	有本遺跡	B地区	特殊器台	0.73	14.08	41.45	1.31	21.62	3.02	120	37	
15	有本遺跡	B地区	特殊器台	0.68	13.46	40.80	1.33	23.63	2.42	100	32	
16	有本1号墳	第1主体	床面粘土	1.85	6.31	68.58	0.90	15.75	0.40	159	94	
17	近長丸山1号墳	第6主体		2.47	3.57	71.66	1.00	17.02	0.43	84	111	第15図1(1)
18	近長丸山1号墳	第6主体	壷	2.15	4.90	65.01	1.06	21.01	0.53	111	96	第15図2
19	近長丸山2号墳		壷	2.38	3.85	75.47	0.90	15.18	0.46	87	98	第20図2
20	京免遺跡	2区G-4　SD4	甕	1.63	4.06	65.91	1.13	19.36	0.53	104	76	Fig61-2(2)
21	京免遺跡	2区G-4　SD4下層		1.27	3.85	67.27	0.99	17.94	1.11	245	76	
22	京免遺跡	1区　SD4中層	器台	1.59	2.43	73.50	1.16	15.85	0.72	160	81	Fig24-4
23	京免遺跡	1区　SD4中層	器台	1.74	2.92	69.56	1.08	18.10	0.59	123	90	Fig24-2
24	京免遺跡	1区　SD4中層	器台	1.69	4.53	56.28	1.14	21.10	0.97	188	85	Fig24-3
25	京免遺跡	1区　SD4中層	器台	1.81	2.25	64.28	1.18	20.78	0.49	97	100	Fig24-5
26	京免遺跡	3区SD123　D-6	壷	1.51	5.27	64.57	1.16	19.34	0.50	105	57	Fig29-12
27	京免遺跡	3区SD123	甕	1.19	3.84	64.24	0.92	18.77	1.44	326	83	Fig29-18
28	大田十二社遺跡	6号住居跡	甕	1.79	4.52	73.53	1.27	15.75	0.41	89	81	Fig17-13(3)
29	大田十二社遺跡	14号住居跡	壷	1.64	4.72	71.50	1.15	16.37	0.40	91	77	Fig31-2
30	大田十二社遺跡	貯蔵穴30	甕	1.72	4.48	72.79	1.16	15.55	0.46	98	85	Fig60-3
31	大田十二社遺跡	貯蔵穴29	器台	1.46	6.84	63.11	1.09	18.36	0.87	168	99	Fig59-18
32	大田十二社遺跡	貯蔵穴55	甕	1.97	5.27	65.85	1.19	16.76	0.94	126	97	Fig67-16
33	大田十二社遺跡	貯蔵穴61	甕	1.62	3.52	71.89	1.30	16.40	0.41	92	88	Fig69-3
34	大田十二社遺跡	SS56-2	壷	1.87	4.56	71.21	1.07	16.17	0.49	80	90	Fig73-8
35	大田十二社遺跡	SS32	甕	1.82	6.08	68.69	1.11	16.36	0.32	65	88	Fig73-15
36	大田十二社遺跡	SS55-3	甕	1.48	8.12	67.58	1.19	15.29	0.30	46	75	Fig73-17
37	一貫東1号墳			0.68	13.19	43.74	1.78	19.37	4.28	167	23	
38	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.44	4.22	57.41	1.23	24.52	0.91	201	78	
39	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.16	5.24	51.29	1.57	28.26	0.72	159	56	
40	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.26	4.93	53.40	1.01	24.00	1.49	317	62	
41	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.39	4.21	53.85	1.25	24.84	0.75	196	85	
42	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.49	4.22	56.35	1.24	25.11	0.83	210	85	
43	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.38	4.25	54.38	1.32	24.81	0.62	155	79	
44	二夕子塚遺跡3･4号墳		器台	1.46	4.18	57.46	1.23	23.72	0.90	212	85	
45	二夕子塚遺跡			1.83	5.05	54.51	1.04	24.49	1.23	306	84	
46	二夕子塚遺跡			1.77	4.45	53.27	1.00	24.28	1.33	326	88	
47	夏谷遺跡	29号住居址	器台	1.24	3.54	52.76	1.15	25.72	0.93	225	70	
48	夏谷遺跡	29号住居址	器台	1.23	3.54	52.23	1.20	26.28	0.86	216	65	
49	夏谷遺跡	29号住居址	器台	1.18	4.23	55.21	1.24	25.26	0.67	166	77	
50	夏谷遺跡	29号住居址	器台	1.21	3.57	52.04	1.10	25.83	0.90	229	76	
51	夏谷遺跡	29号住居址	器台	1.25	3.49	53.00	1.14	26.29	0.85	220	67	
52	夏谷遺跡	29号住居址	器台	1.40	4.14	59.99	1.31	23.32	0.90	210	89	
53	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.43	4.15	60.14	1.40	23.18	0.96	206	73	
54	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.44	5.23	52.97	1.19	25.87	1.50	326	61	
55	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.42	5.47	53.07	1.26	25.39	1.54	311	59	
56	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.62	4.38	56.21	1.42	27.10	0.89	206	71	
57	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.55	4.65	52.92	1.16	26.21	1.08	292	73	
58	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.27	5.16	54.49	1.24	27.98	1.40	313	57	
59	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.59	4.72	53.78	1.16	27.00	1.18	292	75	
60	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.34	5.13	52.11	1.23	27.95	1.28	294	60	
61	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.39	3.57	55.94	1.24	24.67	0.77	200	66	
62	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.33	3.93	54.37	1.32	25.42	0.72	197	73	
63	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.38	5.14	52.12	1.24	28.52	1.21	290	61	
64	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.39	3.98	57.74	1.40	22.75	0.74	196	80	
65	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.40	3.85	56.48	1.35	24.06	0.74	194	83	
66	夏谷遺跡	30号住居址	器台	1.27	5.64	51.95	1.27	27.61	1.48	310	50	

(注)

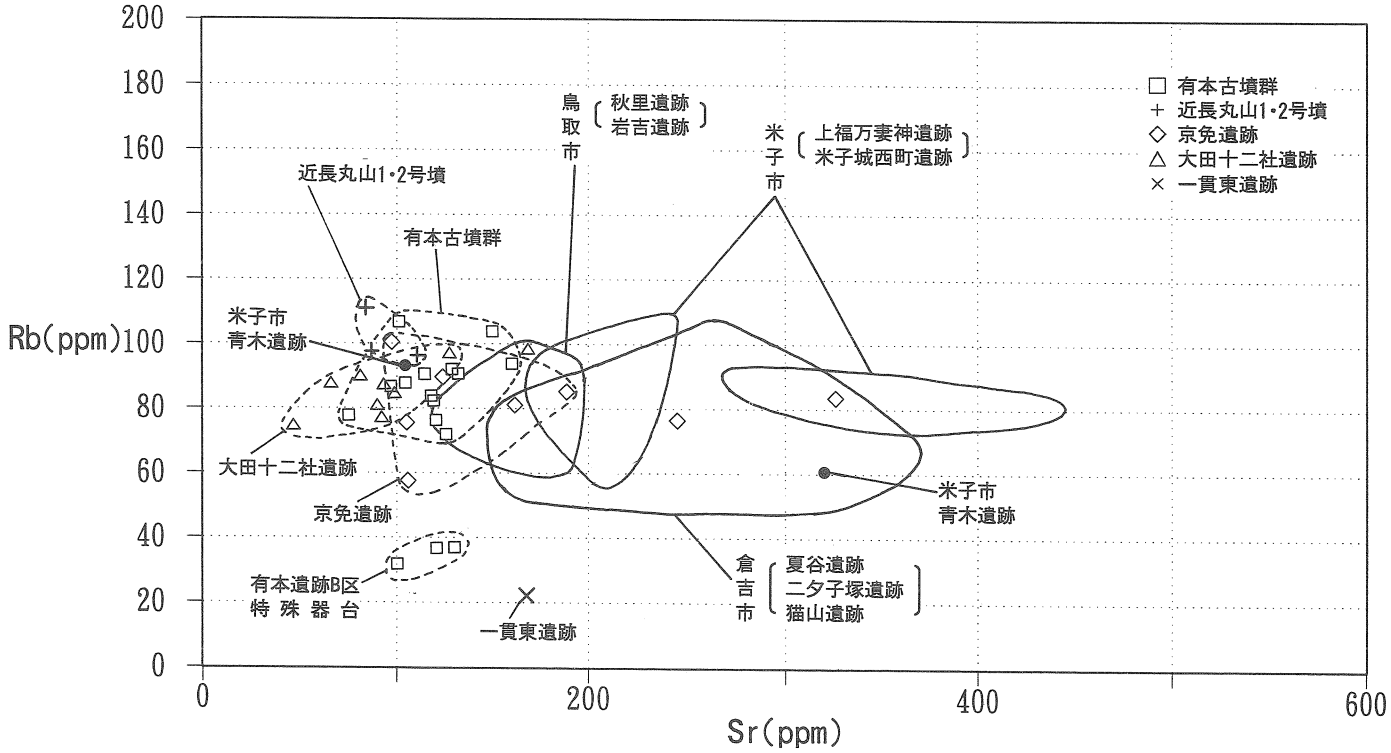
(1)小郷利幸「近長丸山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集1992

(2)中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集1982

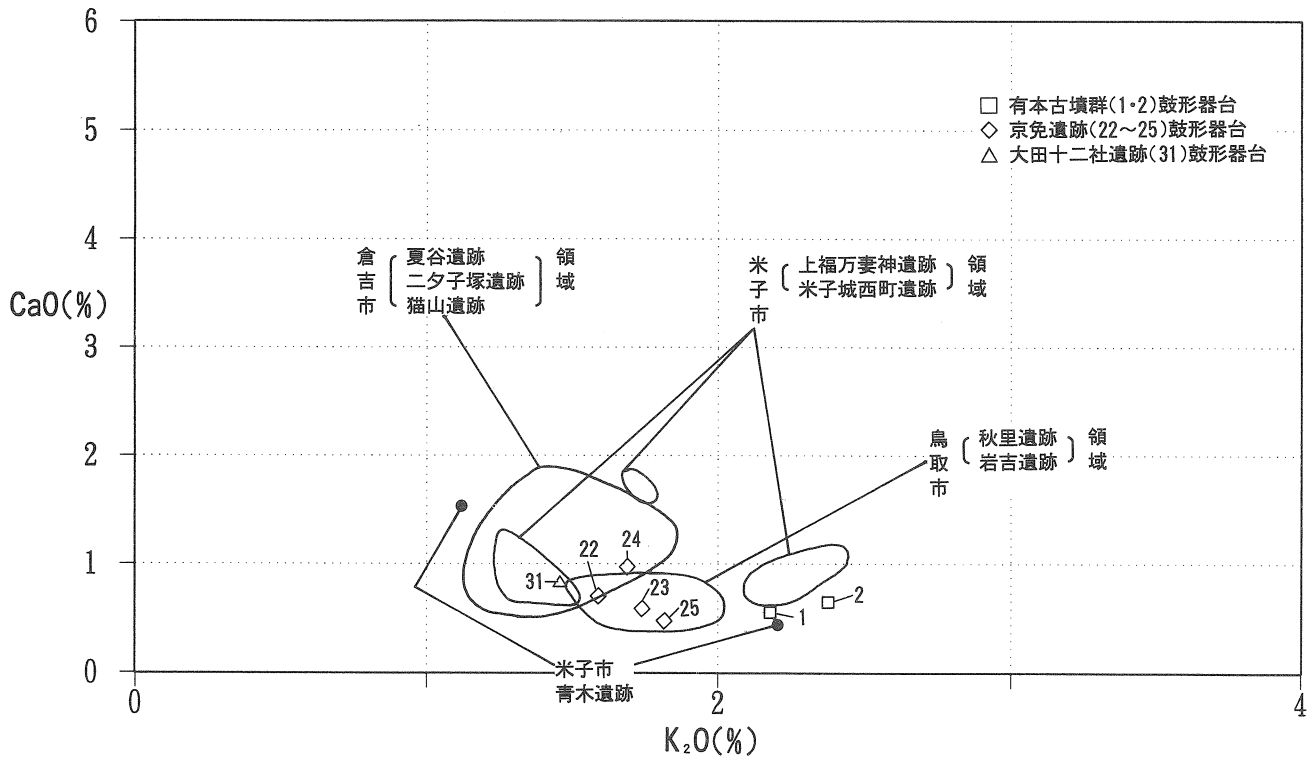
(3)河本清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集1981



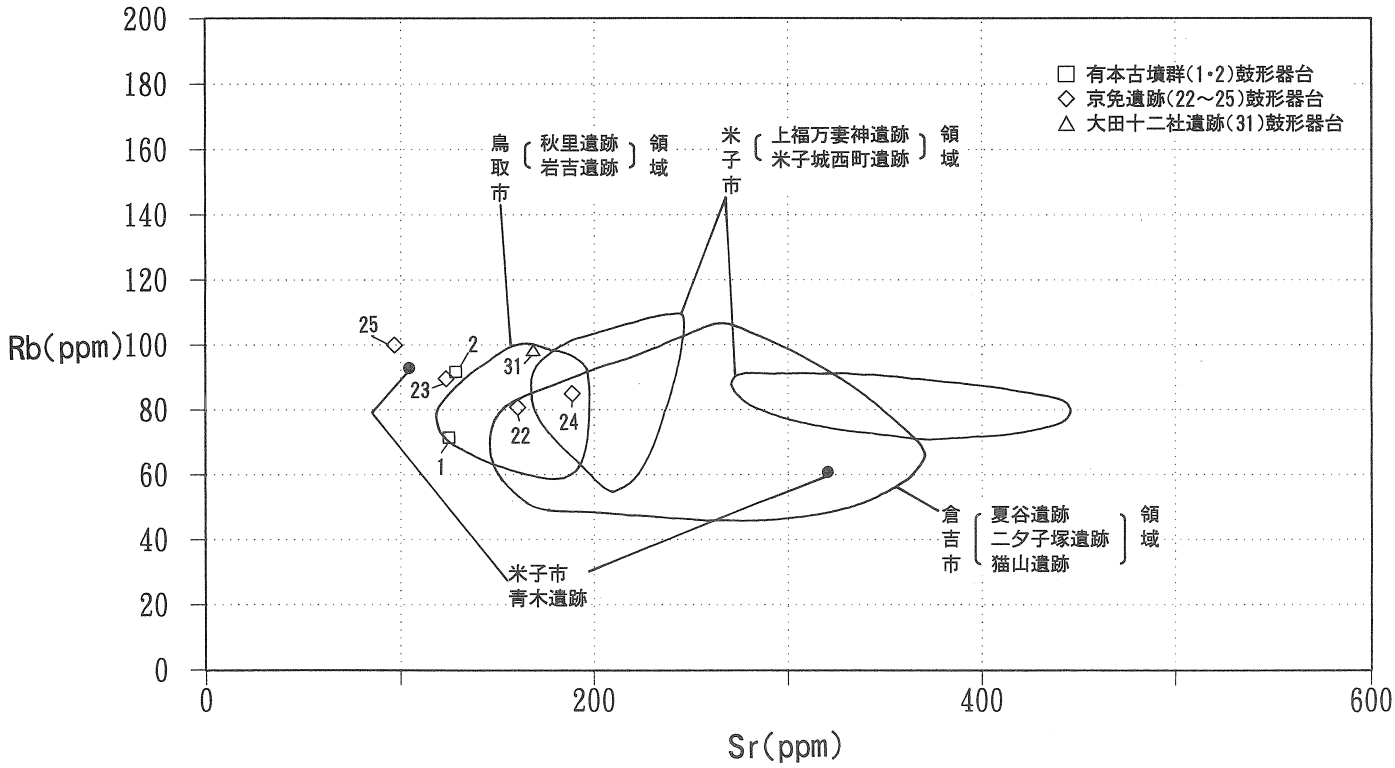
第１図　K_2O-CaO 散布図　美作、山陰地方の各遺跡の比較



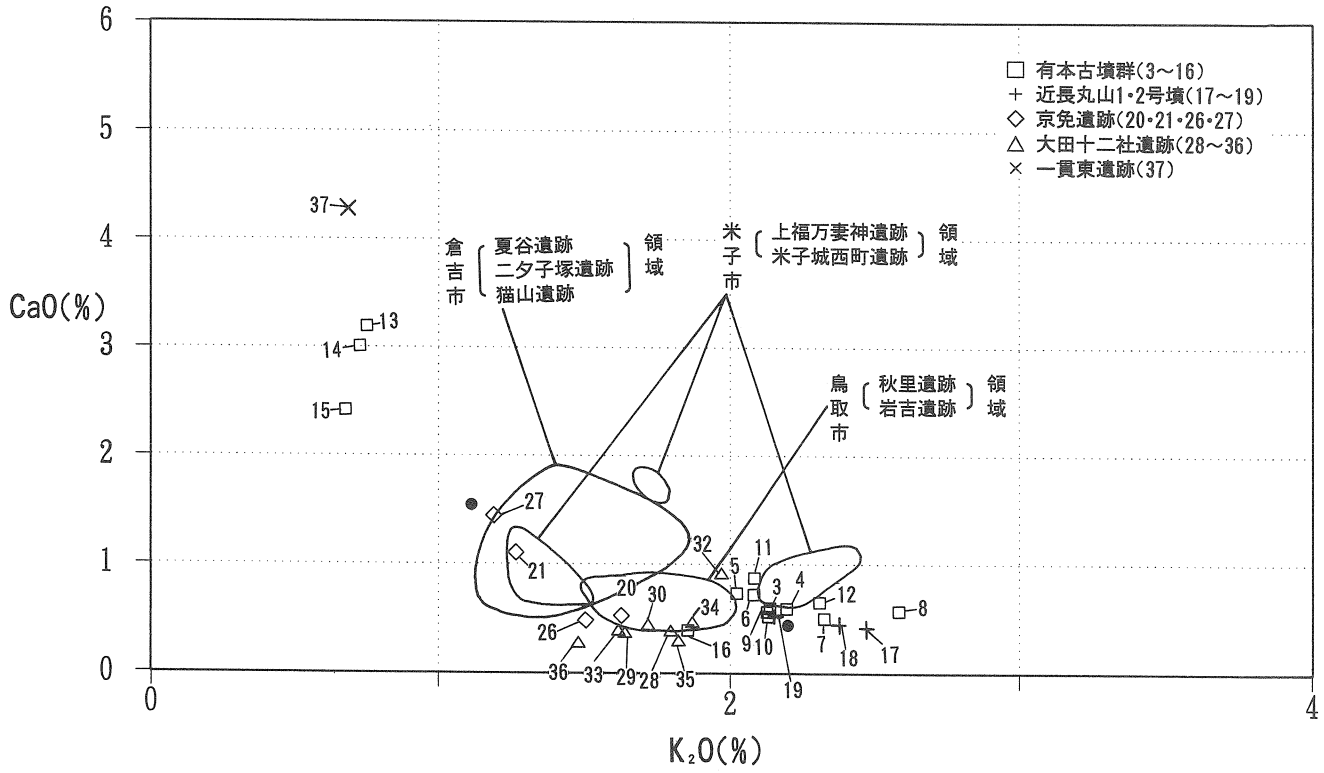
第２図　Sr-Rb 散布図　美作、山陰地方の各遺跡の比較



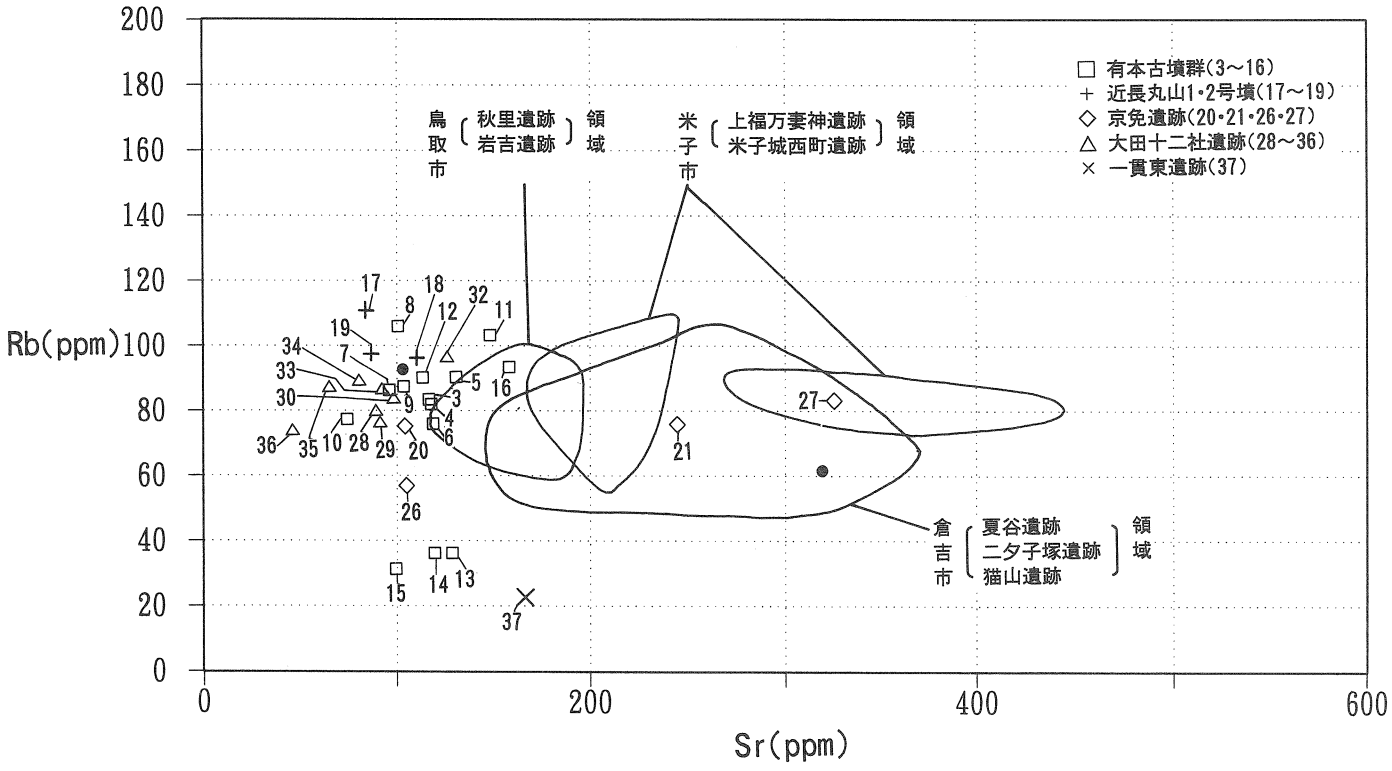
第３図　K_2O-CaO 散布図　有本１号・２号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡出土の鼓形器台と山陰地方の土器との比較



第４図　Sr-Rb 散布図　有本１号・２号墳、京免遺跡、大田十二社遺跡出土の鼓形器台と山陰地方の土器との比較



第5図　K_2O-CaO 散布図　津山市内の各遺跡出土土器と山陰地方の土器との比較



第6図　Sr-Rb 散布図　津山市内の各遺跡出土土器と山陰地方の土器との比較

有本古墳群・男戸嶋古墳出土の赤色顔料について

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1．はじめに

有本1号・4号墳および男戸嶋古墳に使用されている赤色顔料が、ベンガラ(Fe_2O_3)かあるいは朱(HgS)が用いられているか蛍光X線分析法[1]により同定をおこなった。

分析試料は、タングステンカーバイト製の乳鉢で粉末にし、手動式油圧成型器により15トンの加圧成形を施し、コイン状にプレス加工した試料を分析に供した。

2．分析結果

分析した試料の出土地点および分析結果を表1に揚げる。

この結果、有本1号墳第1主体部・第3主体部（試料番号1・2）と4号墳第1主体部（試料番号3）の頭部付近から採取した3点の赤色顔料には、1％～7％の水銀が含まれていることがわかり、朱を使用していると考えられる。そして、有本4号墳第2主体部（試料番号4）の頭部付近の赤色顔料は、第4図の定性分析チャートで水銀のピークが認められず、鉄（Fe_2O_3）が18.77％含有されていることからベンガラと考えられる。

男戸嶋古墳の主体部（試料番号5）出土の赤色顔料は、第5図の定性分析チャートに微量であるが水銀のピークがあることから、朱が用いられていると推測される。また、同古墳の周溝外出土の甕内から出土した試料番号8・9の赤色顔料には、第6図の分析チャートで水銀のピークが認められず、試料番号9の甕内の底部付近の顔料には、鉄（Fe_2O_3）が68.17％も含まれていることから、ベンガラである。また、比較試料として同古墳の主体部床面の土（試料番号6）と主体部小口の粘土（試料番号7）を分析した。この結果によると、これら粘土には鉄（Fe_2O_3）が、9～12％ほど含まれていることがわかる。そして、試料番号5の主体部の顔料には、鉄が14.03％含有しており、粘土よりはやや多めに鉄分が含まれている。このことから、この主体部の赤色顔料には、朱とベンガラの両方が使用されていた可能性も考えられるが、顕微鏡観察など他の分析方法で再検討しなければならない(2)。

（註）

(1)分析装置：セイコー電子工業株式会社卓上蛍光X線分析計 SEA2010L
定量には、ファンダメンタル・パラメーター法（理論計算法）により算出した。

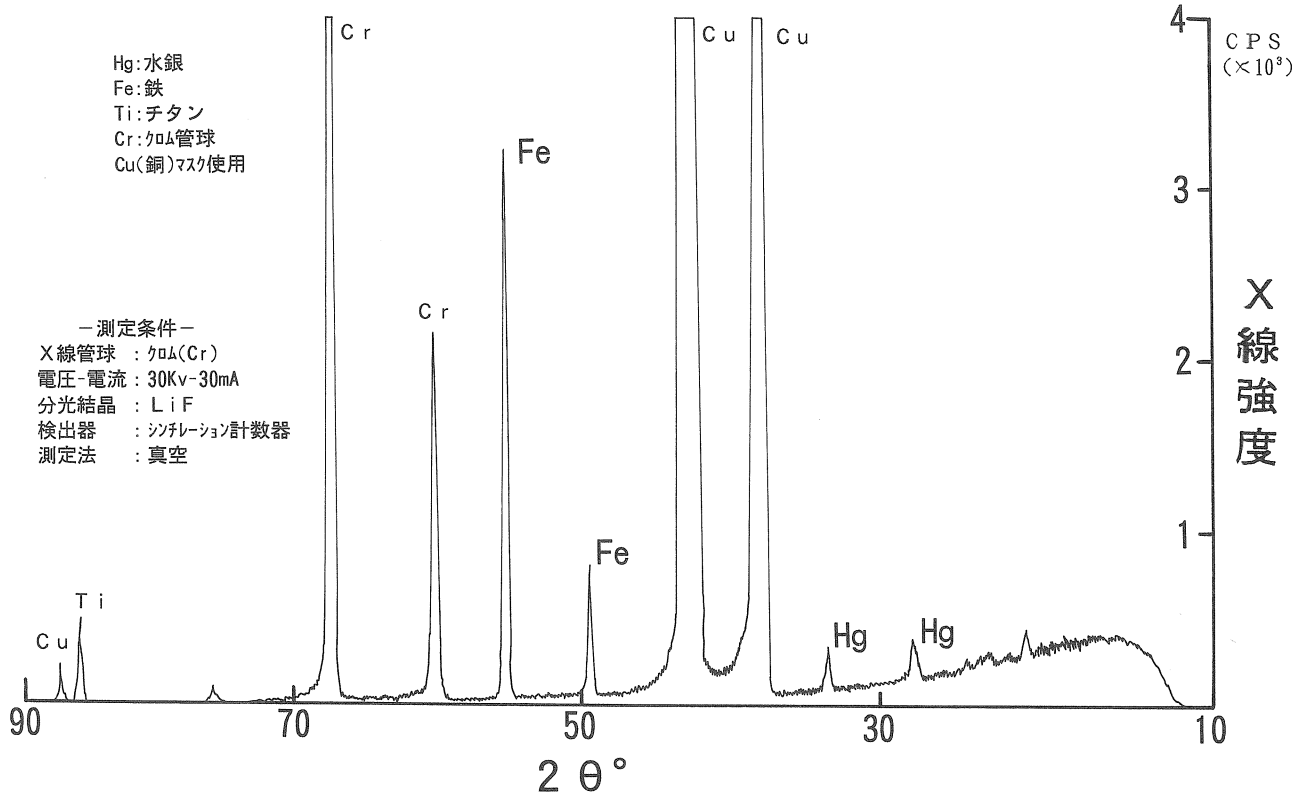
(2)本田光子「西山3号墳出土の赤色顔料について」『田益新田遺跡・西山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告109 pp261-264 1996

この分析では、坏の中にベンガラと朱の両方が入っていることが確認されている。また、本田光子氏の赤色顔料のこれまでの分析で「遺骸に朱、埋葬施設にはベンガラ」という使用方法があることがわかってきており、有本古墳群・男戸嶋古墳に関しても顕微鏡その他の分析法で再検討を要する。

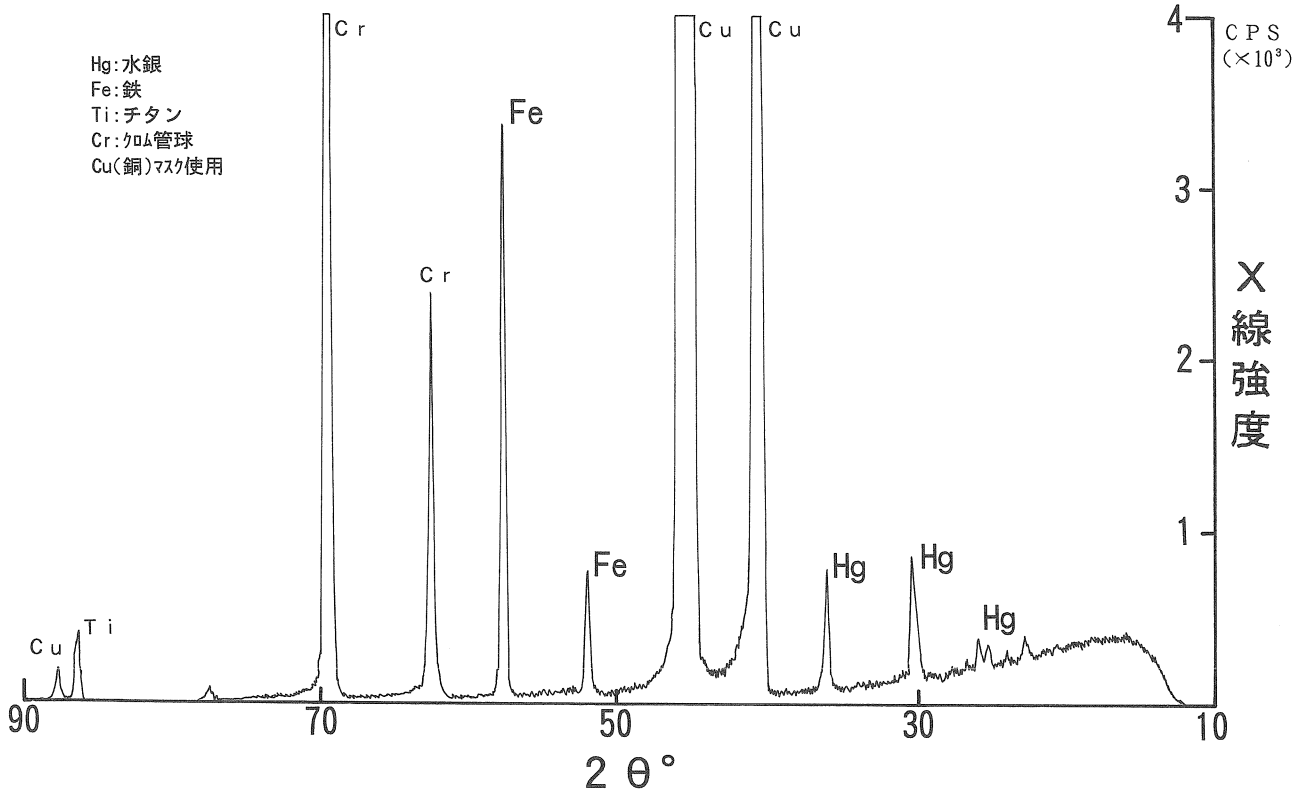
また、筆者が以前分析した近長丸山1号墳第1主体部出土の赤色顔料は、朱と確認されたが、鉄分も34.91％含まれていた。この鉄分が含まれていた原因として、付近にあった鉄器からの汚染とこの時点で考えていたが、現時点ではベンガラも含まれていたことが十分考えられ、再検討を必要とする。

表１　有本古墳群・男戸嶋古墳出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析による分析結果（％）

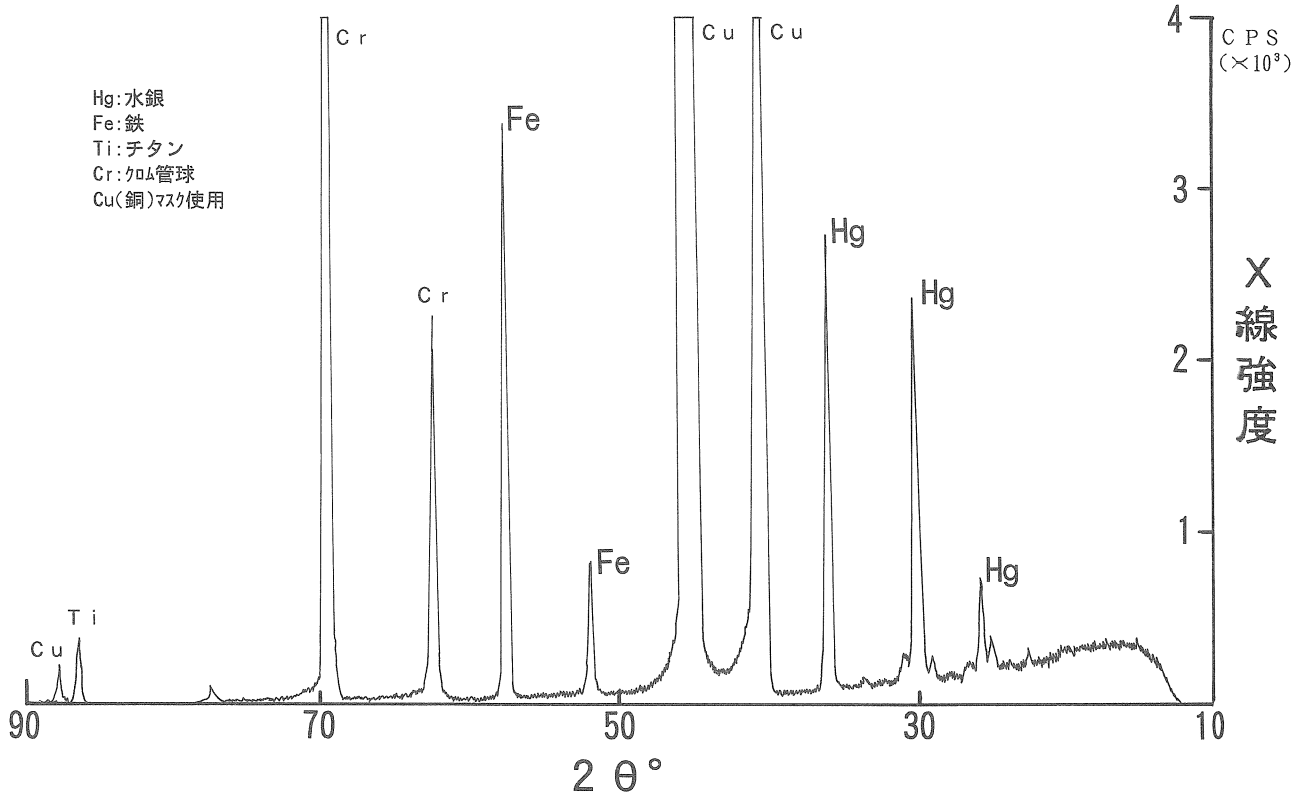
試料番号	遺跡名	出土地点	Fe_2O_3	Hg	SiO_2	Al_2O_3	TiO_2	K_2O	CaO	赤色顔料の同定
1	有本１号墳	第１主体 頭部付近	13.02	0.45	56.66	14.55	1.19	1.56	0.33	水銀、鉄(Fe_2O_3)が13.02%含有(ベンガラかどうか不明)
2	有本１号墳	第３主体 頭部付近	11.27	1.45	62.47	17.41	1.20	4.23	0.29	水銀、鉄(Fe_2O_3)が11.27%含有(ベンガラかどうか不明)
3	有本４号墳	第１主体 頭部付近	11.33	7.40	59.33	15.65	1.24	4.19	0.34	水銀、鉄(Fe_2O_3)が11.33%含有(ベンガラかどうか不明)
4	有本４号墳	第２主体 頭部付近	18.77	－	56.77	15.81	1.62	4.86	0.63	鉄(Fe_2O_3)が18.77%含まれる。ベンガラ
5	男戸嶋古墳	主体部	14.03	微量	60.10	18.75	1.29	4.66	0.10	水銀、鉄(Fe_2O_3)が14.03%含有(ベンガラかどうか不明)
6	男戸嶋古墳	主体部床面土	12.13	－	64.42	16.47	1.13	5.19	0.33	
7	男戸嶋古墳	主体部小口粘土	9.30	－	62.33	19.07	1.30	4.95	0.19	
8	男戸嶋古墳	周溝外甕内口縁付近	21.24	－	54.40	18.34	1.11	4.22	0.08	鉄(Fe_2O_3)が21.24%含まれる。ベンガラ
9	男戸嶋古墳	周口外甕内底部付近	68.17	－	20.61	8.28	0.36	1.21	0.18	鉄(Fe_2O_3)が68.17%含まれる。ベンガラ



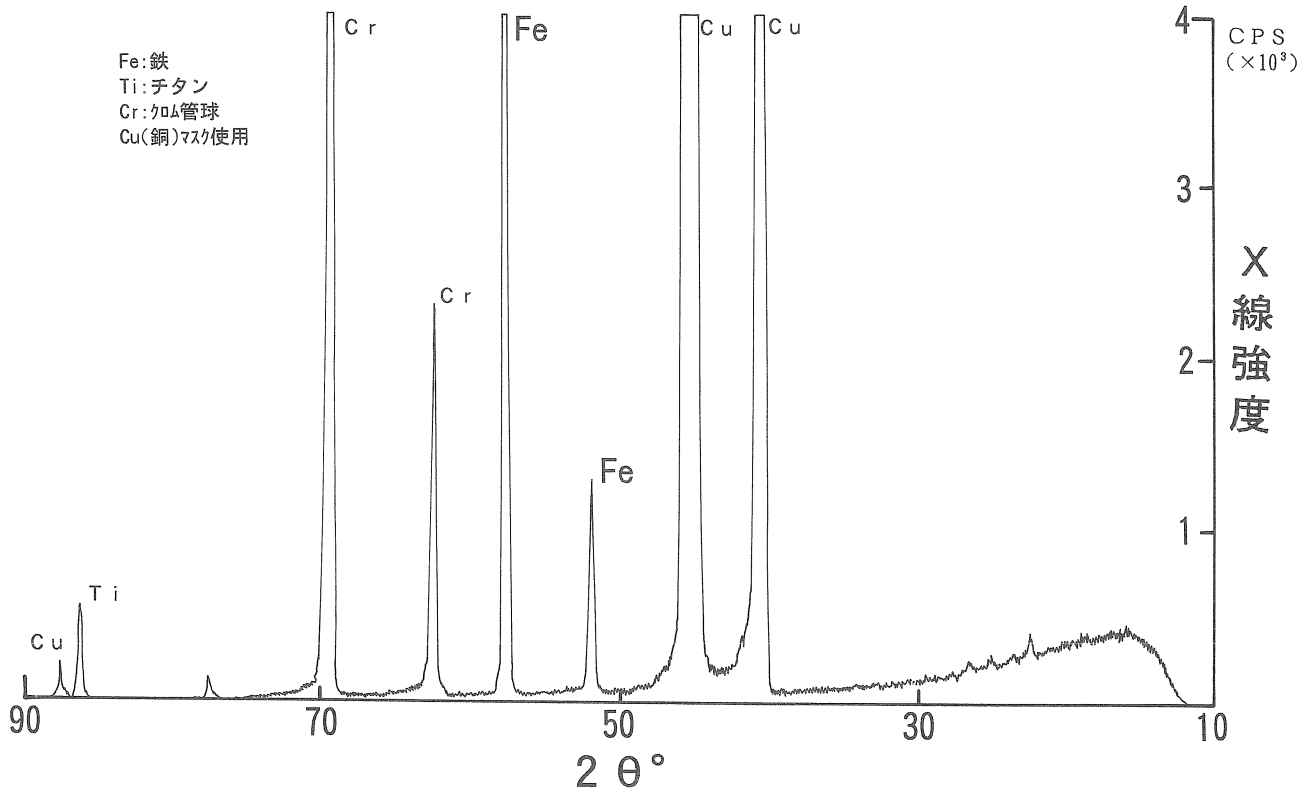
第１図　有本１号墳第１主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート



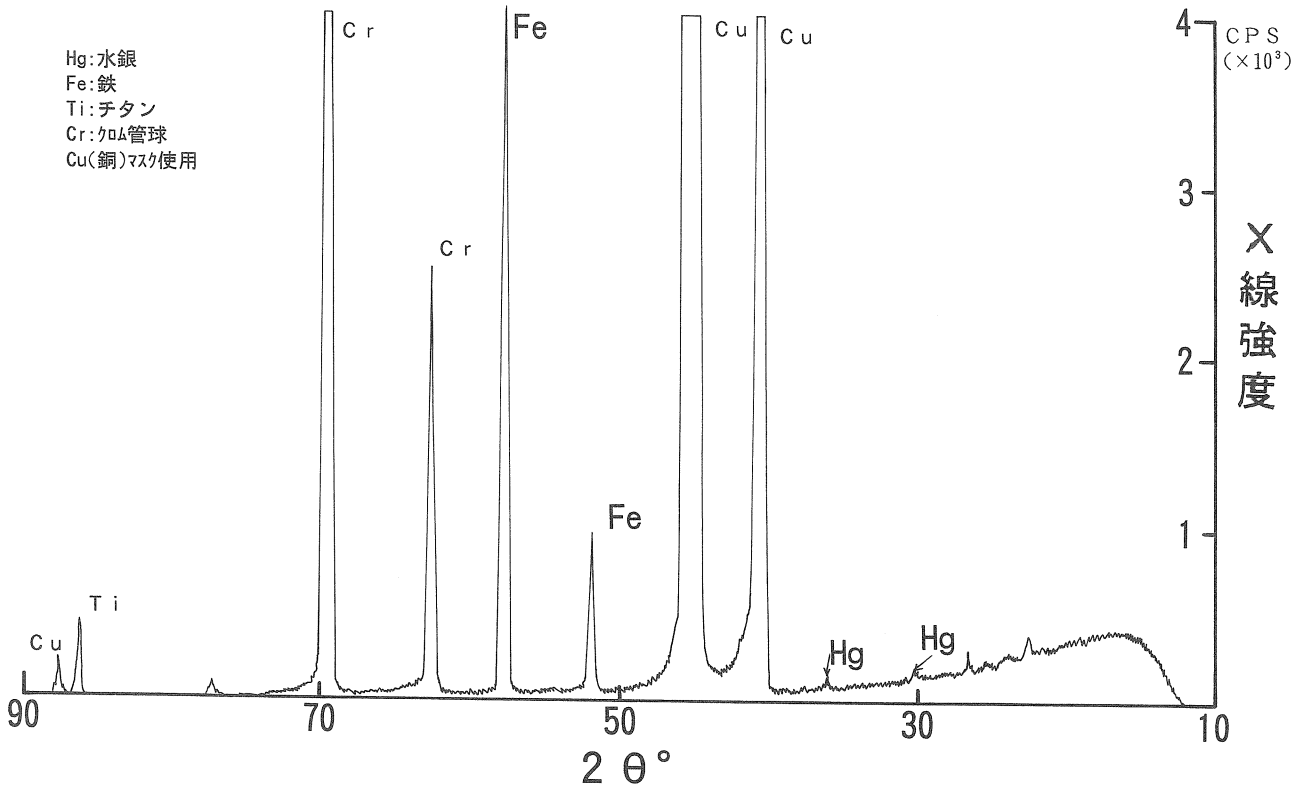
第２図　有本１号墳第３主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート



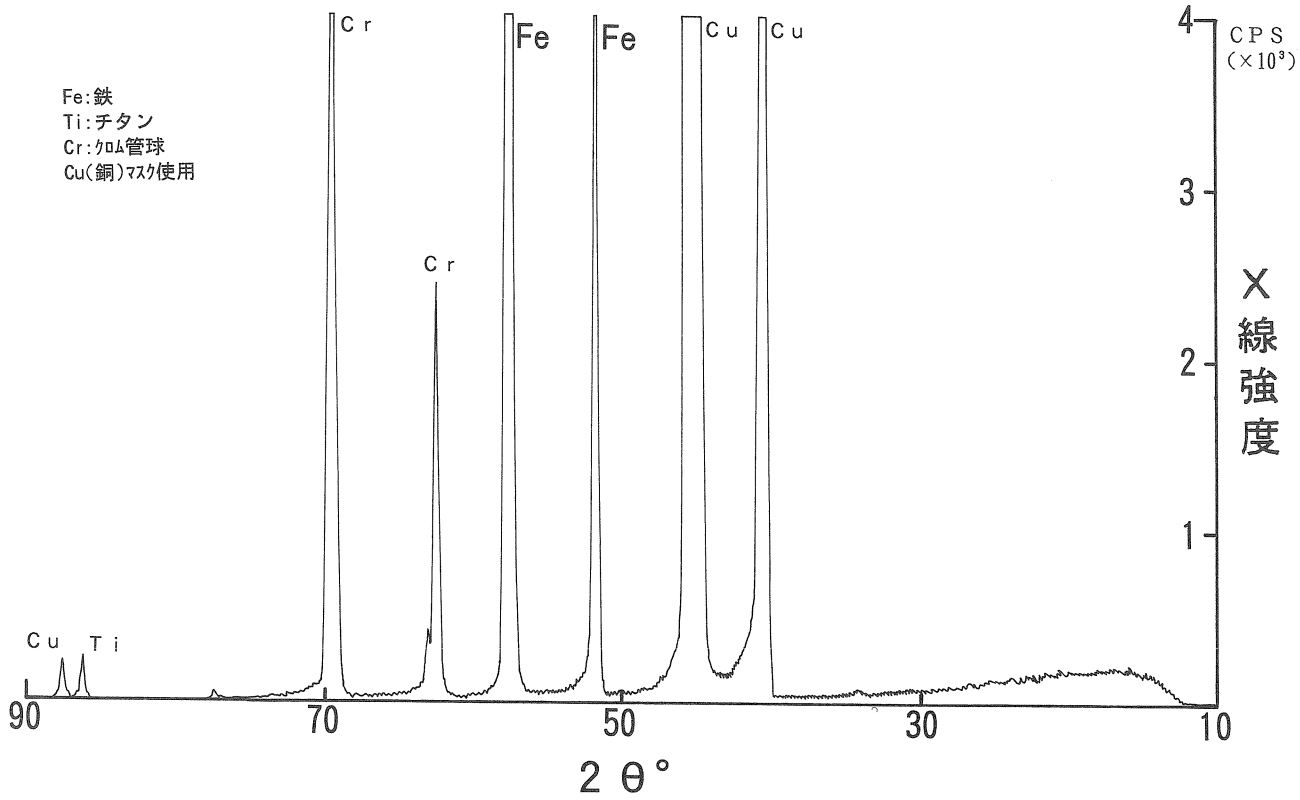
第３図　有本４号墳第１主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート



第４図　有本４号墳第２主体部頭部付近出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート



第５図　男戸嶋古墳主体部出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート



第６図　男戸嶋古墳周溝外甕内(底付近)出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析チャート

Ⅴ まとめ

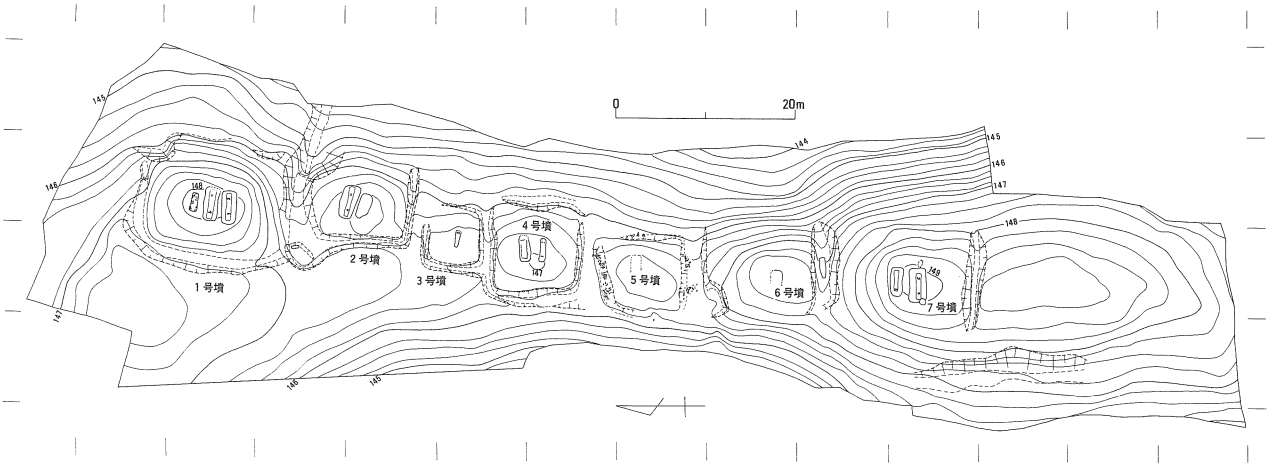
1．有本古墳群の特質と群構成について

有本古墳群は、７基からなりいずれも方墳である（第３表参照）。丘陵の稜線上に築かれているが、よく見ると１～３号墳はやや東に下った緩斜面、４～７号墳は稜線上の立地である。この事は東側に平野部が見渡せる事から、この東側をかなり意識した構築である事が伺える。例えば樹木がさほど無ければ、この東側の平野から各古墳は見上げる事ができるのである。

（墳丘について）

各古墳の墳形、規模、外表施設について考えてみたい。

いずれも方墳ではあるものの規模をみると、１と７号墳が一番大きくまた立地も丘陵南北両端の最高所である。この事は一番良好な位置に大きな１と７号墳が築かれているようである。ただこの中でも痩せ尾根で無い１号墳の方が立地条件としては良いかもしれない。残りの中では３号墳以外がいずれも一辺10m前後であるのに対し、３号墳のみ７m程である。現状でほとんど墳丘は無く、他の古墳が少なか



	墳形（規模）	埋葬施設	出土遺物	備考
１号墳	方墳(13.1×16.2)	第１主体・木棺	鼓形器台．刀子、ガラス製勾玉1・小玉1	鼓形器台を枕に転用
		第２主体・木棺	鎌．鉄斧、鑿状鉄器	枕石
		第３主体・配石木棺？	ヤリガンナ	枕石
		第４主体・木棺		枕石、周溝内
２号墳	方墳(11.9×9)	第１主体・木棺	鼓形器台．鉄剣、ヤリガンナ2、鉄器片	鼓形器台を枕に転用
		第２主体・木棺？		
３号墳	方墳(6.3×6.8)	第１主体・木棺	ヒスイ製勾玉1、碧玉製管玉12、ガラス製小玉3	枕石
４号墳	方墳(10.4×10.2)	第１主体・竪穴式石槨(木棺？)	鉄剣、鉄鏃2、刀子	
		第２主体・木棺	刀子	枕石
５号墳	方墳(8.5～10×9)	木棺？	鉄器片	葺石有り
６号墳	方墳(12.5×10＋)	第１主体・木棺？	鉄器片	
		第２主体・木棺		周溝内
７号墳	方墳(15.8×11＋)	第１主体・木棺	ヤリガンナ、ガラス製小玉1	枕石
		第２主体・木棺		
		土器棺１(壷・高杯)	ガラス製小玉1	
		土器棺２(壷)		

第３表　有本古墳群一覧表

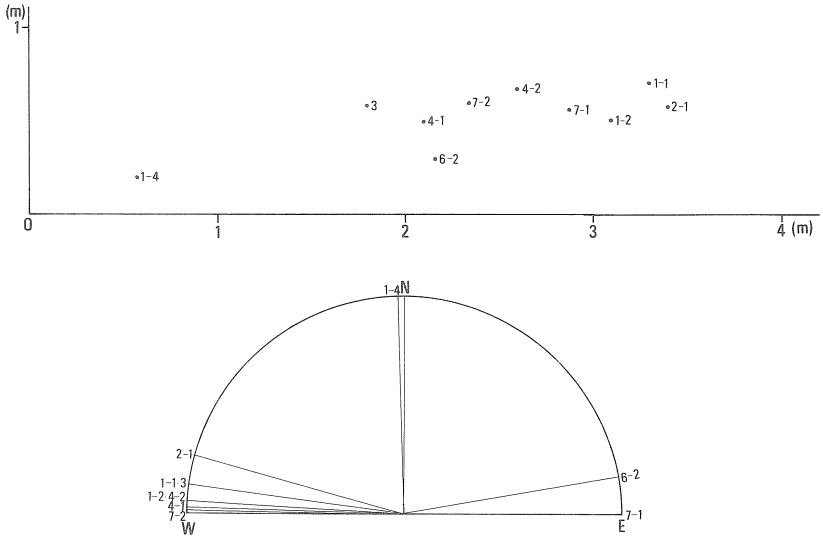
らず盛土があった事からすれば、この３号墳の構築方法がやや異なっているのかもしれない。

本古墳群で特徴的なのが各古墳の周溝が共有している事である。１と２、３と４、４と５、５と６、６と７号墳がそれぞれ共有している。１・２号墳を見れば、土層観察から前後関係は不明だが、規模は１号墳の方が大きいにもかかわらず統一した企画で作られている感がある。と言うのは埋葬施設の位置が多少主軸は異なるが墳丘中央のライン上に配置されているからである。同様に３・４号墳、５～７号墳でも同じ事が言える。よって位置的に３つのグループに分類できる。そしてこれらグループの構築順は現時点では明瞭でないものの、おそらく差ほど時期差は無く、さらに一定の規則性の基構築されている可能性が考えられる。また、比較的平坦面の多い１～４号墳では西側を中心にコの字形に巡らし、痩せ尾根の６・７号墳については南北の丘陵切断のみである。おそらく周溝の無い部分は削り出し整形と考えられる事から、両者間の構築技法と労力を考えれば前者の方が手をかけた構築といえるのではないか。現に１号墳のみ地山ブロックを使用した念入りな構築方法である。ただこれに何らかの勢力関係が存在するのか、ただ立地面だけの違いか、それらについては埋葬施設や副葬品の組成などからから考えてみたい。

また、５号墳のみ葺石を伴い墳形も台形に近い形状である。本古墳群の立地する所からこのような石は採れないためどこかから持ち込まれたものと考えられる。となるとこの古墳の被葬者と石材とに深い関係があるのかもしれない。いずれにしても葺石を使用しているのは５号墳だけであり、なんらかの意味あいがそこに存在するものと考えられる。同様な関係が埋葬施設の種類でも言える。

（埋葬施設について）

第40図によると埋葬施設はいずれも東西方向（１号墳第４主体以外）を向いている。さらに同一古墳であれば各埋葬施設の主軸は数度の違いしかなくほぼ平行である事がわかる。これは当時本地域において埋葬規定が存在していたものと言える。さらに痕跡しかない５・６号墳を除いて考えてみると（５・６号墳も残存する埋葬施設の位置から複数埋葬であった可能性は大きい）、一番小さい３号墳以外は２～３基の複数埋葬である。さらに石材を使用しているのは、１号墳第３主体と４号墳第１主体だけである。その他の８主体はいずれも木棺と推測される。よってこの石材の使用は本地域において当時の主流ではなく、これら石を使用する人物は例えば外部の人、これら埋葬施設の違いに被葬者の出自が反映さ



第40図　有本古墳群木棺推定規模及び主軸方向比較図

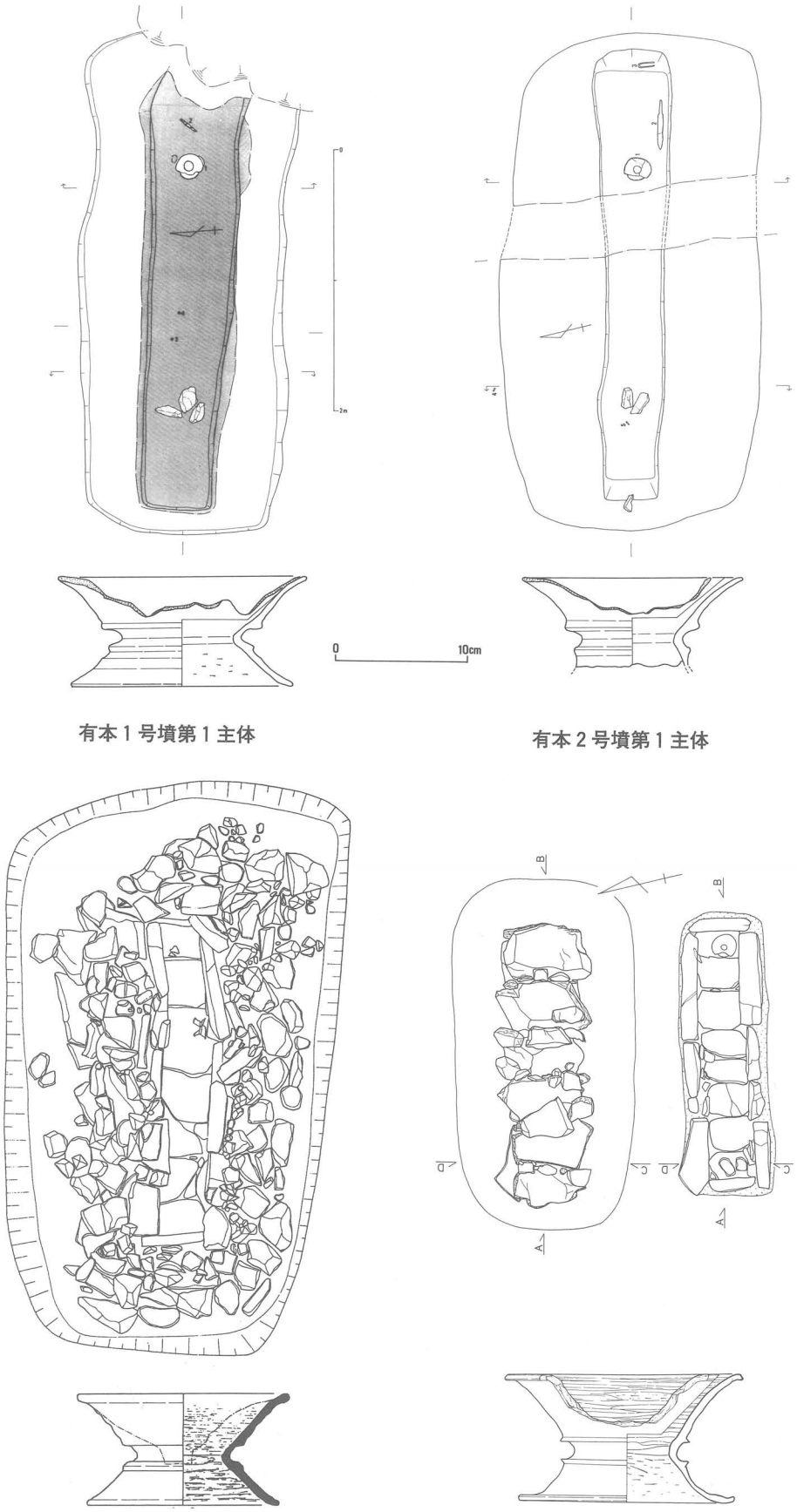
れているといった考えもある。この石を使用した埋葬施設も箱式石棺では無く、配石木棺や竪穴式石槨である点は、方・円墳群で箱式石棺を多様している鏡野町・竹田古墳群（註１）と比べ大きく異なっている。また、本古墳群の埋葬施設の規模（木棺の場合は木棺推定範囲、竪穴式石槨の場合は内法）を比較すれば（第40図）、これによると木棺の形式までは明瞭でないが、いずれも底が平らな形式で３ｍを越えるかなり長大なものもある。木棺は全長は３ｍ前後に集中するが散在的に分布しグルーピングはできない。その中で一番丁寧に作られているのが、１号墳の第１主体で、中心に位置し床には粘土が敷かれていた。また枕では土師器の鼓形器台を転用しているものが先の１号墳第１主体と２号墳第１主体の２つで、いずれも埋葬施設の中では最大規模である。石を使用している４号墳第１主体の竪穴式石槨は内法全長は２ｍほどで、木棺と比べると棺自体は小さいものである。さらにこの鼓形器台は山陰地方の特徴である事からこの被葬者と山陰地方との関係がある程度推測される。となると先程述べた一番丁寧な１号墳第１主体の木棺に鼓形器台が使用されている事から、本古墳群と山陰地方とが密接な関係であることを示しているのかもしれない。この事は例えば３号墳の副葬品の中に碧玉製の管玉、ヒスイ製の勾玉など山陰ないしは日本海地方産と考えられるものが含まれている事からも推測できるのではなかろうか。しかし、この鼓形器台の胎土分析の結果、生産地の特定までには至っていないのが現状である（第Ⅳ章白石氏分析結果参照）。

また、枕石を見ると、１～４個の石を使用するものがあり一様ではない。さらに頭位を見ると、枕の外に副葬品を置くといった特徴から、東枕がほとんどで中には例えば２号墳第１主体や４号墳第２主体の様に明らかに２体入っていた可能性が考えられるものもある。例えば、箱式石棺で人骨の残っていた津山市・沼６号墳（註２）、下道山南古墳（註３）では明らかに差し違う形で２体埋葬している。また、総社市・殿山古墳群（註４）の場合、中心主体は２人埋葬であるといった諸例もある。これら事例から２体埋葬といった風習が小規模の方墳に限って普遍的に見られるものとなれば、本古墳群の１号墳第１・２主体、２号墳第１主体、４号墳第２主体、７号墳第１主体は２体埋葬されていた可能性が十分考えられる。そして、この２人は下道山南古墳の場合は30～40歳男性と30歳女性、殿山21号墳の場合は女性２人と言った結果がでており、これらを今後どのように評価するかはさらに検討を要する。いずれにしてもこれら方墳群は複数埋葬で、１棺複数埋葬といった一つの埋葬原理が存在していたようである。さらに、赤色顔料の塗布が１号墳第１・３・４主体、４号墳第１・２主体の枕付近に見られ、おそらく遺骸の頭部に塗られていたものと推測される。これらの分析結果、有本１号墳第１・３主体と４号墳第１主体には水銀が検出され、朱を使用している。また、４号墳第２主体は水銀は検出されずベンガラであった。この事は埋葬施設によって朱とベンガラの使い分けが存在していた事も考えられる。さらに男戸嶋古墳の主体では水銀と鉄とが含まれており、両方を使用していた可能性も考えられる（第Ⅳ章白石氏分析結果参照）。この時期朱を使用しているのは津山市では近長丸山１号墳（註５）第１主体（木棺）ぐらいである。

（副葬品について）

副葬品は枕に使用した土師器をのぞけば大きく鉄器と玉類とにわけられる。

まず鉄器では剣、刀子、鏃、斧、鎌、鉇などがある。その内複数副葬されていたのは、１号墳第２主体の３点（鎌、斧、鑿）、２号墳第１主体の４点（剣、鉇２、鑿状鉄器）、４号墳第１主体の４点（剣、鏃２、刀子１）があるのみで、その他は単品副葬である。また鉄器の中には故意に曲げられているものが複数ある。特に１号墳第２主体の鑿状鉄器、２号墳第１主体の鉇などは曲げ方が大きく使用不可能な



有本１号墳第１主体

有本２号墳第１主体

横見２号墳墓第１主体

竹田５号墳中央北棺

第41図　岡山県内鼓形器台を枕に使用する埋葬施設（埋葬施設…Ｓ＝１：50、土器…Ｓ＝１：５）

状態である。この様な行為を行っている例としては津山市・近長丸山１・２号墳（註５）の鉇や鉄鏃などに見られるものの、すべてにみられる行為ではないので、ある特定の埋葬風習の一端であろう。ただし鉄器の副葬についても鉄剣を副葬する人物は限られており、本古墳群では２号墳第１主体と４号墳第１主体だけである。前述した埋葬施設に粘土を使用することで、比較的丁寧に作られた１号墳第１主体には鉄剣はなく、刀子があるのみである。ただこの主体にはガラス製の勾玉が副葬されている。この勾玉が当時どれほどの意味合いがあったかは明確ではなく、これらガラス勾玉がヒスイの代用とも考えられている。ただこのガラスの成分が分析の結果鉛バリウムシリカガラス（註６）である事から津山周辺で作られたものではなく、どこからか運ばれたものと考えれば、当時の勢力図式がそこに反映されているのかもしれない。ちなみにガラス勾玉の類例を求めれば、山陽町・用木５号墳（註７）から２点出土しているぐらいである。色調はよく似ているが形態はやや異なっている。さらに時期的には新しくなると、美作町・北山１号墳（６世紀前半、註８）から出土例がある。これは形態・色調が大きく異なっている。

また、鉄鏃は４号墳第１主体から２点出土している。その内第24図３の類例は総社市・殿山９号墳（註４）にあり、茎の曲がった形態まで似通っている。これら鉄鏃が少数で副葬される形態は弥生時代からの系譜を引くもので、その葬送儀礼が残ったものと評価されている（註９）。

つぎに玉類であるが、３号墳以外は単品での出土である。３号墳のみ勾玉１、管玉12、ガラス小玉３がまとまって出土している。ただこの３号墳は鉄器を伴なわず古墳の規模も最小である。となるとこの玉類複数埋葬と鉄器と言った副葬品の組成の違いには特別の意味合いがあり、その中で鉄器の方が副葬品としての比重が大きかった可能性も考えられる。また、管玉は大きさから３種類（全長１、1.5、２㎝前後）に分類され、例えば時期的に古い古墳の一種と考えられる津山市・近長丸山１号墳の事例が１㎝以内の細見の形に統一されている事、古墳出現期のものは長さ１㎝内外を中心とし、２㎝を越えるものはないと言った見解（註４）もあり、本例が大きさや色調にばらつきがあり、中に２㎝を越える大形が含まれている事から、時期的にはやや新しい要因が含まれているのであろうか。

２．有本古墳群の時期について

本古墳群の時期について先の副葬品の検討をふまえ、出土した土器を中心に考えてみたい。出土した土器として７号墳の土器棺の壷、高杯、１・２号墳の枕に転用した鼓形器台などがある。

鼓形器台を副葬（枕に転用）する古墳としては、鏡野町・竹田５号墳（註１）、新見市・横見２号墳墓（註10）がある（第41図）。特に竹田５号墳は４基の埋葬施設があり、いずれも箱式石棺でその内の１主体から鼓形器台が出土している。また、横見２号墳墓は竪穴式石槨と言うよりは箱式石棺の周囲に石を積んだものと木棺１基があり、前者から出土している。この鼓形器台は器高の変化で大まかな時間的推移がおえるが、器高をくびれ部の径で割った数値で比較する研究もある。ちなみに竹田５号墳が1.26、横見２号墳墓が1.19、有本１号が0.93、２号墳は欠損するため明瞭でないが１以上と考えられる。この数値は1.3～1.5前後と1.1～1.0前後で時期的に分類される分析結果（註11）があり、これに従えば竹田５号墳以外はほぼ後者に分類され、時期的には岡山県南の亀川上層式（註12）併行に比定される事となる。この鼓形器台は、岡山県内では広範囲に分布し、県南では、山陽町・用木３・４号墳（註７）、総社市・殿山９号墳（註４）、岡山市・百間川原尾島遺跡（註13）、同・加茂Ａ・Ｂ遺跡（註14）、県北では津山市・大田十二社遺跡（註15）、同・二宮遺跡（註16）、落合町・宮の前遺跡（註17）、久米町・

法事坊遺跡（註18）などにある。また、本古墳群近くの田邑丸山９号墳（註19）でも採集されているが、これについては古墳であったかどうかは明瞭でない。これらの出土例を先の数値で分類比較すれば、鼓形器台は弥生時代の終わり頃から見られる器形であり、時期的な分布を細かく検討すれば、そこに当時の山陰地方との交流の図式が明瞭に現れてくるであろう。

次に土器棺１の土師器壷であるが、二重口縁で胴部が球形に近くわずかながら底部が存在する。また、外面にハケを施し内面にも緻密な同様なハケを施している。まず器形では、胴部が球形に近く新しい様相と、底部を残すといった古い様相とが見受けられ、後者を伝統的なものと解することもできる。ただ内面ハケといった特徴は古い様相でもある。ちなみに近長丸山１号墳（註５）の土器棺の壷と比べた場合二重口縁の屈曲部が外方にはっきりとつまみ出し、胴部が球形ではなく卵形に近い点など相違点が多い。また、津山市・兼田丸山古墳（註20）の壷と比べると二重口縁の作りは良くにている。ただし胴部については存在しないため比較できない。この土器はこの口縁部を枕に転用していた様である。また、土器棺２は二重口縁の壷であるが口縁の外反が大きい器形である。この口縁の作り方は土器棺１と良く似ているが、やはり近長丸山２号墳の同様な壷と比べるとやはり屈曲部の作り方が大きく異なり、つくりが簡単になっている。さらに、津山市・日上天王山古墳（註21）の壷と比べると頸部の形態が異なり、屈曲部のつくりがしっかりし、ほぼ直線的に開いている点は異なっている。

以上、両者の壷とも近長丸山古墳群と比べると後出の要素が多いと考えられる。この近長丸山古墳群の時期を伝統的な要素を残すものの、全体的なプロポーションから先の亀川上層期併行であると考えている。となるとこの有本７号墳の土器もこれにやや後出する時期であろう。この時期を最近の土師器の編年にあえてあてはめると、近長丸山１号墳は高橋編年（註22）の10期の終わり頃、有本７号墳は11期にほぼ併行するものと考えられ、これらはいずれも近畿地方の布留式（註23）併行期の範疇で理解できる。

高杯は杯部の高さが短くほぼ水平に張り出し外反する広がりも大きい。脚部の広がりも大きく接地面が多く全体的器高の低いといった特徴がある。さらに、杯部の屈曲部がかなり下方につままれている特徴は先の壷の作りとは大きく異なっている。例えば、これが土器棺の蓋専用に使用しやすいように、器高の低い形で作られ、仮に伝統性を残しているとすれば、日常の土器と簡単に比較できない可能性も考えられる。このような中であえて時期を類推すれば、脚部が中空で脚裾に透かし孔が見られず、この特徴は先の高橋編年の11期から見られる特徴でもある。この事から先の壷とほぼ同時期であろう。

また方墳を中心に群をなす類例をとしては、総社市・殿山古墳群（註４）、鏡野町・東花穴古墳群（註24）、方墳と円墳とで群をなすものとして津山市・崩レ塚古墳群（註25）、鏡野町・竹田古墳群（註１）、久世町・中原古墳群（註26）などがある。その内、殿山古墳群は弥生時代の終わりから連綿と作られており、東花穴古墳群は出土した土器（壷）を見る限りでは、胴部の最大径が肩部付近にありかすかに底部を残している。そのため先の近長丸山古墳群よりは先行するものと考えられる（註24）。竹田古墳群については古墳時代の前期（４世紀代）、中原古墳群については、中期（５世紀後半）の古墳群とされる。また美作地方の方墳について集成し検討したものでは、時期としては４～６世紀前半まで、群構成から４～５類型に分類できるといった見解もある（註27）。さらに、最近の見解では墳形面からのみ言えば方墳を中心とした古墳群は、５世紀以前を中心とし、６世紀になると円墳を中心に群をなし、その変化の中に社会的画期を読み取ろうと試みたものもある（註28）。また、方墳を仮に規模（一辺20m）によって二つに分類した見解では、20m以下のものは複数で群をなすものがほとんどで、副葬品の中に優劣を

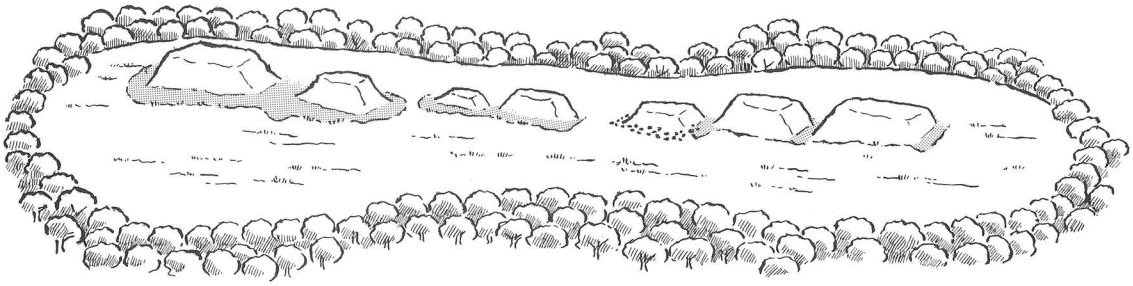
つけるものはほとんど存在しない。埋葬施設も木棺や箱式石棺が多く副葬品も皆無ないしは鉄器や玉類が単品で副葬される場合が多い。また、20m以上のものは、単独で存在する場合が多く街道筋に一定の距離間隔に配置されているのではないかと言った見解もある。この場合は埋葬施設は竪穴式石槨や粘土槨で副葬品の中に武具や武器類が豊富に含まれることから、この被葬者を軍事面の統率者と結び付ける見解もある（註29）。本古墳群は円墳を伴わず、規模も20m以下と言う事からすれば5世紀以前その中でも古手の古墳群のひとつと推測される。

以上、出土遺物や古墳群の構成を総合的に考えれば本古墳群の時期は、県南の土器形式では高橋編年の11期、ほぼ布留式併行期と推測され、古墳時代前期の所産と推測される。その中でもある程度の時間幅が存在するものと考えられるが、県北の土器編年がまだ確立していない以上、これの詳細については今後の課題である。ただ、1号墳の鼓形器台と7号墳の壷を比べた場合、前者の方がやや古手の様相のようにも考えられ、またこれら古墳群の性格については、周辺の古墳群の様相も含め、次回の報告書で改めて検討したい。

(註1)今井堯他『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会1984
(註2)今井堯他「美作津山市沼六号墳調査報告」『古代吉備第6集』古代吉備研究会1969
(註3)岡本寛久他「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会1977
(註4)平井勝「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47』岡山県教育委員会1982
(註5)小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津山市教育委員会1992
(註6)分析は、奈良国立文化財研究所による。倉敷埋蔵文化財センターの綾野早苗氏にお世話になった。
成果は改めて公表する予定である。
(註7)神原英朗『用木古墳群』山陽町教育委員会1975
(註8)二宮治夫他「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』岡山県教育委員会1973
(註9)松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究第37巻第4号』考古学研究会1991
(註10)下澤公明「横見墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』岡山県教育委員会1977
(註11)藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第4号』日本考古学会1979
(註12)柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会1977
(註13)江見正巳他「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会1980
(註14)島崎東・光永真一「足守川加茂A・B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会1995
(註15)中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981
(註16)高畑知功他「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会1978
(註17)二宮治夫他「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』岡山県教育委員会1976
(註18)橋本惣司他「法事坊遺跡」『嫁山遺跡群』久米開発事業に伴う文化財調査委員会1979
(註19)湊哲夫他「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会1975
(註20)本村豪章「美作・津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」『MUSEUM No.285』1974
(註21)近藤義郎他「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会1997
(註22)高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告9』1988
高橋護「土師器の編年中国・四国」『古墳時代の研究6』雄山閣1991
(註23)寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊奈良県立橿原考古学研究所1986
(註24)立石盛詞「鏡野町東花穴古墳群の調査」『調査団ニュース第3号』岡山県遺跡保護調査団1992
立石氏に土器を実見させていただいた。
(註25)小郷利幸他「崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会1990
(註26)福田正継「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』岡山県教育委員会1995
(註27)土居徹「美作の方墳」『古代吉備第7集』古代吉備研究会1971
(註28)小郷利幸「美作における横穴式石室導入前の群集墳について」『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集津山市教育委員会1992
(註29)小郷利幸他「岡山市足守地域の地域史研究（3）」『古代吉備第17集』古代吉備研究1995

図　　版

発掘作業員の皆さん



有本古墳群復元想像図

図版1

1．有本古墳群周辺
（南から）

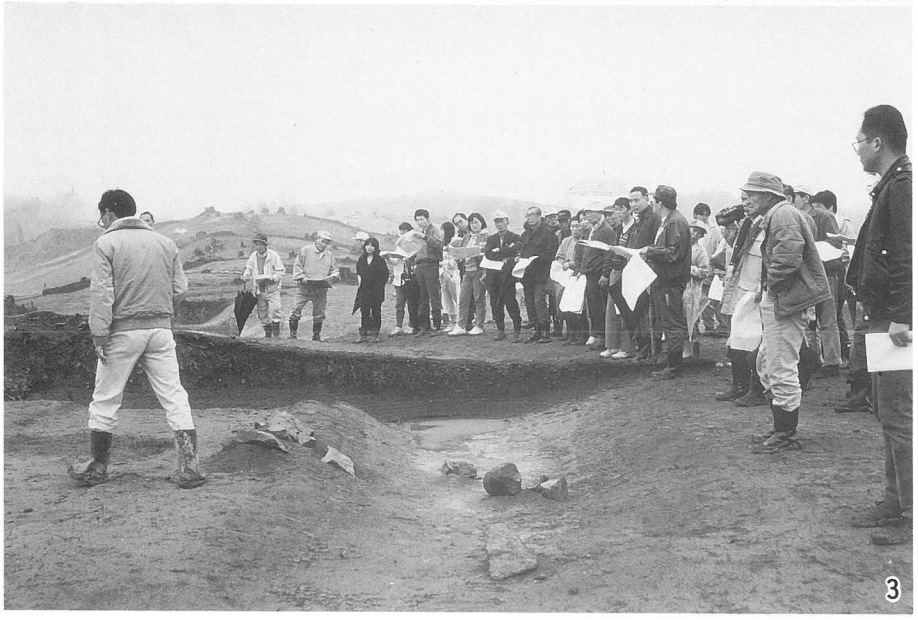
2．有本古墳群周辺
（北西から）

3．有本古墳群周辺

図版 2

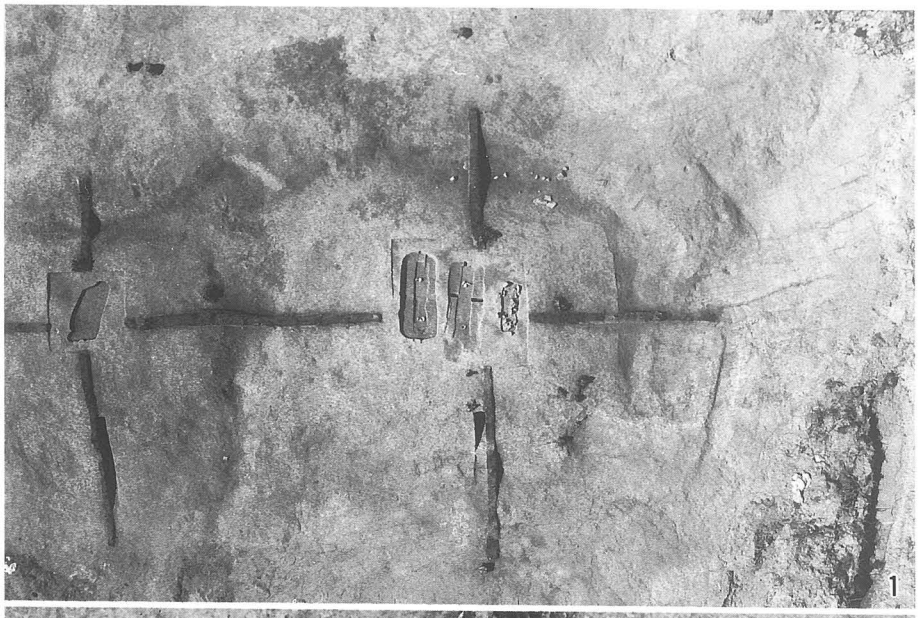
1 .有本古墳群全景

2 .調査風景

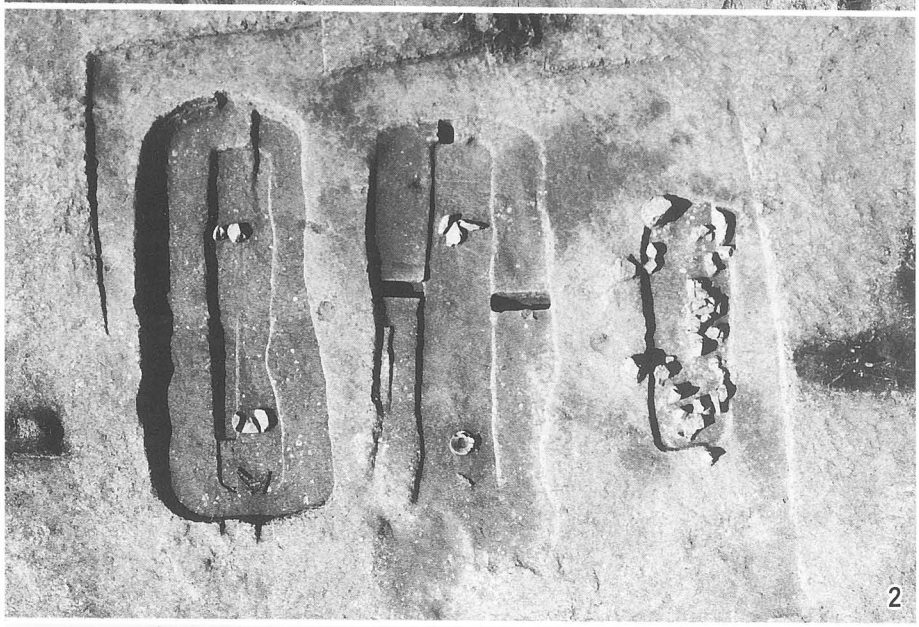


3 .現地説明会

図版 3



1．有本 1 号墳全景



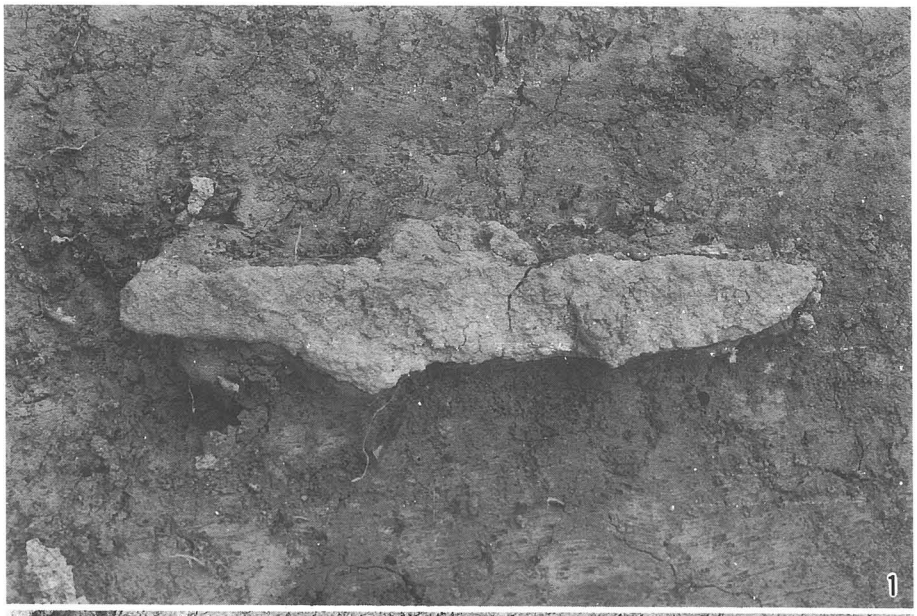
2．1 号墳埋葬施設

3．1 号墳盛土

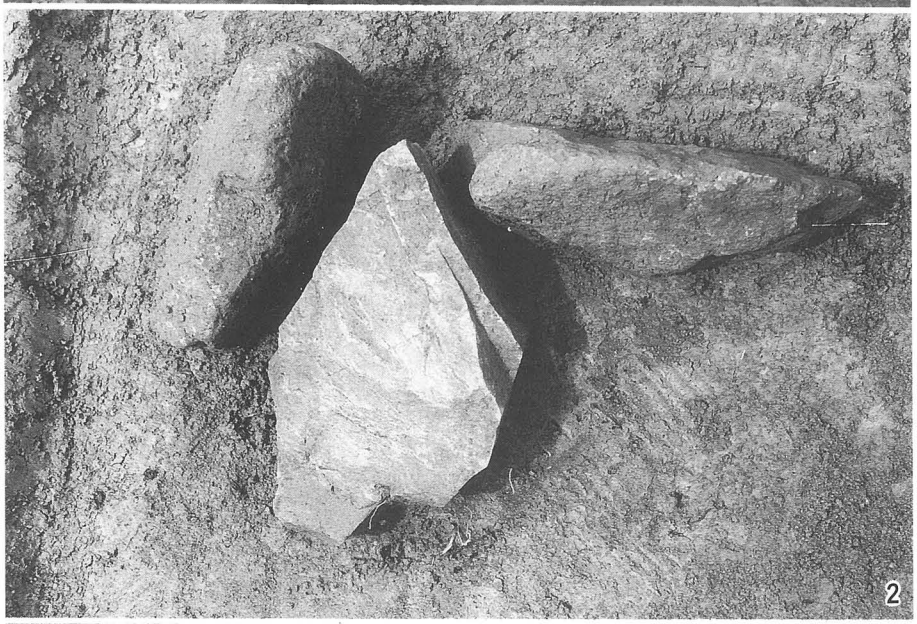
1　1．1号墳第1主体

2　2．1号墳第1主体
出土遺物

図版 5



1．1号墳第1主体
出土遺物



2．1号墳第1主体
出土遺物

3．1号墳第1主体
床面粘土

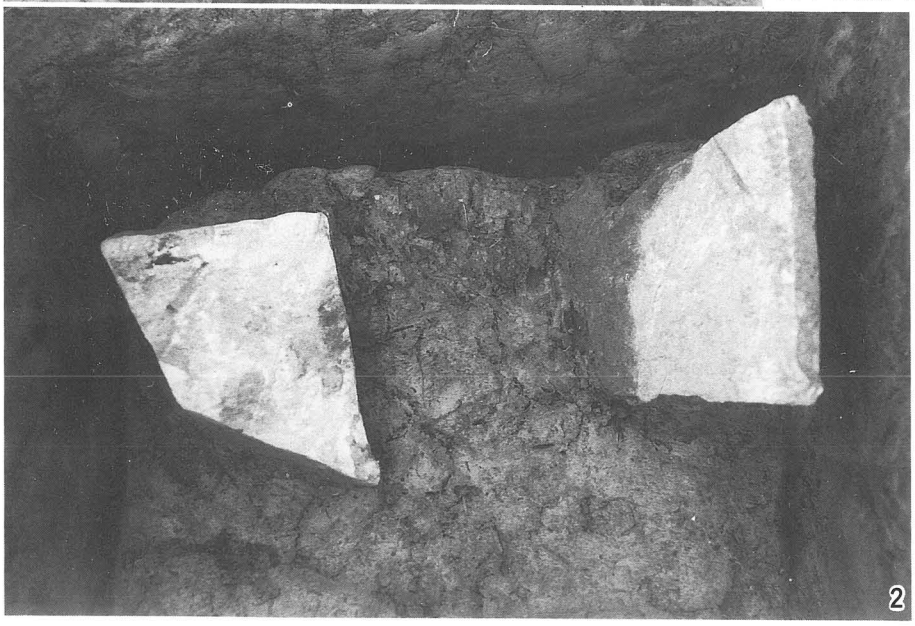
1　1．1 号墳第 2 主体

2　2．1 号墳第 2 主体
出土遺物

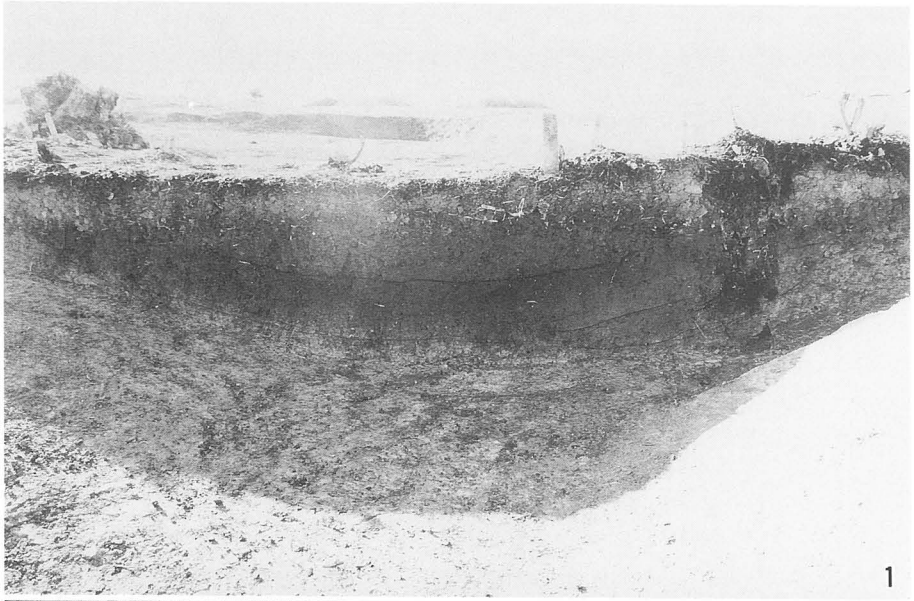
1 1．1 号墳第 3 主体

2 2．1 号墳第 3 主体
枕石付近

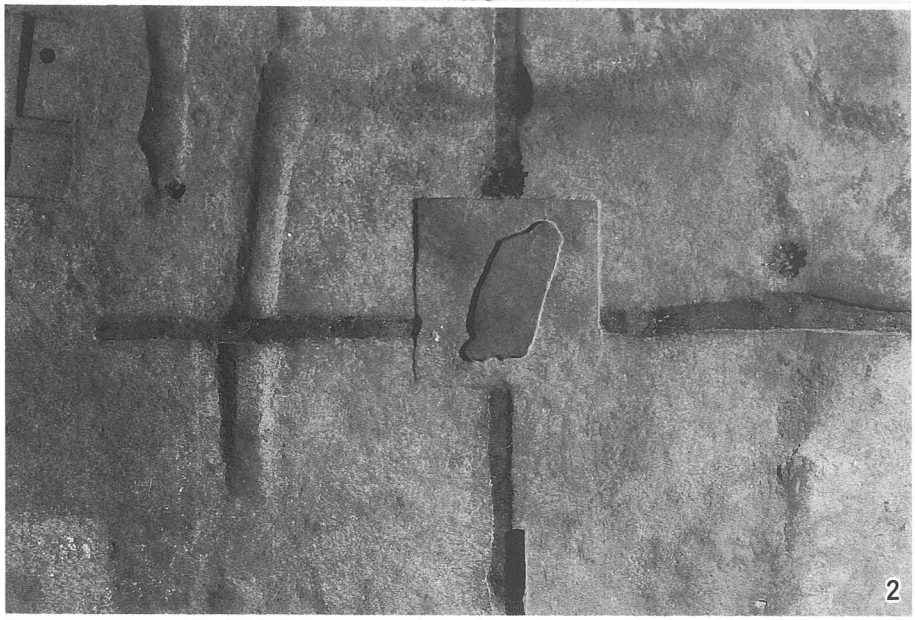
1　1．1号墳第4主体



2　2．1号墳第4主体
枕石

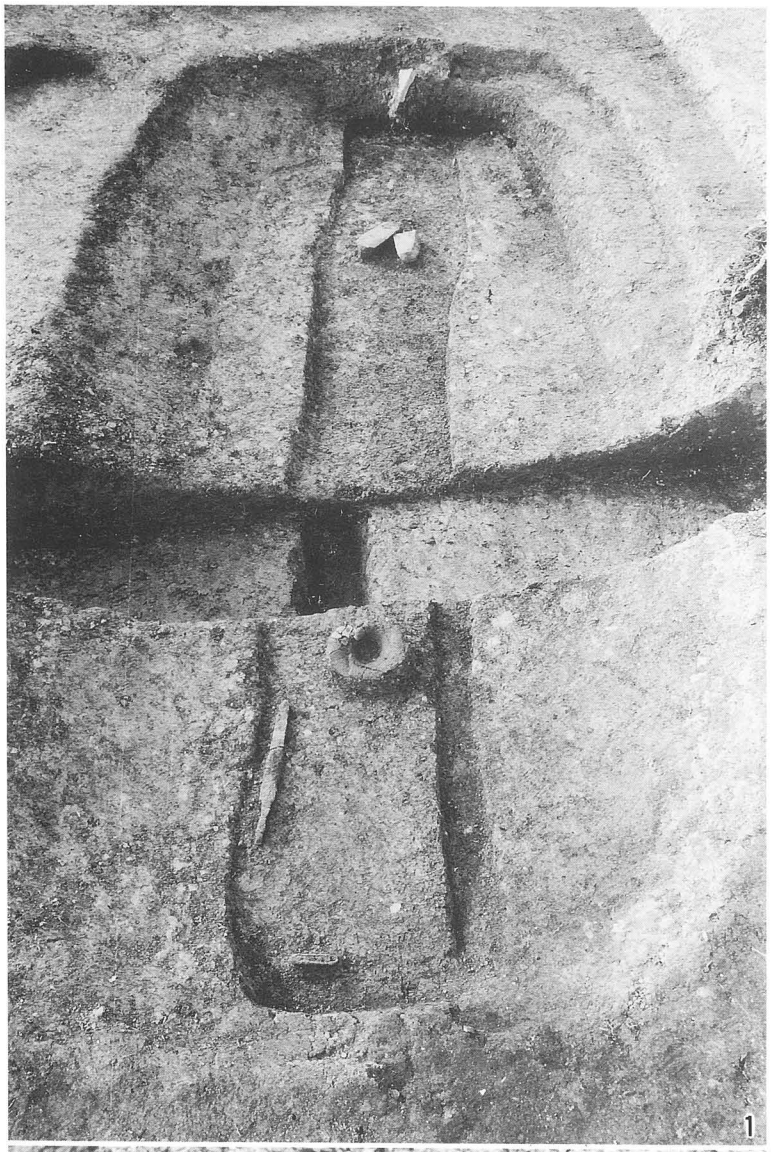


1　1．1号墳周溝(南側)

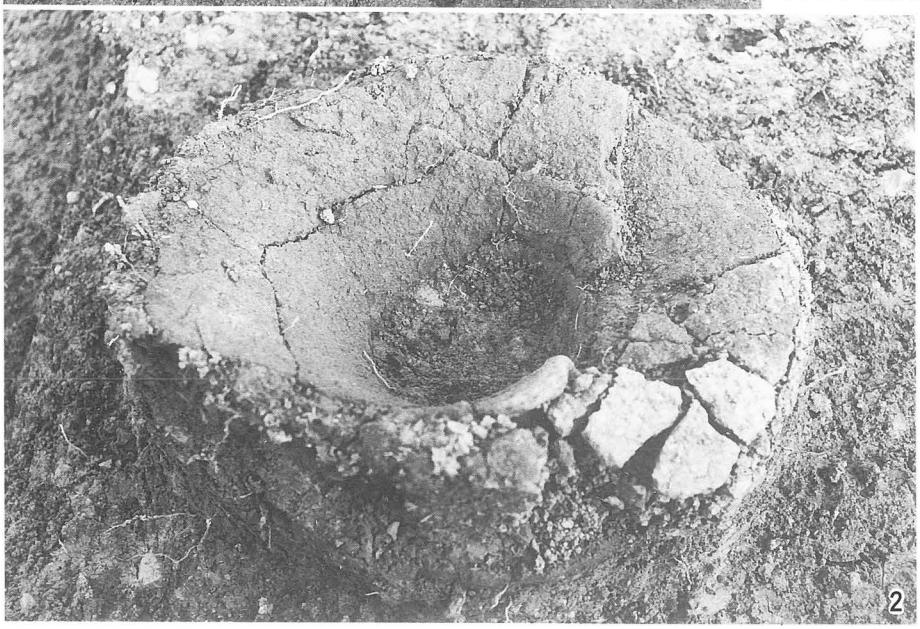


2　2．有本2号墳全景

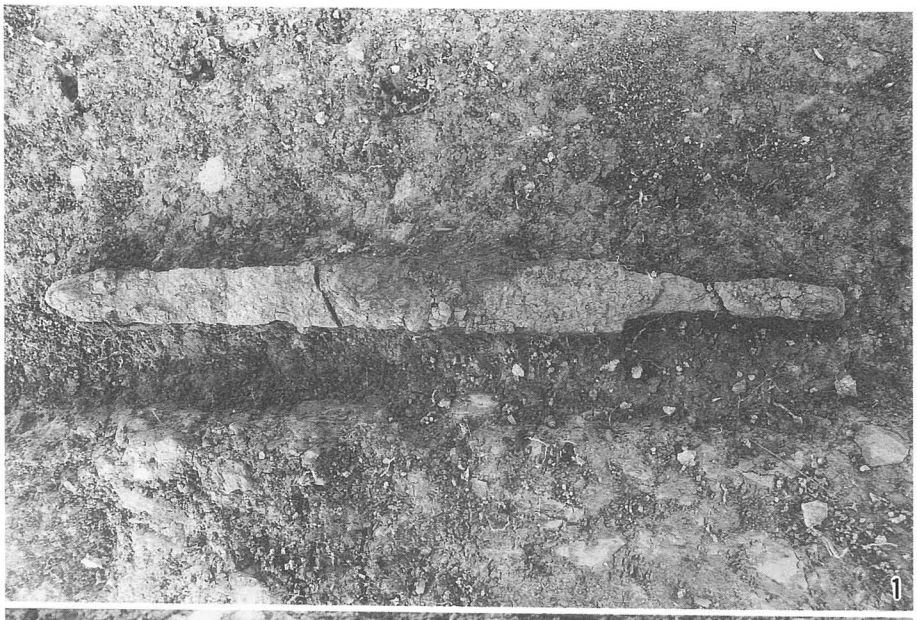
3　3．2号墳周溝(西側)



1　1．2号墳第1主体



2　2．2号墳第1主体
出土遺物

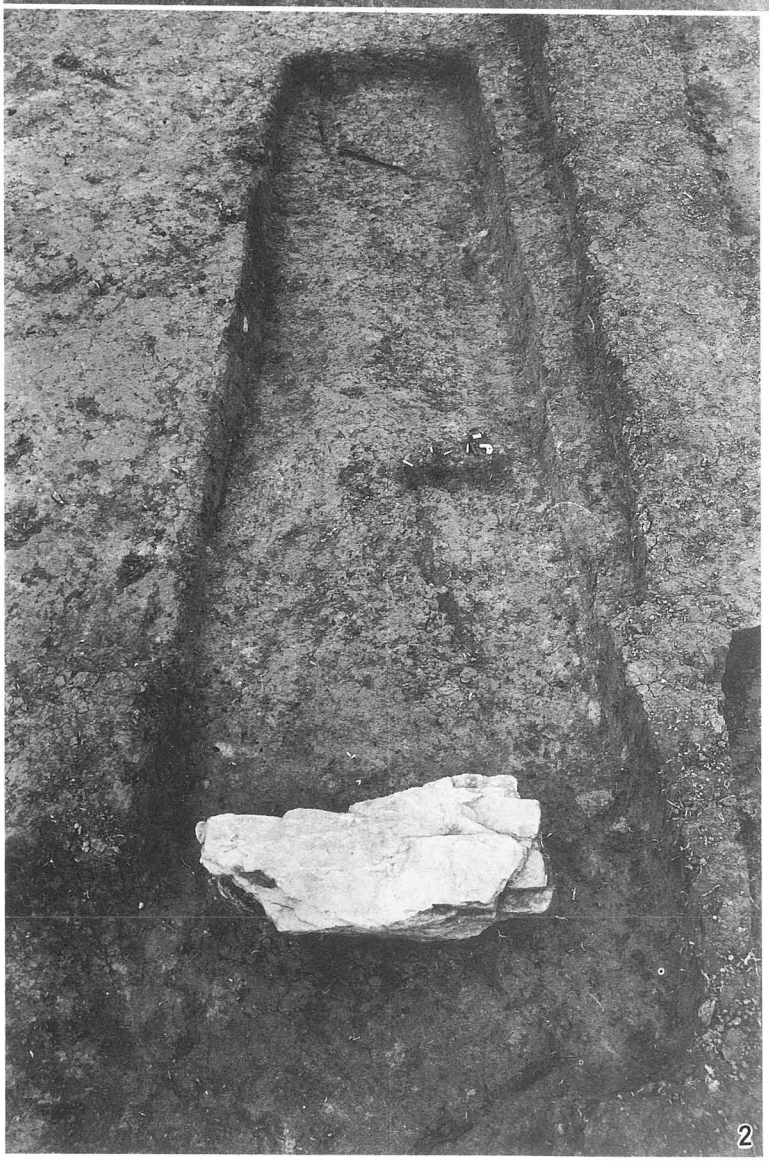


1．2号墳第1主体
出土遺物

2．2号墳第1主体
出土遺物

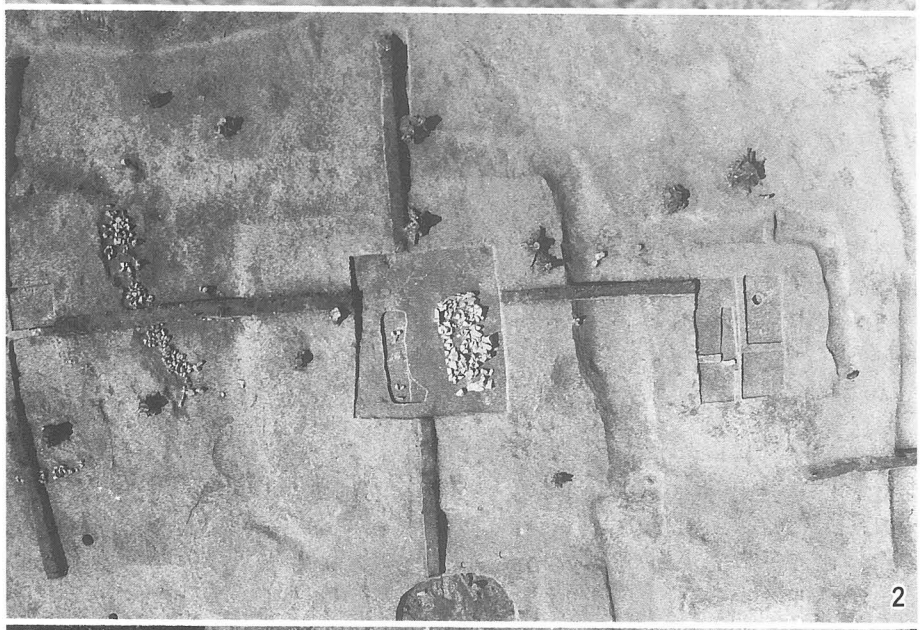
3．2号墳第2主体

1 1.有本3号墳全景

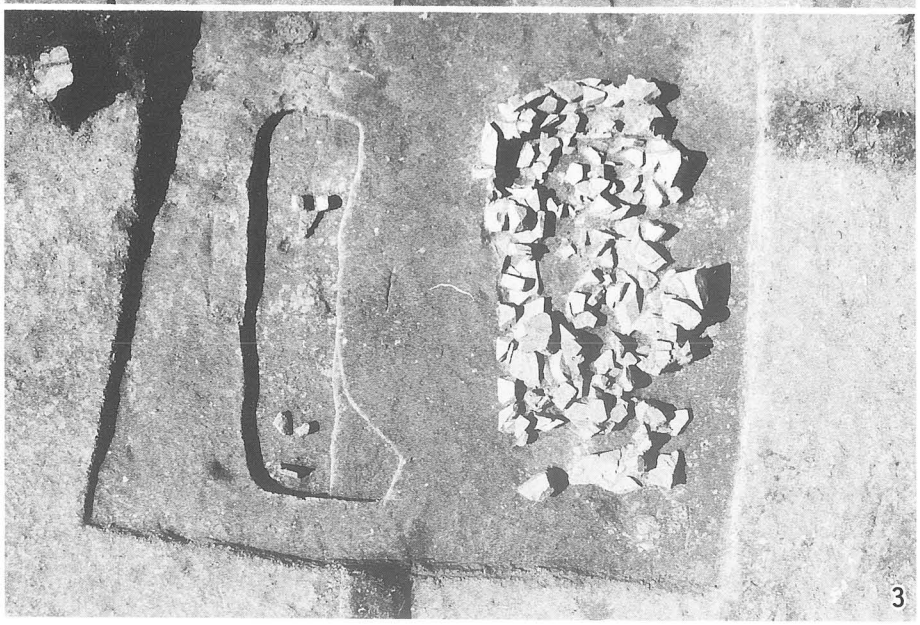


2 2.3号墳主体

1．3号墳主体
出土遺物



2．有本4号墳全景



3．4号墳埋葬施設

1．4号墳第1・2主体
検出状況

2．4号墳第1主体
作業風景

1．4号墳第1主体

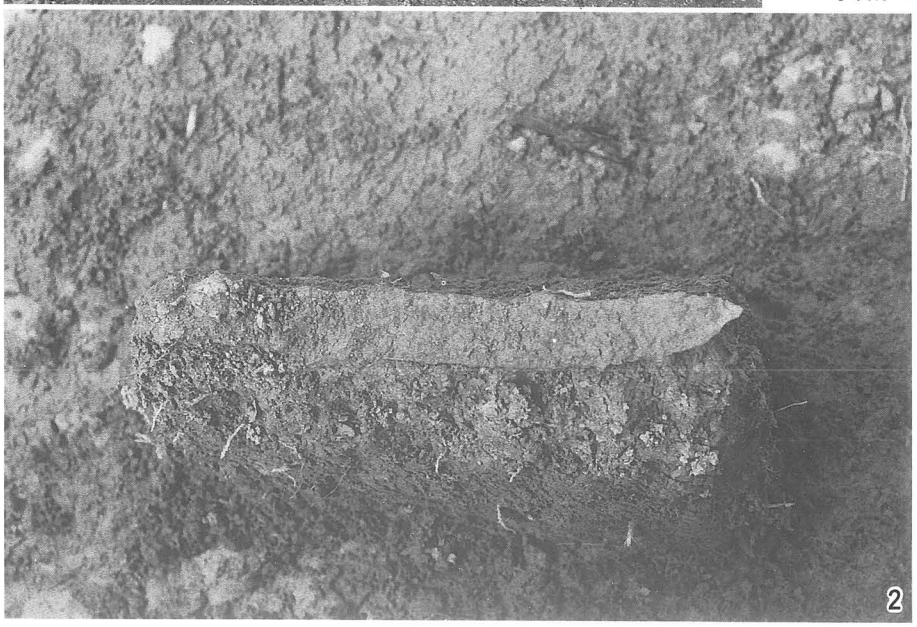
2．4号墳第1主体
小口部分

1．4号墳第1主体
側石部分

2．4号墳第1主体
出土遺物

3．4号墳第1主体
出土遺物

1．4号墳第2主体



2．4号墳第2主体
出土遺物

1．4号墳第2主体
枕石

2．有本5号墳全景

3．5号墳葺石状況

1．5号墳葺石状況

2．5号墳主体

3．5号墳主体出土遺物